

福岡市博多区

# 那珂深ヲサ遺跡

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集

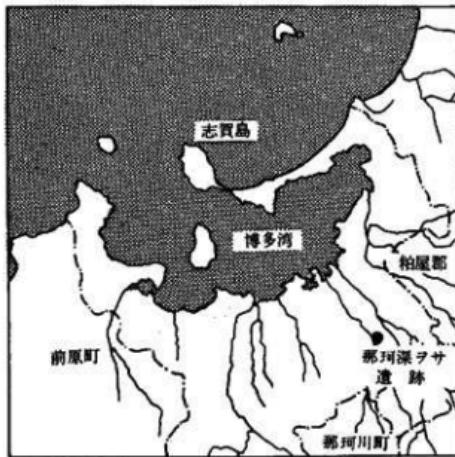
1982

福岡市教育委員会

福岡市博多区  
那珂深ヲサ遺跡

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集



1982

福岡市教育委員会



## 序 文

福岡市博多区の板付遺跡は、弥生時代の環溝集落と水田址が発見されるなど、わが国における稲作文化の成立を立証する上で著名な遺跡として知られています。

板付遺跡に近接した那珂に団地造成が計画され、建築局の委託を受けた福岡市教育委員会は昭和53年度から56年度にかけ埋蔵文化財の発掘調査を行ないました。調査によって古墳時代から近世におよぶ水田と水利施設が確認されるなど新たな知見をもたらす成果を収めることができました。

本書は昨年度につづき、55年度と56年度の調査の記録を収録したものですが、市民の皆さんに広く活用いただき文化財保護への関心を高め、合せて研究資料の一つとなれば幸いです。調査から報告書の作成まで多くの人々のご協力と助言をいただき、ここに深甚の謝意を表すものです。

昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

1. 本書は、福岡市住宅供給公社による市営住宅那珂園地建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が埋蔵文化財の発掘調査を実施した『那珂深ヲサ遺跡』の第2次（昭和55年度）と第3次（昭和56年度）の調査報告書である。
2. 遺跡の発掘調査区は、福岡市博多区大字那珂字深ヲサから字下原の一部にまでおよぶが、その大半は字深ヲサに位置するため、遺跡名は第1次と同様に『那珂深ヲサ遺跡』とする。
3. 遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、古藤国生（事務担当）があたり、本書の執筆・編集は飛高と力武が協議、分担して行なった。
4. 出土木器の樹種同定については九州大学農学部の松本易先生と林弘也先生にお願いし、その結果を第3章に収録した。なお、第3章の図版、表は他の章の番号とは区別し、通し番号となっていない。
5. 本書の作成にあたって、次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

岩水真弓　河野徹也　武本延子　藤たかえ　小島由美子  
中村満代　花畠照子　溝口博子　安武裕子

また福岡市文化課の柳田純孝、塙屋勝利、柳沢一男、二宮忠司、横山邦穂、浜石哲也、田中寿夫氏、および田坂大藏（福岡市美術館）、倉住靖彦（九州歴史資料館）氏等の助言と協力を得た。
6. 卷末には、昭和55年第2次発掘調査中に市営住宅新那珂園地建設に先立って発掘調査を実施した『那珂君林遺跡』の調査報告と、昭和55年道路拡幅工事で発見され、緊急調査した『那珂沼口遺跡』の調査報告を合わせて収録した。
7. 本書に記載した土器・土製品・石器・木製品の実測図と写真は、それぞれ縮尺を統一している。
8. 那珂深ヲサ遺跡の図面、写真などの記録類と出土遺物は、昭和57年2月に開館した福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	9
1. 発掘調査に至るまで.....	9
2. 発掘調査の組織と構成.....	9
第2章 調査の記録.....	10
1. 調査の概要と経過.....	10
(1) 試掘調査.....	10
(2) 第1次発掘調査.....	10
(3) 第2次発掘調査.....	14
(4) 第3次発掘調査.....	19
2. 遺跡の層序.....	20
3. 出土遺構.....	22
(1) B区.....	22
第4号溝.....	22
溝状遺構.....	23
第3号横状遺構.....	24
第3号溝.....	26
(2) C区.....	27
(3) D区.....	29
第5号溝.....	29
第6号溝.....	29
第1号竪穴.....	30
4. 出土遺物.....	33
(1) 土器.....	33
(2) 石器.....	67
(3) 土製品.....	67
(4) 木製品.....	68
第3章 那珂深ラサ遺跡から出土した木製遺物の樹種同定.....	85
第4章 おわりに.....	95

## 挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1 試掘土層柱状図	第2章-(1)	10
Fig. 2 那珂深ヲサ遺跡周辺地形図(昭和5年縮尺1/5000)	第2章-(2)	12
Fig. 3 那珂深ヲサ遺跡周辺地形図(昭和54年縮尺1/5000)	第2章-(2)	13
Fig. 4 第1～3次調査発掘区図(縮尺1/1000)	第2章-(3)	15
Fig. 5 A区土層柱状図	第2章-2	20
Fig. 6 B4・5区東壁土層断面実測図(縮尺1/400)	第2章-2	21
Fig. 7 D18・25区南壁土層断面実測図(縮尺1/200)	第2章-2	21
Fig. 8 D18区第3号擲状遺構実測図(縮尺1/100)	第2章-3	25
Fig. 9 B19・20区第3号溝実測図(縮尺1/200)	第2章-3	26
Fig. 10 C区遺構実測図(縮尺1/200)	第2章-3	28
Fig. 11 D23区流水出土状況実測図(縮尺1/40)	第2章-3折りこみ	28-29
Fig. 12 D24区第1号竪穴実測図(縮尺1/40)	第2章-3	30
Fig. 13 第1号竪穴出土土器実測図(縮尺1/3)	第2章-3	31
Fig. 14 土師器表形土器分類図	第2章-4	34
Fig. 15 出土土器実測図(1)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	36
Fig. 16 出土土器実測図(2)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	37
Fig. 17 出土土器実測図(3)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	38
Fig. 18 出土土器実測図(4)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	39
Fig. 19 出土土器実測図(5)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	40
Fig. 20 出土土器実測図(6)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	41
Fig. 21 出土土器実測図(7)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	42
Fig. 22 出土土器実測図(8)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	43
Fig. 23 出土土器実測図(9)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	44
Fig. 24 出土土器実測図(10)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	45
Fig. 25 出土土器実測図(11)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	46
Fig. 26 出土土器実測図(12)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	47
Fig. 27 出土土器実測図(13)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	48
Fig. 28 出土土器実測図(14)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	49
Fig. 29 出土土器実測図(15)(縮尺1/3)	第2章-4(1)	50

## 本文頁

Fig. 30 出土石器・土製品実測図(縮尺 3 / 5 )	第 2 章 - 4 ( 2 + 3 )	67
Fig. 31 出土木製品実測図(1) (縮尺 1 / 4 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	73
Fig. 32 出土木製品実測図(2) (縮尺 1 / 4 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	74
Fig. 33 出土木製品実測図(3) (縮尺 1 / 4 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	75
Fig. 34 出土木製品実測図(4) (縮尺 1 / 4 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	76
Fig. 35 出土木製品実測図(5) (縮尺 1 / 4 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	77
Fig. 36 出土木製品実測図(6) (縮尺 1 / 4 + 1 / 8 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	78
Fig. 37 出土木製品実測図(7) (縮尺 1 / 4 + 1 / 8 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	79
Fig. 38 出土木製品実測図(8) (縮尺 1 / 4 + 1 / 8 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	80
Fig. 39 出土木製品実測図(9) (縮尺 1 / 4 + 1 / 8 )	第 2 章 - 4 ( 4 )	81

## 表 目 次

## 本文頁

Tab. 1 出土土器観察表(1)	第 2 章 - 4 ( 1 )	51
Tab. 2 出土土器観察表(2)	第 2 章 - 4 ( 1 )	52
Tab. 3 出土土器観察表(3)	第 2 章 - 4 ( 1 )	53
Tab. 4 出土土器観察表(4)	第 2 章 - 4 ( 1 )	54
Tab. 5 出土土器観察表(5)	第 2 章 - 4 ( 1 )	55
Tab. 6 出土土器観察表(6)	第 2 章 - 4 ( 1 )	56
Tab. 7 出土土器観察表(7)	第 2 章 - 4 ( 1 )	57
Tab. 8 出土土器観察表(8)	第 2 章 - 4 ( 1 )	58
Tab. 9 出土土器観察表(9)	第 2 章 - 4 ( 1 )	59
Tab. 10 出土土器観察表(10)	第 2 章 - 4 ( 1 )	60
Tab. 11 出土土器観察表(11)	第 2 章 - 4 ( 1 )	61
Tab. 12 出土土器観察表(12)	第 2 章 - 4 ( 1 )	62
Tab. 13 出土土器観察表(13)	第 2 章 - 4 ( 1 )	63
Tab. 14 出土土器観察表(14)	第 2 章 - 4 ( 1 )	64
Tab. 15 出土土器観察表(15)	第 2 章 - 4 ( 1 )	65
Tab. 16 出土土器観察表(16)	第 2 章 - 4 ( 1 )	66
Tab. 17 出土木製品一覧表(1)	第 2 章 - 4 ( 4 )	82
Tab. 18 出土木製品一覧表(2)	第 2 章 - 4 ( 4 )	83

## 図 版 目 次

本文対照頁

P.L. 1	那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真（1980年11月撮影：約1/15000）	9
P.L. 2	(1) 那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真（1981年2月撮影）	9
	(2) 那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真（1981年2月撮影）	9
P.L. 3	(1) 那珂深ヲサ遺跡全景（1978年3月 第1次発掘調査）	10
	(2) 第1次発掘調査（A区） 第4号溝 構造遺構	10
P.L. 4	(1) 第2次発掘調査（B区） 遺構全景	22
	(2) B区遺構全景	23
P.L. 5	(1) B4区杭列A	26
	(2) B4区杭列A	26
P.L. 6	(1) B4区杭列	16
	(2) B19・20区第3号溝	26
P.L. 7	(1) B4・5区東壁土層断面	21
	(2) B4・5区東壁土層断面 第4号溝	21
P.L. 8	(1) B4・5区東壁土層断面 第3号溝	21
	(2) B4・5区東壁土層断面 第1・2号溝	21
P.L. 9	(1) C区全景（東から）	27
	(2) C区全景（南から）	27
P.L. 10	(1) C区全景（東から）	27
	(2) C区竪穴群	27
P.L. 11	(1) C区竪穴	28
	(2) C区竪穴 土器（Y42）出土状況	28
P.L. 12	(1) 第3次発掘調査（D区）全景	29
	(2) D区発掘調査前（西から）	29
P.L. 13	(1) D区全景 第4号溝（北西から）	29
	(2) D区全景 第4号溝（南東から）	29
P.L. 14	(1) D区全景（東から）	29
	(2) D区全景 第5号溝	29
P.L. 15	(1) C区第6号溝（東から）	29
	(2) C区第6号溝（北から）	29

P L. 16 (1) D 18区南壁土層断面	21
(2) D 25区南壁土層断面	21
P L. 17 (1) D 19区第4号溝左岸杭列	23
(2) D 24区飛び石状遺構	30
P L. 18 (1) D 23区流木出土状況（西から）	29
(2) D 23区流木出土状況（北から）	29
P L. 19 (1) D 23区流木間木製品出土状況	29
(2) D 23区流木間木製品出土状況（W13）	72
P L. 20 (1) D 23区流木間木製品出土状況（W17）	72
(2) D 23区流木間木製品出土状況（W41）	72
P L. 21 (1) D 24区流木出土状況	29
(2) D 24区流木間木製品出土状況（W18）	72
P L. 22 (1) D 25区杭列	29
(2) D 25区流木出土状況	29
P L. 23 (1) D 24区第1号竪穴（南から）	30
(2) D 24区第1号竪穴（東から）	30
P L. 24 (1) D 24区第1号竪穴土器出土状況	32
(2) D 24区第1号竪穴土器出土状況	32
P L. 25 土器出土状況	33
P L. 26 木製品出土状況	68
P L. 27 出土土器 (1) (縮尺 1 / 3 )	33
P L. 28 出土土器 (2) (縮尺 1 / 3 )	33
P L. 29 出土土器 (3) (縮尺 1 / 3 )	33
P L. 30 出土土器 (4) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 31 出土土器 (5) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 32 出土土器 (6) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 33 出土土器 (7) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 34 出土土器 (8) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 35 出土土器 (9) (縮尺 1 / 3 )	34
P L. 36 出土土器 (10) (縮尺 1 / 3 )	35
P L. 37 出土土器 (11) (縮尺 1 / 3 )	32
P L. 38 出土土器 (12)	32

本文対照頁

P L. 39	出土木製品 (1) (縮尺 1 / 4 )	68
P L. 40	出土木製品 (2) (縮尺 1 / 4 )	68
P L. 41	出土木製品 (3) (縮尺 1 / 4 )	69・72
P L. 42	出土木製品 (4) (縮尺 1 / 4 )	72
P L. 43	出土木製品 (5) (縮尺 1 / 4 )	69・72
P L. 44	出土木製品 (6) (縮尺 1 / 4 )	71
P L. 45	出土木製品 (7)	71
P L. 46	出土木製品 (8) (縮尺 1 / 4 )	73

付図 1 那珂深ヲサ遺跡全体図 (縮尺 1 / 750)

2 B区全体図 (縮尺 1 / 200)

3 D区全体図 (縮尺 1 / 200)

4 推定那珂郡家城 (A-B-C-D)、推定久爾駅 (C-E-F-G) (縮尺 1 / 5000)

# 第1章 はじめに

## 1. 発掘調査に至るまで

1978年、福岡市建築局は博多区大字那珂字深ヲサおよび字下原に市営住宅那珂団地の建設を計画した。建築局は計画実施に先立って福岡市文化課に当該地における埋蔵文化財の有無確認の要請をし、文化課は同年9月に対象地内の試掘調査を行なった。当該地は那珂川と御笠川で東西を挟まれた沖積地に位置し現在まで水田として利用されていた。周辺には遺跡が多く西側の南北にのびる低丘陵には北から瑞穂遺跡、春住遺跡、比忠遺跡、刺塚古墳、那珂八幡古墳、那珂蓮牛田遺跡、諸岡遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が分布している。南西には諸岡川を挟んで板付遺跡があり、さらに那珂郡家の一角にも推定されていることなどから弥生時代から現代までの水田跡を初めとする各種遺構の存在が予想された。試掘調査の結果、対象地のほぼ全域にわたって遺構、遺物が検出されたため、文化課は建築局および市住宅供給公社と協議を行ない、発掘調査対象面積が広大であることから建設工事に介わせ対象地を3区分し、3次にわたって発掘調査を実施することにした。第1次発掘調査は1978年(昭53)12月11日から翌年5月3日まで行なわれ、その結果については、すでに『那珂深ヲサ遺跡I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集)として報告書が公にされている。第2次発掘調査は1980年(昭55)6月5日から翌年1月21日まで、第3次発掘調査は1981年(昭56)4月7日から6月30日まで行なった。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課

志鶴幸弘(文化部長)

井上剛紀(文化課長 第1・2次) 甲能貞行(文化課長 第3次)

三宅安吉(埋蔵文化財第一係長) 柳田純孝(埋蔵文化財第二係長)

古藤国生、岡島洋一(事務担当) 横山邦雄、山崎龍雄、浜石哲也(第

1次発掘調査担当) 飛高憲雄、力武卓治(第2・3次発掘調査担当)

発掘作業 浅川浩、荒津孝治、安東界、出森公美、伊藤牧哉、岩永真弓、江越初代、江越廣子、香月芳子、河野徹也、黒木静子、小島由美子、関加代子、関直樹、関政子、武本延子、鶴田サヨ子、藤たかえ、中村真理子、中村満代、花畠照子、広田清美、広田美恵子、広田好和、藤田太、溝口武司、溝口博子、溝口洋子、実測栄治、安武裕子、山内タツ子、力武康次

## 第2章 調査の記録

### 1. 調査の概要と経過

本書は第2・3次発掘調査の報告書であるが、先に試掘調査と、第1次発掘調査の概要について『那珂深ヲサ遺跡I』より引用し、次に第2・3次発掘調査の経過と、その概要を記す。

#### (1) 試掘調査

調査期間 1978年（昭53）9月13～19日 9月26～30日

調査概要 調査対象地内に諸岡川と直角にはば東西の方向で20m毎にトレンチを設定し、攝影機を使用して遺構・遺物の有無を探る。その結果、整層部分の基本的層序は右略図に示したように現地表面（標高6.80m前後）から以下40～50cmは第Ⅰ層の耕作土・底土、第Ⅱ層は地表下50～100cmの赤褐色粘質土層（鉄分・マングンの沈着が著しい）、第Ⅲ層は地表下100～140cmの有機質泥炭層（黒色粘質土層）、第Ⅳ層は青灰色粘質砂土層（八女粘土層）で基盤層である。杭列遺構が隨所で検出されたが、杭の打ち込まれている七層および出土遺物からみて、杭列遺構には2つの時期のものがある。第Ⅰ期は第Ⅲ層の黒色粘質土層に打ち込まれ、杭の先端が第Ⅳ層の八女粘土層にまで達するもの。第Ⅱ期は第Ⅱ層の赤褐色粘質土層に打ち込まれ、先端が第Ⅲ層にまでおよぶものである。第Ⅰ期の杭列遺構に伴う遺物としては弥生時代中期の壺形土器と板状木製品および長方形板状木製品等が出土した。第Ⅱ期の杭列遺構には須恵器破片が出土し、古墳時代以降と推定された。

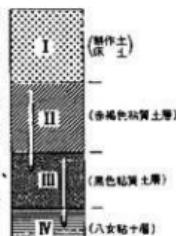


Fig. 1 試掘土層  
柱状図

#### (2) 第1次発掘調査

調査期間 1978年（昭53）12月11日～1979年（昭54）5月3日

調査概要 市営住宅那珂園地建設予定内の南東部約5600m<sup>2</sup>の発掘調査を行なう。その結果、4本の溝状遺構および水利施設と考えられる槽状遺跡その他のを検出する。溝状遺構は、4面重複しており上層のものから第1・2号溝、第3号溝、第4号溝と呼称する。

第4号溝は、第Ⅳ層の八女粘土層に掘り込まれており、幅約10m、深さ1mではば東西に走る。また、この第4号溝の中には約20mの間隔をもって2か所に槽状遺構が検出された。東側の槽状遺構を第1号槽状遺構、西側の槽状遺構を第2号槽状遺構と呼ぶ。第4号溝の埋土は、溝底直上に灰褐色粗砂、その上に黑色粘質土である。黑色粘質土の最上部付近では須恵器杯、馬齒等が若干出土するが、遺物が比較的まとまって出土したのは、黑色粘質土の下位である。

第1号横状遺構の構築材の間からは、木製の鉢・鍋および古式土師器、第2号横状遺構の杭列内からは土師器の高台付椀が出土した。

第3号溝は幅6m前後、深さ1m前後で第4号溝の南方から北流し、第4号溝の埋土を掘り込んで流路を西に変え、やがてその流れをまた北西方向にとりながら第4号溝を横切っている。第3号溝の左岸には、丸杭を打ち込み護岸を行なっている箇所もある。溝内からの出土遺物には、弥生時代から中世にまでおよぶ各種のものが混在している。

第2号溝は第3号溝が埋没した後、調査区の東南から北西に向かって流路をとるが、その幅は東南部で約3.5m、北西部で約6.0mである。左岸の2か所から水口状遺構が検出される。特に下流の第2号水口状遺構の前面の溝には杭を打ち込んだ堰状遺構が確認される。溝内からは、土師器、須恵器、青磁片、北宋銭が出土した。

第1号溝は、第2号溝一帯が洪水で埋没した直後に第2号溝を掘りさらえたものであるが、出土遺物はない。溝の幅は4~5m、深さは約0.7mである。溝の左岸には幅0.4~1.6m、高さ約0.2mの畦畔が検出される。この畦畔は、ごく最近まで利用されていた農道の直下に当たる。また溝の左岸畦畔上の3か所に水口が設けられている。

以上のような調査結果から、第4号溝は弥生時代からの流路を古墳時代初期に至って水田耕作地の開発に伴う農業用水路として利用するために、堰としての第2号横状遺構を設けるが、まもなくこの堰がその役割を何らかの理由で果たせなくなり、さらに上流に第1号横状遺構を設けたのではないかと推測されている。

第3号溝は、第4号溝が完全に埋没した後に掘られており、その時期は出土遺物から12世紀後半頃と推測される。この第3号溝の一部には護岸用の杭が打ち込まれていることから農業用水路として利用されたことは、ほぼ確実であろう。しかし、その流れが大きく蛇行したり、場所によって溝の幅が広くなったり、さらに各時期の遺物が混在するなどを考え合わせると、自然の流路ということも考えられる。

第1・2号溝は、第3号溝埋没後まもなく農業用水路として掘られたものであるが、特に第1号溝は、洪水により埋没した第2号溝をさらえたものである。その時期は、洪水によって一帯を覆った砂層の上層から染付の磁器が出土したことから、近世以前であろうと考えられた。

#### ▶ 第1次発掘調査



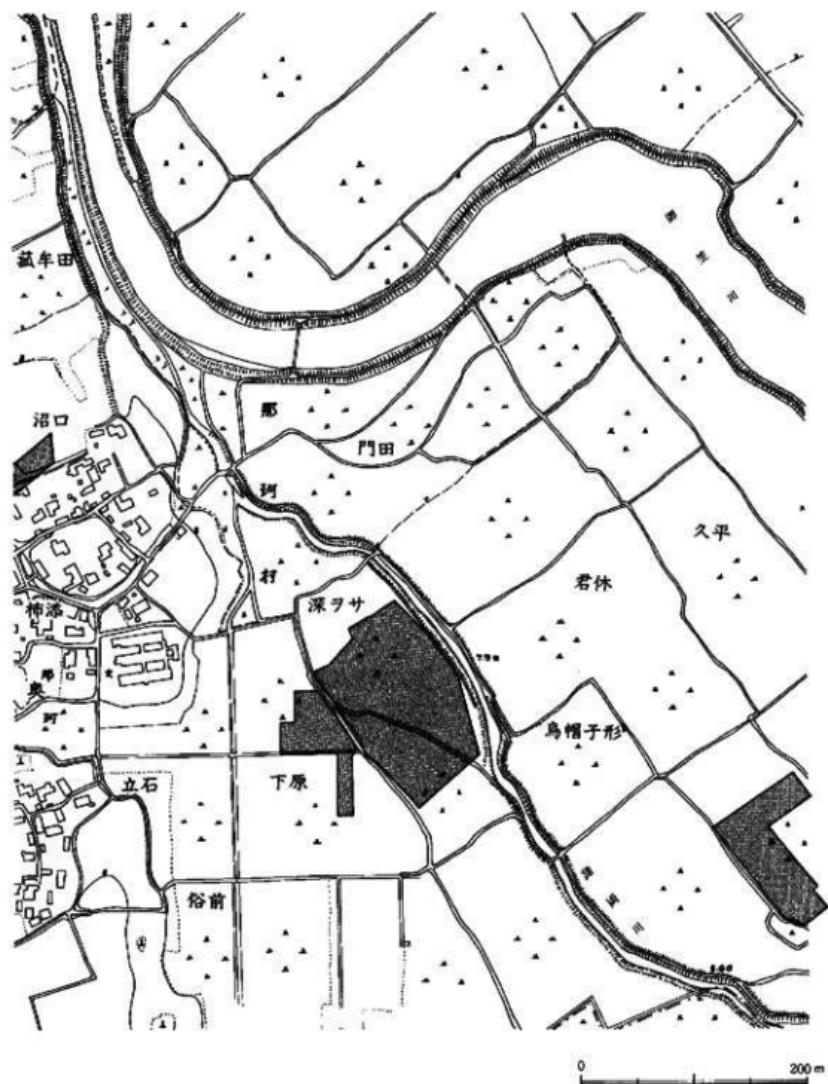


Fig. 2 那珂深ラサ遺跡周辺地形図（昭和5年縮尺1/5000）

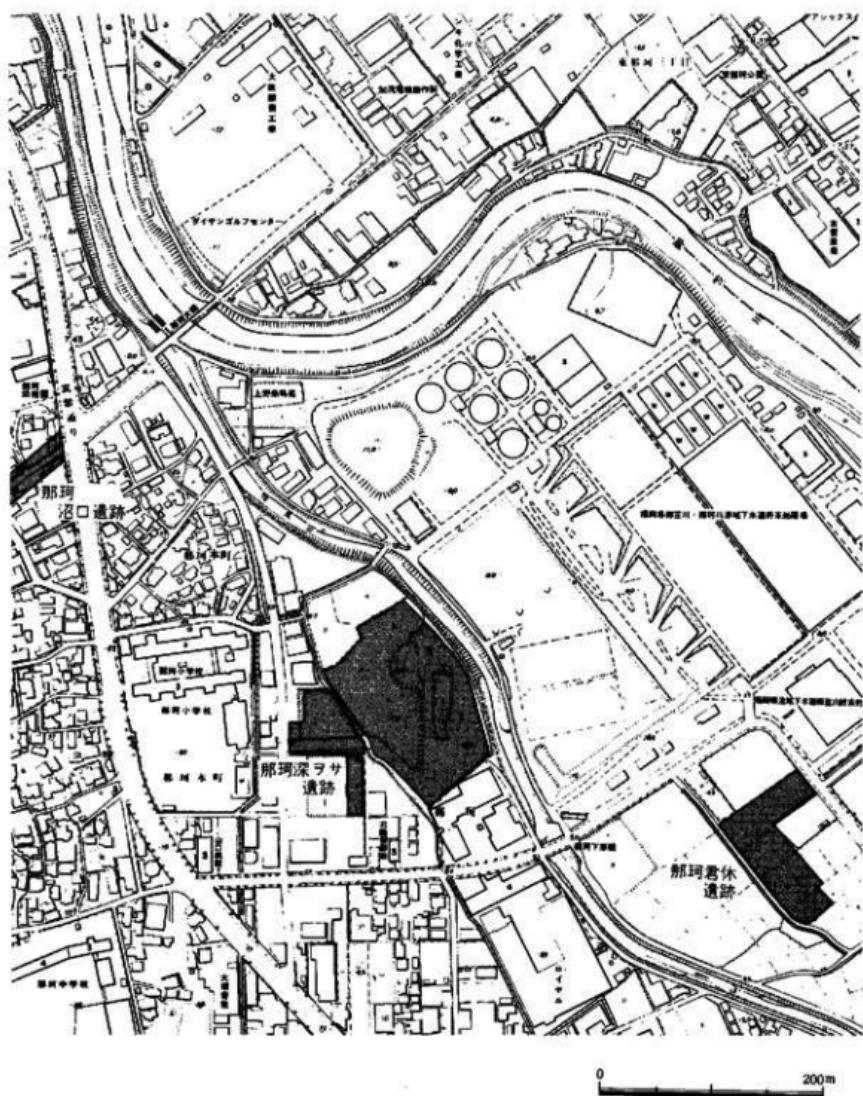


Fig. 3 那珂深ラサ遺跡周辺地形図（昭和54年 緯尺1/5000）

## 14 第2次発掘調査

### (3) 第2次発掘調査

調査期間 1980年（昭55）6月5日～1981年（昭56）1月21日

調査概要 第2次発掘調査は、第1次発掘調査区に隣接して、西方の南北に流路をもつ農業用水路までの間、約9228mを対象に実施する。前年度調査済の地区（以下A区とする）では、すでに市営住宅の一棟目の建築工事が進められていたため安全対策上、幅10m程の安全地帯を設ける。この部分は第1次発掘調査の所見では第1～4号溝が重複しており、調査には最も重要な慎重な発掘をする部分であったが、幅数mが未調査部分となり、各溝の検出と把握にあたってやや混乱を生じる原因となった。また、調査の段取り上、第1次発掘調査時と同様に試掘調査時に設定した20mグリッドを利用する予定であったが、基準杭が工事で失われていたため、新たに基準杭を打つ。この杭は、そのまま第3次発掘調査時の基準にもなった。

第2次発掘調査では、すでに建築中の建物の南西コーナーを基点にして、建物との間を10m外して建物に平行に調査対象区内を区切る。ここでは、北東に向かって20m毎に、また北西に向かって30m毎に区切り、南西から北東に向かって1区、2区、3区、……10区とし、そこから折り返して11区、12区、……17区とし最終的には、第1次発掘調査区の成果とは図面合成するようになした。

発掘調査に先立って、第1次発掘調査で検出された各時期の4つの溝を1枚の図面に合成し、市建築局の作製した縮尺500分の1の現況測量図に写し取り、今回の発掘調査の手助けとする。この合成図の検討から、第2次発掘調査は4つの溝の延長線上に当る4区および5区より開始することに決定する。一方、測量図作製のため、遺跡の西方にある那珂小学校校庭に市水道局が設置している水準点からレベルを調査対象区内に移す。また、調査対象区の南方から現況を写真撮影し、調査を開始する。発掘調査後の土砂の埋め戻しの手間を考慮して、4区の排土を3区に、5区の排土を6区に各々移動し、3区あるいは6区の発掘調査は、4区および5区の発掘調査終了後、各々を打って返しで行なうこととする。そこでまず、3区に遺構の有無および土層の観察を行なうための、A、B、2本のトレンチを直角に設定し、大型振削機で各層を観察しながら基盤となる八女粘土層の上面まで掘る。いずれのトレンチにおいても遺構・遺物の出土はなく、土層の観察結果も、現地表面下40～50cmは耕作土・床土、第II層は50cm前後の厚さで鉄分・マンガンの沈澱した赤褐色粘質土層、第III層はやはり50cm前後の厚さの黒色粘質土層となり、次に八女粘土層という試掘調査時の所見と一致することが確認された。これにより4区の排土をひとまず3区に移動することにした。以下調査の順序を追って各区の調査概要を記すが、前述したように第1次発掘調査時のグリッドと第2・3次発掘調査時のグリッドとは共通しないために、第1次発掘調査区をA区、第2次発掘調査区をB・C区、第3次発掘調査区をD区とし、B4区、C12区のように呼称する。

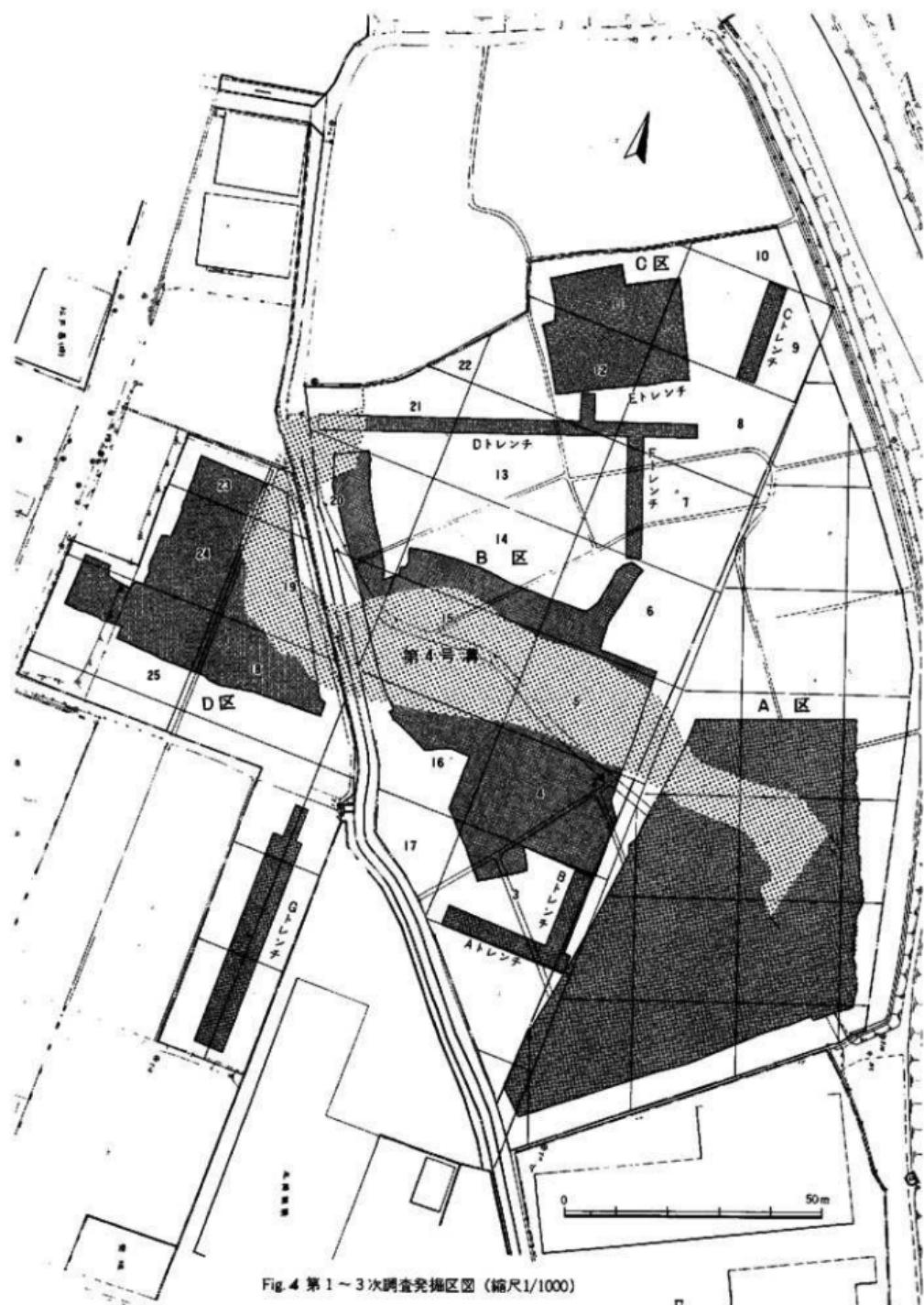


Fig. 4 第1～3次調査発掘区図 (縮尺1/1000)

## B 4 区の調査

B 4 区と B 5 区の境に幅1.5mの壁を残して B 4 区および B 5 区の耕作土と床土を除去する。6月の下旬から本格的な雨期に入り、8月30・31日の集中豪雨までの間は調査区の冠水、排水の繰り返しに明け暮れ、土層観察のための壁が幸いに堤防の役目を果たす。B 4 区の耕作土・床土を除去した段階で数本の杭を検出する。特に B 5 区に接するあたりに集中するが、並びは不規則で、ほとんど横たわった状態である。また、B 4 区全体が粘質土と砂の互層になっており、遺構と認められるものがなかったため、さらに若干の掘削を行なったところ、ほぼ東西に走る杭列を長さ5mにわたって検出した（PL.5 杭列A）。この杭列は第1次発掘調査区において検出された第1・2号溝の延長線上に当たるのではないかと考えたが、平面的には流路らしきものは確認できず、まさに氾濫原の真只中を発掘している観がする。このため B 5 区と接するあたりを更に掘り下げる。この過程で第3号溝の検出にも努めたが、ついに確認できず、結局のところ現地表面下約2.5mで固くしまった粗砂層に達し、部分的には八女粘土層が頭出することになる。つまり第4号溝まで掘り下げたことになる。今回の発掘調査は、結果的には最下層の第4号溝の調査に終わることになり、調査担当者として大いに反省するところである。

B 4 区で確認された第4号溝の左岸を探るべく、耕作土・床土および第II層の赤褐色粘質土を除去する作業を B 3 区に向けて進めたところ、B 4 区の北西隅から南東に向かう線上で、黒色粘質土（Aトレンドで観察された第III層）の堆積と、これに打ち込まれた杭を数本確認する。このため、黒色粘質土上面を露出させ、その広がりを追求したが、杭は列をなさず不規則に検出される。また、杭の性格も不明で他に遺構らしきものも確認できなかった。さらに杭の検出を試みるために、黒色粘質土を除去する。その結果、B 4 区の南東隅から北西に向かう位置に第4号溝の左岸と思われる八女粘土層の立ち上がりを検出した。（最終的には第3号溝の左岸と判断した。）また、左岸の南西部には、北西から南東に方向をとる杭列（杭列B）、あるいは南北に方向をとる杭列（杭列C）

を検出する。これらはすべて黒色粘質土から打ち込まれていたもので、保存状態のよいものだけが、黒色粘質土の上に頭出していったものとわかる。

▶ 発掘区冠水（8月31日）



### B 5 区の調査

B 4 区の発掘調査によって第 4 号溝の左岸（第 3 号溝左岸）が確認されたため、B 5 区では右岸の検出に努める。ここでも、第 1 次発掘調査区で検出された第 1 号溝、第 2 号溝、第 3 号溝およびこれらに関連する遺構の有無に注意しながら調査を進め、右岸と思われる低い立ち上がりを検出した。特に B 5 区の南西隅の第 4 号溝左岸近くの砂層からは、岸辺に打ち寄せられたような状態で相当量の古墳時代土器の破片と木器が出土した。また、流路中央部には、流れに沿って長さ約 10m、幅約 5m、深さ 1m 前後の渓状の窪みが検出された（第 1 号渓）。この渓には、北東部に幅 1m 前後の U 字溝が切り込まれていたため、B 6 区の一部の発掘調査を併せて行なう。その結果、U 字溝は長さ約 23m で、北東から緩傾斜をもって第 1 号渓に落し込まれていることがわかるが、遺物の出土はなかった。また、溝は厚い粗砂の下に埋没しており、一度の洪水により姿を消した観がする。

### B 15 区の調査

B 5 区において第 4 号溝の右岸が検出されたため、つぎにその延長を探るべく排水を B 14 区に置きながら B 15 区の調査を進める。ここでも第 4 号溝埋没以降の遺構は確認できず、B 5 区からのびてきた第 4 号溝がそのまま西へ向かって流路をとるということがわかる。そして、下流において 2 つの渓が検出される。右岸寄りのものを第 2 号渓、その南西のものを第 3 号渓と呼ぶ。いずれの渓とも、その最も深い砂層から弥生時代中期の土器片を出土するが、特に第 3 号渓からは、ほぼ完形の丹塗り壺形土器 1 個と別個体の破片および蓋が出土する。試掘調査時にもここから同様の壺形土器 1 個が出土している。一方、第 2 号渓の上層からは完形の小型丸底壺やその他の土器片が多量に出土した。また、これら 2 つの渓から第 4 号溝の右岸にかけての部分は、基盤の八女粘土層がよく残って一段と高くなっている。ここでは上層の黒色粘質土層から八女粘土層にかけて打ち込まれた東西方向の杭列（杭列 E）を検出する。

### C・D・E・F トレンチの調査

第 4 号溝の右岸北方は、試掘調査時には遺構が検出されていなかったが、第 1 次発掘調査時の所見によれば、微高地があるということで、C・D・E・F の 4 本のトレンチを設定し遺構・遺物の有無を探る。

► 第 2 次発掘調査



まず、調査対象区の北東隅にCトレンチを設定し、土層を観察しながら八女粘土層まで掘り下げるが、遺構・遺物の出土はない。つぎにDトレンチを東から掘ってみると、Cトレンチと同様に遺構らしきものは検出されなかった。ただ、西端のB21区で砂層に流木を多量に含んだ地点があり、木槌状木製品が1個出土した。この部分の基盤が緩やかに西に向かって傾斜していることがわかるが、第4号溝はB15区の調査結果からみて、今しばらくは西に流路をとっているものと考えていたためにそれ以上の調査は行なわなかった。しかし第3次発掘調査で、第4号溝が同調査区の中で大きく蛇行して北流するということが明らかになった時点で、この落ち込みは第4号溝の右岸であったことが判明した。

つぎに、Dトレンチと直角にE・Fの2本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認する。Fトレンチは、B6区で検出された溝状遺構を目差して掘ってみると、遺構・遺物の出土はなかった。Eトレンチは、北へ約15m程進んだところで、八女粘土層に掘り込まれたピット群に当る。そこで、このトレンチに直角に東へ向かってさらにトレンチをのばす。約10mにわたって数個のピットを確認したため、今回の最後の調査地点（C区）として拡張することにし、再び第4号溝の調査に戻る。

#### B19区・B20区の調査

B19区は、調査対象区西側に接して農業用水路が走っているため、ほとんど発掘できなかつたが、第4号溝の右岸が西へのびているということと、B15区で検出された杭列（杭列E）がさらに西方へのびていることがわかる。また、第4号溝検出の過程で、上部に第3号溝と思われる溝とその護岸用杭列の存在がわかり、これらは西北に屈曲しB20区の方にのびていた。このため、耕土をB14区に送りながらB20区の調査を北に向かって進める。B20区の北部では、再び八女粘土層の落ち込みが現われるが遺物の出土はない。この落ち込みがDトレンチで検出された落ち込みにつながるものではないかと予想されたが、その性格は未確認のままに終る。

#### B16区の調査

ここでは、B4区で確認されていた第4号溝の左岸を探るべく調査を進める。予想どおりに左岸も右岸と同様に西方に向かってのびることがわかる。また、ここでも左岸後方の八女粘土層にまで打ち込まれた杭列を検出する。

▶第3次発掘調査



### B 3 区の調査

B 3 区では、B 4 区で検出された杭列を追求するが、ここでも杭は、黒色粘質土に打ち込まれ、その先端は基盤の八女粘土層のかなり深くにまでおよぶものがある。検出した杭列（杭列 D）は、湾曲しながら東に延びている。

### C 8・9 区、C 11・12 区の調査

第 4 号溝の調査終了後、E トレンチにおいて確認されていたピット群の調査を開始する。耕作土・床土を除去し、第 II 層の赤褐色粘質土を注意深く剥いでみると遺構・遺物の出土はない。また、ここでは黒色粘質土に打ち込まれた杭ではなく、基盤層はやや黄色味を帯びた八女粘土層になる。試掘時に検出されたピットの周辺には同様なピットが見つかり、特に調査区の中心部には小さなピットが集中している。また、北西部においては、大型の不整形竪穴があり、その 1 つから弥生時代後期の壺形土器が出上した。

### G トレンチの調査

第 2 次発掘調査区南西の 1 枚の水田が市営住宅付設の駐車場予定地ということで、次回の調査に備えて試掘を行なう。特に遺構・遺物の出土はなかったが、トレンチの北西隅のあたりには不整形な落ち込みがあり、黒耀石のチップ 2 点が出土した。

## (4) 第 3 次発掘調査

調査期間 1981年（昭56）4月7日～6月30日

調査概要 第 3 次発掘調査は、市営住宅那珂園地建設予定地の約 2000m<sup>2</sup>を対象にして実施した。発掘調査区は、農業用水路西側の D18 区から D25 区にかけてである。耕土の持ち出しが困難なため、まず D18 区から D20 区にかけての発掘調査を行ない、これらの区の調査終了後に耕土をうって返し、残りの区の発掘調査を実施することとする。

第 2 次発掘調査によって、第 4 号溝が今回の発掘調査対象地の D18 区、D19 区にのびていると予想されたため、D18 区から調査を開始する。耕作土・床土を除去し、遺構・遺物の有無を探るが、第 II 層では確認できない。D19・20 区においても同様であったため、さらに下部に掘り進める。D19 区の粗砂より弥生式土器、および鉛などの木製品が出土し、第 4 号溝の埋土と考えられた。この時点で D18 区において第 4 号溝の左岸を検出できた。左岸は八女粘土層を切り込んで D18 区を南東から北西へ向かって走るが、D19 区においては、大きく曲線を描いて北へ向かい、第 2 次発掘調査時の B20 区および D トレンチで検出された落ち込みに、この第 4 号溝がつながるのではないかということに気付く。D19 区における右岸、D23 区における左岸の検出は、この予想を裏付けた。つまり、第 4 号溝は D20 区において、その幅をかなり狭くしながら東へ向かってカーブを描くということがわかる。

D23 区から D25 区にかけての第 4 号溝左岸後方の微高地上には、いく条かの溝状遺構（第 5

号構)が検出される。これらの溝は、いずれも第4号溝の左岸を切り込んで落し込まれている。D24区では、これらの溝を切って円形の豊穴が掘られており、この中より墨書きされた須恵器数点を含む土器群が出土する。

一方、調査区北西隅のD23区では、建築部材を含む多量の木製品が集積した状態で検出され、東方の第4号溝からの流れ込みとしては説明のつかない様相を呈している。D25区の調査によって、南西方向から北東方向に流路をとる溝状遺構(第6号溝)の存在を確認した。D23区の木製品出土位置は、この溝の延長部にあたり、D23・24区の西半分は調査対象地区外のため未調査であるが、第4号溝の流木ではなく第6号溝の流木と判断した。

D25区で検出された第6号溝の西方では、基盤の八女粘土層上面が西に向かって高さを増している。すなわち、ここが那珂遺跡群をのせる那珂丘陵の東側裾部にあたるのであろう。

## 2. 遺跡の層序

第2次発掘調査での土層観察は、下部層が砂層のため崩落が激しく安全策上、長い壁面の清掃観察は不可能であったが、第1次発掘調査との関連で最も効果的と思われるB4・5区の南北方向の東壁で、全長36mにわたって土層の観察を行なった。この東壁は、第1次発掘調査で検出された第1～4号溝が重なっている部分にあたり、これらの溝の横断土層が観察できる。

第3次発掘調査では、D18区・D25区の南壁全長34mで土層観察を行なった。この東西方向の南壁は、溝の埋土とは異なり、安定した層序を示しており、水田面の確認を観察目的とした。これらの土層と第1次発掘調査時の基本的土層と比較検討してみることにする。

第1次発掘調査では、調査区南端の土層を基本的土層とし、第I～VII層に分けられている(Fig.5)。基本的土層は略図に示したように、第I層は耕作土・床土(赤褐色粘質土層)で地表下25～30cm、第II層は淡褐色砂質土層(鉄分の沈着が多く、石英砂、花崗岩礫混入)で同30～40cmである。第III層は灰褐色粘質土層(鉄分・マンガンを含み、粗砂混入)で同40～55cmで層は薄い。A区土層柱状図第IV層は灰色粘土層と黒灰色粘土層の2層があたる。灰色粘土層には鉄分の沈着がある。第V層は漆黒色粘土層と灰黒褐色粘質土層の2層で、地表下90～130cmである。第VI層は赤褐色細砂層で、10cmに満たない薄層。第VII層は八女粘土と考えられる灰色粘土層である。これら各層と遺構・遺物との関係については、第1次発掘調査の概要で前述しているように、第4号溝は、第VII層(試掘調査時の第IV層)の八女粘土層に切り込まれている。第V層からは遺物は出土していない。第3号溝は、第VII層に切り込まれている。第1・2号溝は、第III層の灰褐色粘質土



Fig.5 A区土層柱状図

層に切り込まれているようである。

これら各溝の関係は、B 4・5区の東壁土層断面 (Fig. 6) においても見られる。第4号溝は、模式図1のように、最も北端側の位置にある。右岸は八女粘土層を壁面にしているが、左岸は第1次発掘調査の所見のとおり第3号溝に切られているために明瞭でなく、したがって溝幅も明らかにしえない。深さは約1.4mを測る。第3号溝は、模式図2のように流路が少なくとも2回移動しているようである。古い流路は、土層図南端寄りの落ち込みで、幅約10m、深さ約1.2mの規模をなしている。溝中の埋土は下層が砂質に近い黒色土層、上層は粘質黒色土層で、間に砂層ではなく洪水などによる一時的な堆積は示していない。この溝が完全に埋没する以前と思われるが、流路は北側に移動しており、その際に右岸で第4号溝の左岸を切っている。第1・2号溝は、第3号溝の上部にあり、幅がやや狭くなるが流路の位置はほとんど変わっていない。第2号溝は灰褐色土層を、第1号溝は砂層を壁面としている。

D18区・D25区の土層は、きわめて安定した堆積状況を示していることから、D区の第4号溝左岸から南側にかけての平坦部は各時期の水田面をなしていたものと思われる。第IV層の粘質灰黑色土層、第VI層の粘質暗黑色土層の2面が考えられる。

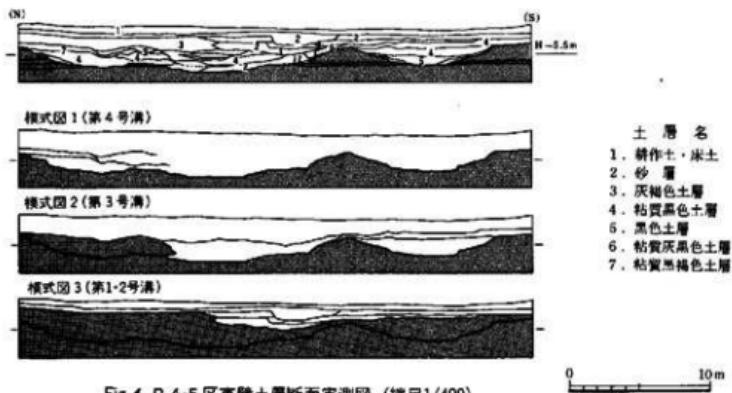


Fig. 6 B 4-5区東壁土層断面実測図 (縮尺1/400)

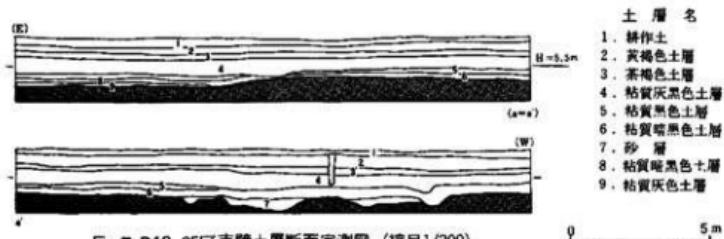


Fig. 7 D18-25区南壁土層断面実測図 (縮尺1/200)

### 3. 出土遺構

第2次発掘調査は、第1次発掘調査で検出された第1～4号溝の延長部と考えられるB4・5区より開始したのであるが、各溝の埋土が、砂と粘質土の互層をなしており、平面的な発掘では各溝の埋土を区別するのはきわめて困難であった。さらに例年ない大雨に何回となく見舞われ、時間的制約からも平面的な観察はできなかつたのが実状であった。したがって基盤層の八女粘土層の上面まで掘り下げてしまい、第1～3号溝は把握できないという結果となった。わずかにB19・20区において、第3号溝の延長部を確認できたにすぎない。第4号溝はD区で大きく蛇行し北流している。第4号溝にはB区で4つの測状遺構があり、D区では左岸に小規模ながら横状遺構が構築されている。C区では水田や水利施設などの遺構はなく、粘土層に掘り込まれた平面不整形の竪穴が数多く検出された。D区では第4号溝に流れこむ第5号溝と、丘陵の縁にそって北流する第6号溝を検出した。この他に奈良時代の須恵器を出土する2つの竪穴遺構も知られた。これらの遺構についてB～D区の地区ごとに詳述するが、第4号溝と溝中の遺構については、B・D区に分けずに記すことにする。

#### (1) B区(付図2, PL.4～8)

**第4号溝** 第4号溝の右岸は、B4・5区東壁土層でもわかるように、立ち上りは緩やかではあるが、八女粘土層の明瞭な壁をなしており、B14区・B19区でも検出できた。左岸はB4区の八女粘土層の立ち上りを考えたが、むしろ第3号溝の左岸とすべきであろう。それは第1次発掘調査で検出された第4号溝西端の溝幅は約11mにすぎず、あまりにも溝幅に差がありすぎるからである。B4・5区東壁土層では、第4号溝の左岸は第3号溝によって切られているために明確にしえないが、この部分で急に溝幅を増したとしてもB4・5区とのグリッド境にある八女粘土層の高まりまでの幅約22mまでであろう。ただB4区において第3号溝の左岸と考えた八女粘土層の立ち上りは、B16区北東隅で西に屈曲しているが、ここより西に向ってはB19・20区で検出した第3号溝の延長部とは流路方向を異にしていることからも第4号溝の左岸と考えるべきである。右岸は第1号測より溝状遺構が北へのびるために連続していないが、B14区・B19区で連続して検出できた。右岸の標高は5m前後で、段落ち部の標高は4.3mである。溝の壁は垂直ではなく外傾しており、斜面は階段状をなしている。このことはB4・5区東壁土層でも観察指摘できるもので、第4号溝の流路が何回となく幅約22mの間で南北に移動した結果ではなかろうか。右岸には護岸用の杭列は見られなかった。また、右岸はB区西端で、やや南寄りにわずかに湾曲しており、壁もさらに緩やかとなっている。第4号溝の左岸は、右岸から約22mの間隔で平行に西に向かっており、排水用と思われる2つの小溝が切り込まれて

いる。東側の小溝は左岸の肩に位置し、長さ1.5m、幅0.5m、深さ20cmを測る。西側の小溝は左岸の壁にあり、かなり傾斜している。長さ2.1m、幅0.7m、深さ20cmを測り、いずれも水田面との関係など明らかにしない。左岸には杭列が何箇所かで見られるものの、左岸に平行するものはなく、また連続もしていないことから、第4号溝の護岸用とは考えがたい。左岸の標高は右岸と同様に5m前後で、段落ち部は標高4.2mである。溝底部中央では標高4mの等高線がまわっている。第4号溝は、農業用水路を挟んだD区では、そのまま西に向かうのではないかと予想されたが、D18~20区で左岸は急に北に湾曲している。右側はD19~20区で検出した標高4.2mの八女粘土層の高まりを考えたが、B区右岸に比べ高さが低く、また溝幅も約8mと極端に狭くなることから、右岸はさらに東側の位置に考えるべきかもしれない。この延長部は、B20区・Dトレンチで検出した落ち込みに統くのである。D19区の右岸肩部には、8本の芯持ち丸太杭が打ち込まれており、護岸用であろう。他の箇所にはまったく見られない。丸太杭の長さは現長26~61cmである。

第4号溝の溝内施設としてA区では、2つの横状遺構が検出された。D18区左岸において、流路を横切っているわけではないが、数本の横木と立杭によって構築された遺構があり、これを第3号横状遺構として後述する。またB区では4つの溝状遺構を検出した。

**溝状遺構** 第4号溝の溝底部には、深さ60cm程の窪地があり、人為的な掘鑿であるか自然の落ち込みかは判断できないものの、遺物の出土もあることから、第4号溝を検討するうえで重要と考えられるので、検出順に第1~4号溝の名を付し、詳述する。

**第1号溝** B5区のほぼ中央部に位置する。平面形は不整楕円形で6.2×12.2mを測る。肩部には標高4m、底部には標高3.2mの等高線がまわる。底部の最も深いところは、肩部より93cmの深さをなす。この第1号溝の東側には、第4号溝の溝底をなすと思われる細長い窪地があり、この窪地は第1号溝に繋がっている。窪地出土の流木の方向は流路方向を示すものと考えられるので、流路は第1号溝に注ぎこんでいたことを示している。さらに北側にも、第1号溝に注ぎこむ溝状遺構がある。この溝状遺構は長さ23m、幅約2.1m、深さ約40cmを測る。第1号溝の集水遺構ではないかと推測されるが、厚い粗砂に覆われており、溝としての機能はあまり長くなかったのであろう。第1号溝の南側周縁部には1.2~3.2mの間隔で3本の芯持ち丸太杭が打ち込まれていた。出土遺物はほとんどなく、わずかに須恵器の小破片が出土したにすぎない。現在1号溝で溢れた水は、自然にできたと思われる浅い窪地を通って第4号溝に注ぐ。

**第2号溝** 第2号溝はB15区の北西部にあり、第3号溝とは細い溝で連結している。平面形は不整楕円形で6.3×9m、深さは肩より約90cmを測る。底部の標高は第1号溝より約22cm高い。

**第3号溝** とつなぐ溝は、幅約2mで、溝底部は第2号溝の底部よりも約30cm高い。埋土は、上部が黒色粘質土と砂層の互層で、下部は砂層のみになる。遺物は脚付甕（H51・52）大型菱形土

器(H54)、小型丸底壺(H77~83)、斐形土器(H61・69・71)、高杯形土器(H106・108・109)などで、これらは埋土上部より出土した。下部からは弥生式土器(Y35)が出土した。

**第3号測** B15区の南西部にあり、第4号溝の流路のほぼ中央部に位置している。平面形は隅丸長方形で、長さ16.6m、幅は東端で2.5m、西端で5.1mを測る。長軸は第4号溝の流路方向とほぼ一致している。肩部には、3.8mの等高線がまわっており、第3号測の両側は第4号溝左岸に接している。底部の標高は第2号測と変りないが、やや西に傾いている。遺物は、埋土の砂層より丹塗り磨研無頸壺(Y25~28)とその蓋(Y26)が出土し、西側斜面周辺からは、斐形土器(Y23・37・39・40、H55)が出土した。丹塗り磨研無頸壺は、試掘調査時にも1点出土しているが、出土地点は第3号測の位置に当っている。

**第4号測** B15区の南東部にあり、第4号溝の左岸に接している。平面形は下流側が幅広い不整梢円形で、4.1×10mを測る。深さは約33cmで、底部の標高は4つの測状遺構の中では最も高い。遺物の出土はなかった。これら4つの測状遺構に伴う遺構は、第1号測の溝状遺構と肩に打ち込まれた丸太杭を除いては、特記すべき施設はない。遺物も第2号測でまとまって出土した以外は、きわめて少なく、また木製品は1点も出土していない。なお測状遺構は、D区第4号溝でも3か所で見られるが、第1~4号測に比べ、規模も小さく、出土遺物もなかったことからここでは取り上げなかった。

**第3号樋状遺構** 第3次発掘調査区の南東隅に位置しているが、東側に接して農業用水路があるために、樋状遺構の全体を検出したわけではない。したがって第1次発掘調査で検出された第1・2号樋状遺構のように第4号溝の流路を横切って構築されていたかは確認できなかった。検出できたのは、長さ約6m、幅約1mで、第4号溝の左岸に構築されている。構築方法は、数本の立杭と長さ約2.4mの横木2本とを組み合わせる方法で、順序は、左岸の八女粘土層を弧状に抉り、丸太材や矢板材の杭を打ち込み、横木を架けている。さらに立杭の後方には長さ1m前後の材を4本置いている。立杭には垂直に打ち込まれるものと、上流方向に斜めに打ち込まれるものとがある。検出部だけの観察では、2本の横木は立杭で固定されてはいないようである。構築材の中には建築部材を再利用したと思われるものがある。横木のW43は、材の一端が弧状に加工されている。W33は立杭の後方で出土したもので、乳頭状の加工がある。枝別れ部を加工したW39は、構築材というよりも流れ寄せられた状況で出土した。矢板状のW48は立杭として用いられていた。また体部を穿孔した壺(H74)は、上流側の深みから出土した。

第3号樋状遺構は、同じ第4号溝に構築されている第1・2号樋状遺構と比較すると、構築

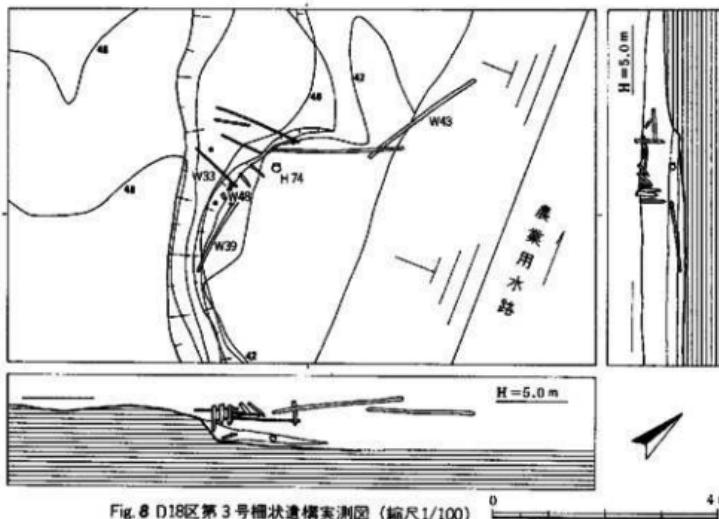


Fig. 8 D18区第3号構状遺構実測図（縮尺1/100）

材の数量、規模や構築方法などに大きな差がある。第3号構状遺構が構築されている部分の溝幅は、約18mと想定されることから、長さ16mを測る第1号構状遺構以上の構築規模を考えるべきであろうが、第3号構状遺構はきわめて簡単な構造である。第1・2号構状遺構と同じように堰としての機能を果していたかは疑問とせざるをえず、あるいは流路の移動などによる廢棄や第1・2号構状遺構への移動構築などを考えるべきであろう。

#### 出土遺物

**土器** 第4号溝より出土する土器は、4つの溝状遺構を除くとB5区左岸とD19区の右・左岸に集中している。弥生式土器（Y29・46・53・58・59）や古墳時代の土師器が出土している。

土師器には變形土器（H63～65・67・68・70・72・73・75）、鉢形土器（H85・86・92・96・98・99）、高壇形土器（H105・111・112）などで、また上部からは須恵器もわずかに出土しており、壺蓋（Su6）と甕（Su13）を固化した。D19区では逆に弥生式土器の出土が多い。弥生式土器の變形土器（Y32・36）や壺形土器（Y30・41・43）は右岸寄りで出土した。

**木製品** 農耕具の鋤（W1・2）、鎌（W4）はD19区の左岸寄りで出土。鎌の柄部と判断したW36はB15区左岸で出土した。この他の出土遺物には砥石（T2）や石鏃がある。

これらの出土遺物は、弥生時代中期後半から古墳時代のものが中心をなしており、特に4世紀から5世紀にかけての遺物が多く、第1次発掘調査における第4号溝の年代観と矛盾するものではない。

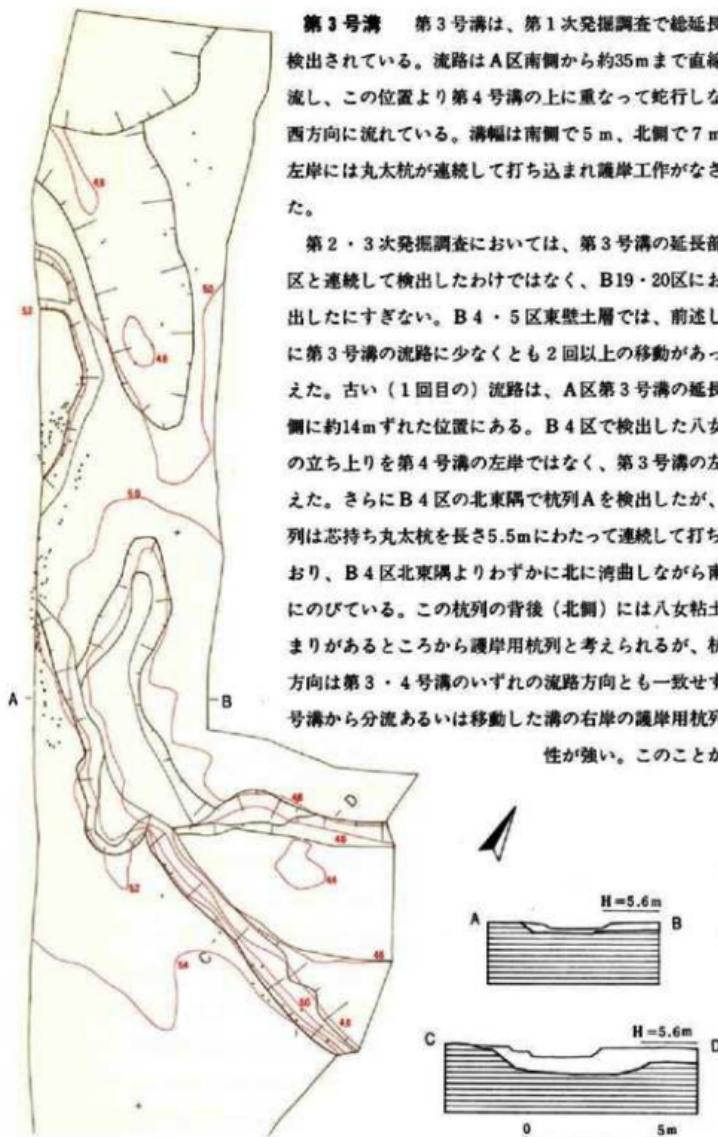


Fig. 9 B19・20区第3号溝実測図（縮尺1/200）

**第3号溝** 第3号溝は、第1次発掘調査で総延長62mが検出されている。流路はA区南側から約35mまで直線的に北流し、この位置より第4号溝の上に重なって蛇行しながら北西方向に流れている。溝幅は南側で5m、北側で7mあり、左岸には丸太杭が連続して打ち込まれ護岸工作がなされていた。

第2・3次発掘調査においては、第3号溝の延長部は、A区と連続して検出したわけではなく、B19・20区において検出したにすぎない。B4・5区東壁土層では、前述したように第3号溝の流路に少なくとも2回以上の移動があったと考えた。古い（1回目の）流路は、A区第3号溝の延長より南側に約14mずれた位置にある。B4区で検出した八女粘土層の立ち上りを第4号溝の左岸ではなく、第3号溝の左岸と考えた。さらにB4区の北東隅で杭列Aを検出したが、この杭列は芯持ち丸太杭を長さ5.5mにわたって連続して打ち込んでおり、B4区北東隅よりわずかに北に湾曲しながら南西方向にのびている。この杭列の背後（北側）には八女粘土層の高まりがあるところから護岸用杭列と考えられるが、杭列Aの方向は第3・4号溝のいずれの流路方向とも一致せず、第3号溝から分流あるいは移動した溝の右岸用杭列の可能性が強い。このことからも第

3号溝の移動は考えられよう。古い流路の深さは約1.3mを測る。幅は土層断面が流路に対し直角ではないが、10.5mである。溝底部の埋土は砂質土であるが、ほとんどは粘質黒色土で整層をなしており、流路移動後には再び流路には、なった痕跡はない。この流路は、B4・5区のグリッド塊部で第3号溝の新しい流路によって切られるものと考えられる。新しい流路の埋土は、粘質黒色土と砂層が互層をなしており、溝幅は約13.5m、深さは約1.7mである。

B19・20区で検出した第3号溝は、灰黒色粘質土層に切り込まれている。埋土が砂層であることから、新しい流路の延長部と考えた。検出した長さは29.5m、幅は東端で7.5m、北端で5.5mである。左岸には小丸太杭が連続して打ち込まれており、その数は100本以上を数える。右岸には、護岸用杭列はほとんど見られなかった。また第3号溝の北延長部は、浅くなり、両岸とも不明瞭となっている。

#### 出土遺物

第3号溝からの出土遺物には、木製品はなく少量の土器だけである。古い流路と考えたB4区では、土師器の高台付椀(Ha29)や墨書のある皿(Ha37)が溝底より出土した。護岸工作をした杭列Aの上部では、土師器(Ha31・35・39)や磁器(Ji9)が出土し、新しい流路の時期には完全に埋没していたことが知られる。B15区では、須恵器(Su14・16・22)や土師器(Ha32~34・42・43・45)、内黒土器(Ha46)、磁器(Ji11)などは第3号溝からの混入と思われる。

#### (2) C 区 (付図1, PL. 9~11)

C区は、調査対象地の北端部に位置している。第1次発掘調査の所見では第4号溝の左岸より北側は、基盤層の八女粘土層が高くなり、微高地をなしているのではないかと思われ、第1~4号溝や那珂都家に関連する生活跡などの遺構の存在が予想されていた。このため第2次発掘調査では、数本のトレーナーを設定し、遺構の検出に努めたが確認できなかった。ただEトレーナーで数個のビットを検出したためにC8・9・11・12区の約577m<sup>2</sup>を拡張してC区とした。C区の基盤層は八女粘土層で、西に向かってわずかに傾斜している。土層は整層をなしており、第1~4号溝からの出水はあまり受けていないようである。ビットはC区の中央部に集中しているが、大きさ、方向ともに不規則で連続性がなく建物等の遺構としてはとらえられない。またこれらのビットからは遺物の出土もなかった。C区の北西部では、竪穴が群集して検索された。これらの竪穴の多くは、不整精円形をなし、互いに接している。竪穴の深さは約20~30cm前後で、八女粘土層下の砂質土層までは達していない。遺物は、3つの竪穴から出土している(¥42・48・56)。¥48・56が出土した竪穴は、径70~80cmの円形で深さは13~15cmを測る。¥48・56が小破片であるのに対し、¥42の二重口縁の壺形土器は、現在は潰れて出土したもののが本来は完形品であったものと思われる、竪穴の中央に横たえられた状況で出土した。¥42が出土

した竪穴は、不整円形で $2.7 \times 3.0$ m、深さは約20cmを測り他の竪穴とは、接していない独立して掘られたよう見える。群集する竪穴は、不整形で浅く、しかも凹凸のある底部であることなどから、墓塚や貯蔵穴などの遺構とは考えがたい。しかし土器の出土状況は、樹根や氾濫等による自然的な落ち込みではないことを思わしめる。竪穴の底部が砂質土まで達していないことから、粘着力が強く、粒子の細かい八女粘土層の上部粘土を採掘した竪穴ではないかと推測した。

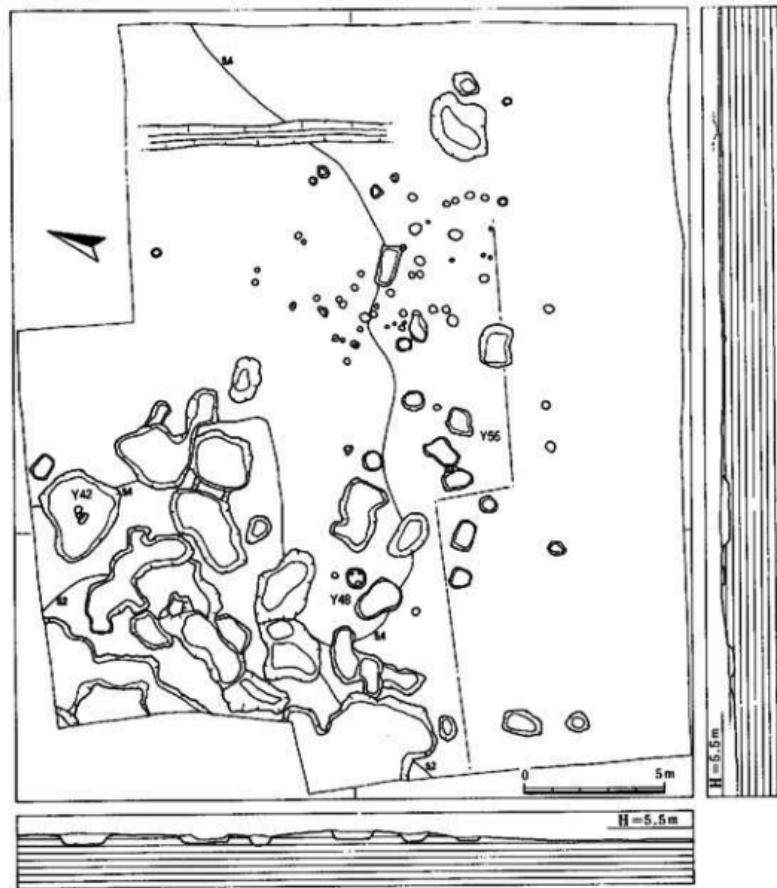


Fig. 10 C区遺構実測図 (縮尺1/200)



Fig. II D23区流水出土状况实测图 (缩尺 1/40)

## (3) D 区 (付図3, PL. 12-24)

B・C区においては、第1～4号溝に対する水田面は検出できず、わずかに残った杭列から推測するにすぎなかったが、D区においては、前述したようにD18・25区南壁土層の観察によって水田面の検出が可能ではないかと期待された。検出された遺構は、第4号溝と左岸に構築された第3号柵状遺構、第4号溝の左岸に切れ込んでいる3本の溝（第5号溝とし、東よりA・B・C溝とする）、台地の縁にそって北流する溝（第6号溝とする）、さらに4つの豊穴（第1～4号豊穴）などである。

**第5号溝** 第5号溝のA・B溝は、D区の南西部から北東方向に約35mのび、第4号溝の左岸に接している。A・B溝は、直線的ではないがほぼ平行に走っている。A溝は南西端で幅約70cm、溝底標高4.6m、北東端で幅約1.8m、溝底標高4.4mである。溝底は北東部が全体的に低くなっているものの、南西端から約6mの位置には約7.5×8.0m、深さ約60cmを測る窪地があり、溝底は均一に傾斜しているわけではない。この窪地からC溝が北にのびている。C溝の先端部は調査対象地外に入っているため明らかにしえない。B溝北東端部に5本の杭が検出されたが、八女粘土層まで達していらず、上層の粘質暗黒色土層に打ち込まれているようである。A・B・C溝の埋土は砂層で、遺物の出土は見られなかった。また互いに切り合っていないことから、第5号溝の時期、あるいはA～C溝相互の時間差など明らかでない。ここでは、A・B溝北東端が第4号溝に切り込まれていること、後述する第1号豊穴によって切られていることなどから第4号溝と同じ時期と考えておきたい。

**第6号溝** 第6号溝は、D25区で検出したもので、第5号溝の西側4mの位置にある。溝の方向は、南西より北東に向かっており第5号溝の方向とほぼ一致している。南西端部での溝幅は約90cm、深さ15cm、北東端部では溝幅約90cm、深さ30cmを測る。第5号溝は、途中で幾条かに別れているようであるが、検出した長さが約9mと短かく、延長部が調査対象地外に当っているために全容を知ることはできない。第6号溝の埋土は、粘質暗黒色土層で溝底部はいくぶん砂質土にちかい。D25区南壁土層でも観察されるように第5号溝が砂層で埋没した上にあり、第5号溝より新しいことがわかる。第6号溝の西側は、基盤層の八女粘土が次第に高くなっており、那珂丘陵に続くものと推測される。第6号溝にそって打ち込まれている杭列は、第6号溝の護岸ではなく、丘陵縁の土止めと考えるべきであろう。この杭列には流木が多く、W18・25・40の木製品が出土した。D23区で検出した流木群(Fig.11)は、構築されたような部分があり、D25区の土止めと考えた杭列と同じような機能であろう。またD24区第1号豊穴の南側にある流木も、第6号溝流木であろう。D23・24区の流木の間からは、W3・6・7・9・10・13～17・19・20・24・28～32・34・35・37・38・41・42・44・45などの農耕具や建築部

材が多量に出土している。

**第1号竪穴 (Fig.12, PL.23・24)** 第1号竪穴はD24区で検出した。平面形は不整橢円形で $4.1 \times 3.0\text{m}$ を測る。底形は平面形と同じで壁は緩傾斜をなす。この竪穴は第5号溝のC溝を切っており、さらにD23~25区で検出した流木を含む粘質黒色土層を振り込んでいる。この竪穴の南東部から、幅1.1m、深さ約15cmの浅い溝が南西方向に約6.6mのびている。この溝も同じように第5号溝のA・B溝を切っており、溝底には2個の扁平な石が飛び石状に置かれていた。第1号竪穴の埋土は、砂質黒色土で、下部は砂層となる。遺物は、須恵器と土師器で、竪穴の中位から底部にかけて出土した。完形品はSu29の一点のみであるが、完形に近いものが多く、墨書き器3点と刻印のある土器1点が出土した。

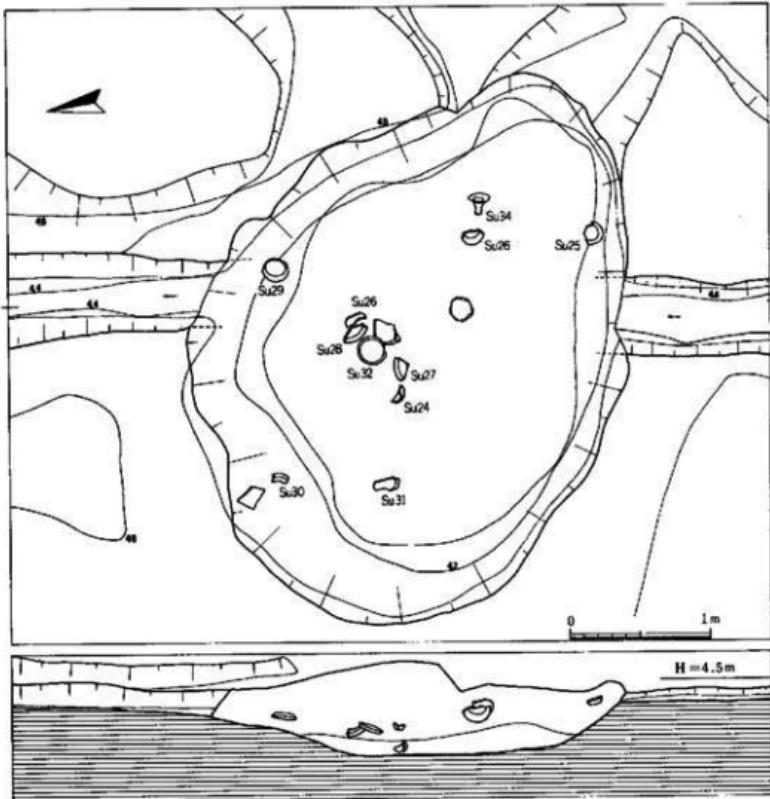


Fig. 12 D24区第1号竪穴実測図（縮尺1/40）

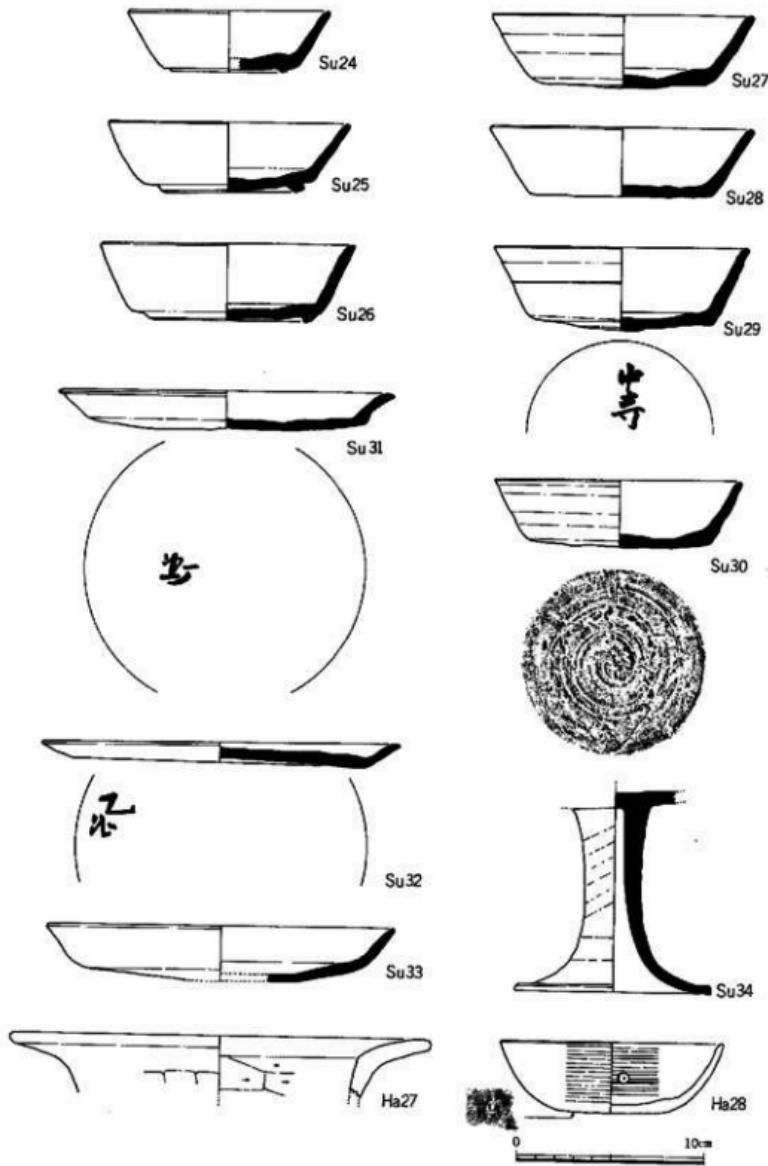


Fig. 13 第1号整穴出土土器实测图 (缩尺1/3)

## 出土遺物 (Fig.13, PL.37・38)

須恵器 須恵器はSu24~26の高台付杯、Su27~30の杯、Su31~33の皿、Su34の高杯の11点を図化した。この他に大型壺の小破片が1点出土している。

Su24~26の高台付杯は、大きさ、高台の形状などにそれぞれ違いが見られる。

Su24は、口径10.8cm、高さ3.2cmの高台付杯である。3個の高台付杯のうちで最も小さい。断面方形の低い高台はハ字形に貼り付けられる。体部と底部との境には明瞭な稜がある。

Su25は、体部の約 $\frac{1}{2}$ を欠いている。断面方形の高台は、底部と体部との境より内側に貼り付けられており、内端部で接地している。体部の立ち上りは、Su24・26に比べ外開きとなる。

Su26は、 $\frac{1}{2}$ に割れた破片が約1m離れて出土した。口径13.6cm、高さ4.2cmを測る。体部の立ち上りは急で、外への開きが小さい。高台は体部と底部との境よりやや内側に貼り付けられているものの、貼り付け後の横ナデで境は丸くなっている。接地部も平坦でない。

Su27~30の4個の杯は、口径13.3~14.4cm、高さ3.7~4.4cmではほぼ同じ大きさである。内底部はナデ仕上げされているが、外底部はヘラ切り離し後に調整を加えるもの(Su27・28・29)と、未調整のもの(Su30)がある。体部は直線的に外傾し、口縁部で小さく外反して丸くおさまっている。Su28は、底部が平坦なこともあり、体部との境は稜をなしている。Su29の外底部には「中寺」の墨書きが鮮明に残っている。

Su31~33の皿は、口径18~19.2cmと大差ないが、体部の立ち上りにそれぞれ特徴がある。どの底部もヘラ切り離し後にナデ調整が加えられているが、Su32は上げ底状をなしているために低い器高となっている。Su32は接合して完形品となった。Su31の外底部には漢字1文字と思われる墨書きが見られるが、不明瞭で読むことができない。筆の運びから圓のように立つのである。Su32の外底部縁にも墨書きがあり、肉眼では漢字1文字と思われたのであるが、赤外線テレビでは漢字2文字の墨書きということがわかった。上の字は「乙」と読めるものの下の文字は判読できない。Su34は、高杯脚部で、杯部は失われている。

土師器 上師器の出土は2点のみである。Ha27は壺の口縁部で、体部はヘラ削りしている。Ha28は丁寧な横のみがきを加え、なめらかな器面をなす。体部内面と外底部に○印の刻印がある。2つとも径7mmで同じ刻印と思われる。

**第2号竪穴** 第2号竪穴は第1号竪穴と同じように粘質暗黒褐色土層を掘りこんでいる。平面形は長楕円形で9.0×2.5mを測る。遺物は須恵器の高台付杯(Su19・21)が出土した。第3・4号竪穴からは遺物の出土はなかったが、第1・2号竪穴と同様に粘質暗黒褐色土層を掘りこんでおり同時期の竪穴であろう。またD区第4号溝左岸の平坦部では、須恵器(Su 7~12・17・20)や土師器(H113)などが出土している。

## 4. 出土遺物

### (1) 土器 (Fig.15~29, PL.27~38)

出土した土器は、第1次発掘調査報告書と同じように、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代以降（歴史時代）の時代ごとに区分し、D24区第1号竪穴の出土土器以外は、一括して集成した。これらの土器の計測値と細部の観察は一覧表にした。なお土器番号は第1次発掘調査報告書からの通し番号とした。

**縄文式土器** 縄文式土器はD23区流木の間より出土したJ1の1点のみである。直線的にやや外傾する口縁部の小破片で、口縁下に3条の隆帯が巡り、内面には粗い条痕が見られる。口端部は先細くなり、刻み目はない。J1はこれらの特徴から縄文時代前期の縄式土器と考えられる。

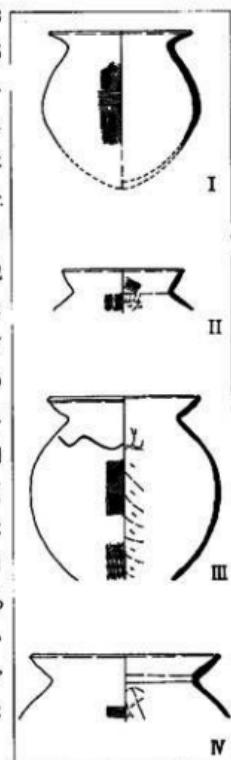
**弥生式土器** 弥生式土器の出土量は、古墳時代の土師器に比べ少ないが、時期は前期から後期までの全期間通してあり、特に後期の土器が多いようである。器種には壺形土器、甕形土器、鉢形土器がある。前期では甕形土器（Y23）と壺形土器（Y24）があげられる。Y23は如意形口縁で、外湾は弱く口端部は下段のみ刻み日がある。Y24の口縁部は肥厚している、口、頸、胴部の境はあまり明瞭でない。中期では丹塗り無頸壺（Y25~28）、甕形土器（Y31~36、39~40）がある。Y29は体部上半部を欠いているが長頸壺か。Y25~28は、精良な胎土が用いられており、丁寧な丹塗りが施されている。いずれもB15区の第3号溝状遺構より出土した。Y39~40は大型の甕形土器で、第3号溝周辺で出土した。後期には複合口縁の壺形土器（Y41~48）、無頸壺（Y49~50？）、長頸壺（Y30）、甕形土器（Y37~38、51~52）、台付甕（Y53~55）、鉢形土器（Y58~59）と器種は豊富である。複合口縁壺には、口縁部が袋状をなすもの（Y41~42）と、反転部から直線的に内傾し外面に稜をもつもの（Y43~44）と、粗雑なつくりで内面に水平に折り返すもの（Y45）がある。Y41~42は長頸で、底部は平底であるがやや安定性を欠く。Y47~48の頸部は球形をなす。Y30は体部のみであるが、長頸か短頸の頸部がつくのであろう。頸部长大径部には、わずかながら稜があり、底部は不安定な平底をなす。Y51は平底で器高の低い甕形土器である。口縁部はく字形に外反する。屈曲部内面には稜がない。Y55は台付甕で、同じような特徴の体部をもつY53~54も台付となるのであろう。またY56~57は口径が大きいが、胴部は同じように球形をなしている。

高環形土器は、第1次発掘調査では2点報告されているが、第2・3次発掘調査での出土はなかった。

**土師器（古墳時代）** 出土した土器の中では、古墳時代の土師器が最も多く、そのほとんど

どは第4号溝からの出土である。器種は壺形土器、丸底壺、鉢形土器、高環形土器、甌などがあり、壺形土器と器台を除くほとんどの器種がそろっている。

壺形土器には、北部九州弥生式土器からの伝統をもつ在地系と思われるものと、庄内式・布留式土器など外来系土器の影響を受けたと思われるものがある。H50はほぼ完形の壺形土器で、同器形の土器は福岡市西区宮の前遺跡、柏原郡鹿部東町遺跡、長崎県原の辻遺跡などで出土している。宮の前遺跡例とは、口端部内面が上方に小さく突出する特徴がよく一致している。H54~57は大型壺形土器で、H54・55は第2・3号溝からの出土である。H51・52は安定感のある長い脚がつく。脚付壺の類例は少なく、きわめて特異な器形といえよう。H59~75は外来系土器の影響下に出現した土器と考えられるもので、「那珂深ヲサ遺跡I」ではFig.14のように4分類されている。H59~75の壺形土器は、H59がI類、H61~63・65~68・75はII類、H69・70はIII類に該当しよう。H71の口縁部の特徴はII類と同じであるが、体部はタタキ目ではなく、細かいハケ目調整である。H74の口縁部は外湾ぎみにのび、底部は尖底ぎみである。H60は球状の体部に内湾ぎみに外反する口縁部がつき、体部は右下りのタタキ目がある。H73は球状の体部で底部は小さな上げ底をなす。壺形土器は小型丸底壺のみが出土した。H77~83はB15区第2号溝から出土した。H77の口径は体部径より大きいが、他は体部径が口径より大きいつくりをなす。H76の大きめの口縁部は内湾ぎみに短くのび、深い体部をなす。H84は球形の体部に直立ぎみの口縁部がつくのである。鉢形土器には口縁部が外反するもの(H88~92)、丸底から内湾しながら体部がのび口縁部が直立ぎみとなるもの(H93~96)、尖りぎみの底部から大きく口縁部へと開くもの(H97~99)、半球状の体部に口縁部が短く外反するもの(H100)、台が付くもの(H85~87)などが出土している。H53は鉢形の底部に10個の小孔を穿孔している。口縁部外面にはタタキ目がある。H113・114は小破片のため把手部はないが円筒形の甌であろう。H113は体部にやや膨みがあり、口縁部はゆるく外湾している。高環形土器には完形品の出土はない。脚部の出土はきわめて少なく図化したのはH112の1点のみであった。環部のつくりには环部下位で屈曲し外方に直線的に開くもの(H101~108)と环部に2つ以上の屈曲部をもつもの(H109~111)の2つに分類で Fig.14 土器壺形土器分類図き、さらに前者は、口縁部への立ち上がりが直線的に外反するもの



(H102・103)、中位で外湾しながら長くのびるもの(H104・105)、屈曲部が明瞭な稜をなさず、わずかに内湾しながらのびるもの(H106~108)、屈曲部から外湾ぎみに口縁部へのびるが短く、口径が大きいもの(H101)などがある。後者には2つの屈曲部をもつもの(H109・110)と口縁部でさらに屈曲するもの(H111)がある。H112は高坏脚部で、脚筒部にはやや膨みがある。

**須恵器** 第1次発掘調査では、杯蓋、杯など5点のみであったが、第2・3次発掘調査ではD24区第1号竪穴をはじめとして一括して出土するもの多かった。器種には杯蓋、杯、長頸壺、直口壺、甕、高台付杯、皿、高杯などである。Su6~10は杯蓋で、Su7~9には天井部にヘラ書き記号がある。Su11・12は杯身で、Su12はSu9と組み合って出土した。Su13は甕口縁部で、口縁下に断面三角形の突帯を巡らしている。Su14は直立する口縁部をもち、体部中央に列点文がある。Su15は長頸壺の口頸部と思われる破片で、口縁部を水平につくる。Su16~22は高台付杯である。高台を長いハ字形に付けるもの(Su16)、底部と体部との境より内側に付けるもの(Su17~20)、外底部に高台がつき、体部との境が不明瞭なもの(Su22)がある。Su20の外底部には丸印が墨書きされ、高台の一部を棒状のもので押している。第1・第2竪穴出土の須恵器については前述したとおりで、土師器に対して須恵器が多数を占めている。

**土師器(歴史時代)** 土師器は杯、高台付碗、皿、甕、土鍋が出土した。Ha29~31は高台付碗で、高台はいずれもハ字形に貼り付けられ、須恵器高台杯に比べ背が高い。Ha29は完形品で、高台は底部と体部との境に付けられ、体部は直線的に外傾し、そのまま口縁部をつくる。杯には底部がヘラ切り離されたHa32~35、糸切り離されたHa44~45がある。皿には口径約15cmのもの(Ha36・37)と小皿で口径約7.2~9.0cmの2種がある。Ha37の外底部中央には漢字2文字の墨書きがある。上の字は「将」であるが下の字は読めない。Ha38はく字形に外反する口縁をもつ甕で、胴の張りはなく、丸底へと続く。Ha39は土鍋で外面は厚く煤が付着している。Ha46・47は内黒土器碗である。Ha46は丸みのある底部に小さく低い高台を貼り付ける。Ha47は平坦な底部から体部はわずかに内湾しながらのびる。高台は底部と体部の境に付けられている。

**磁器** 磁器の出土は10数点と少なく、5点を図化した。Ji13以外は白磁である。Ji9は、口縁端を小さく引き出している。釉は灰白色釉で、口縁端内面は露胎である。Ji10は碗底部で、見込み内底部には砂が付着している。高台部は露胎で、灰白色釉が流れている。Ji11・12は碗口縁部の小破片である。口縁部の断面は、いずれも小さな玉縁状をなす。内外面ともに細かい貫入が見られる。Ji13は青磁碗の底部近くの小破片である。内外面にはヘラ・構描き文があり、体部下半は施釉されていない。胎土は灰色を呈する。

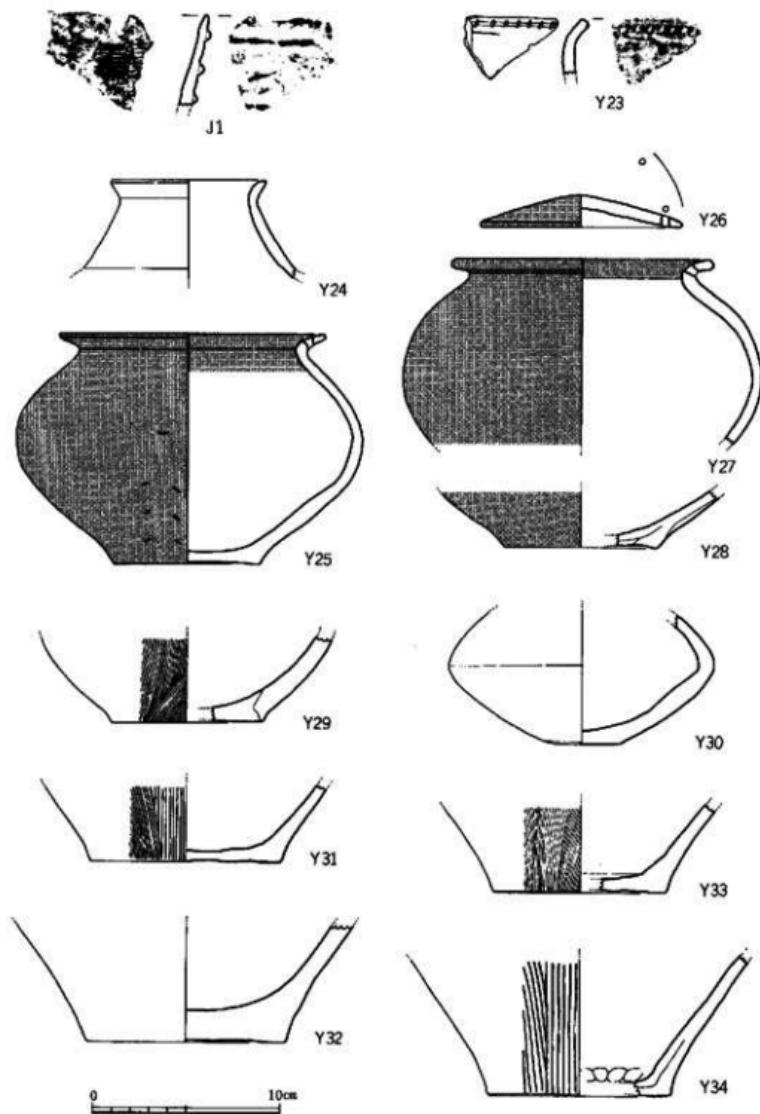


Fig. 15 出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

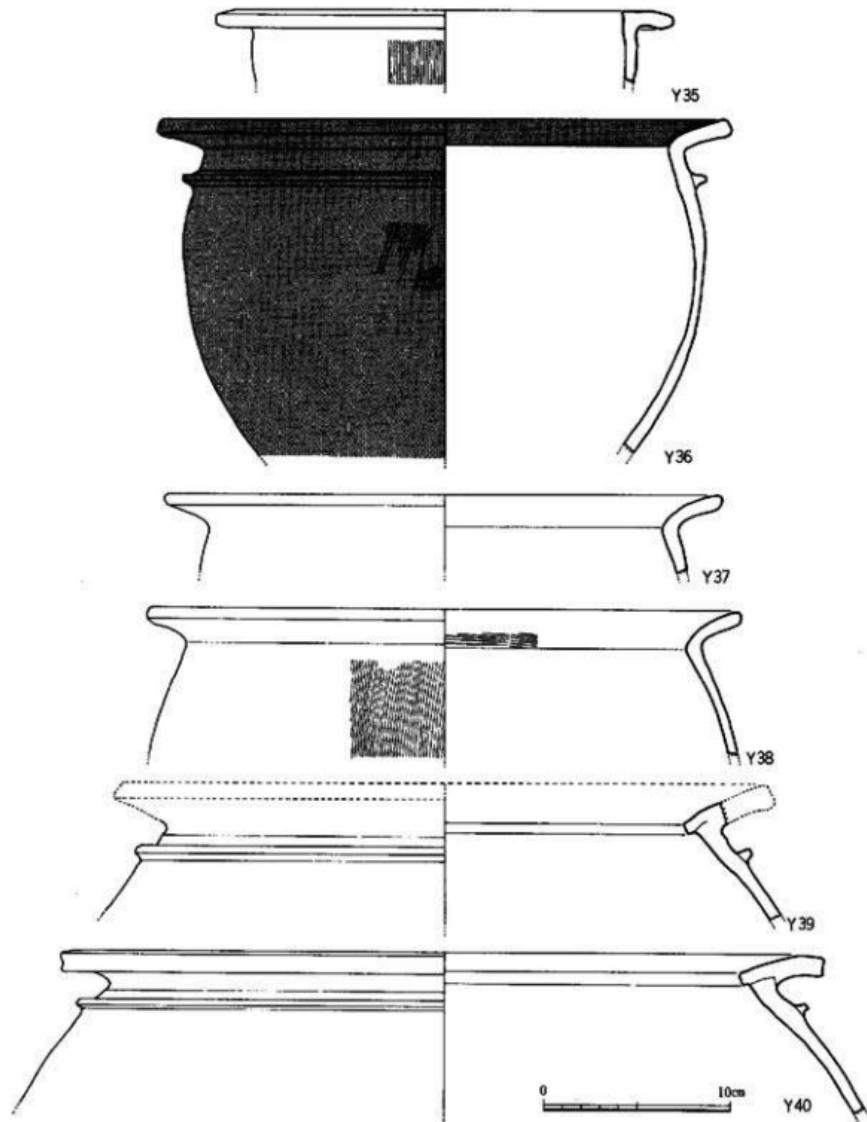


Fig. 16 出土土器実測図(2) (縮尺1/3)

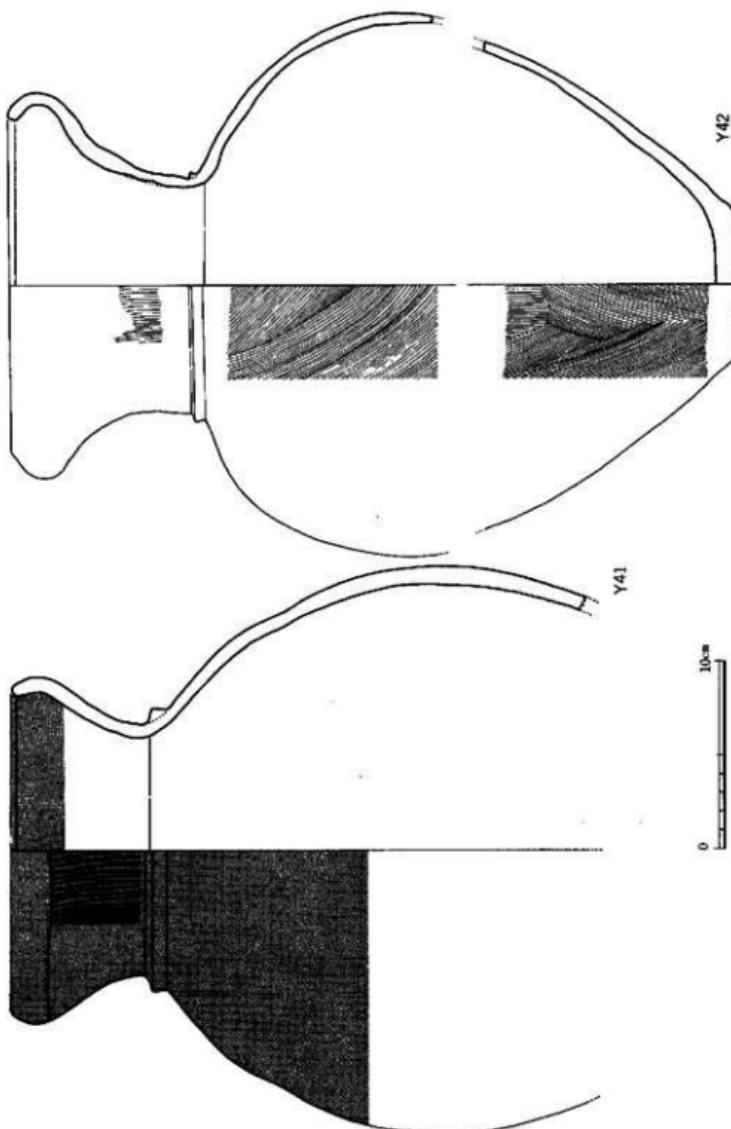


Fig. 17 出土土器実測図(3) (縮尺1/3)

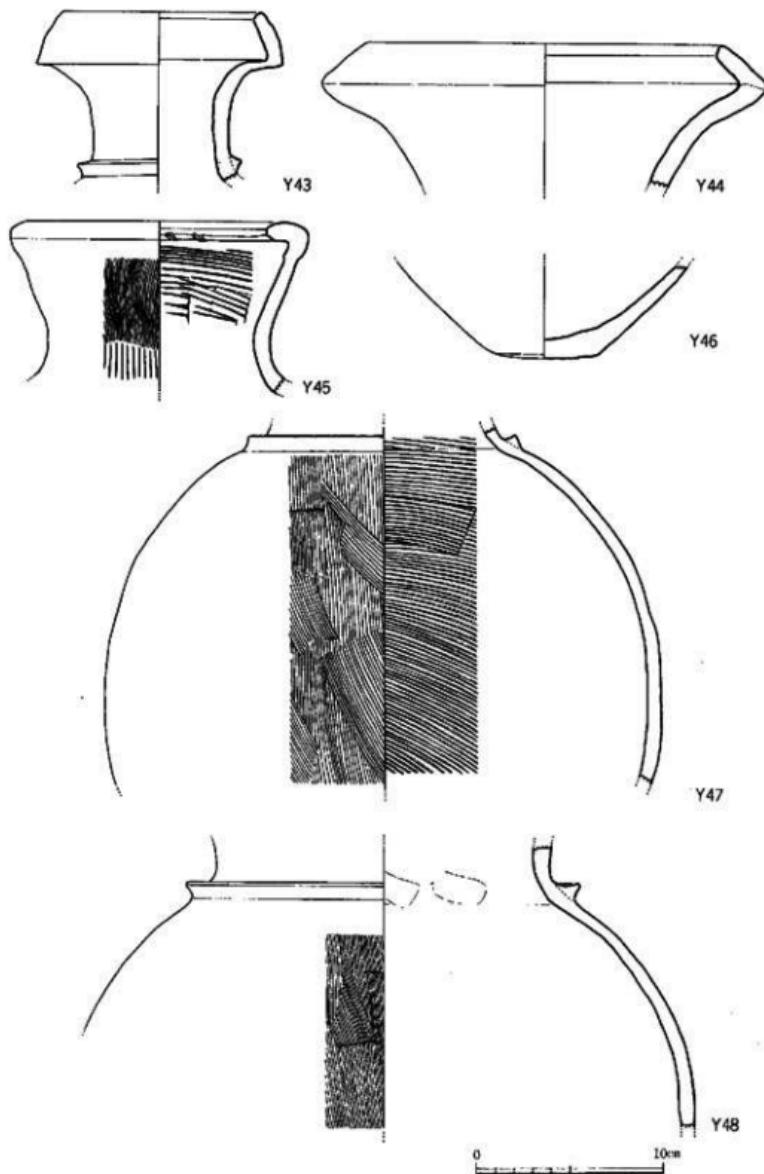


Fig. 18 出土土器実測図(4) (縮尺1/3)

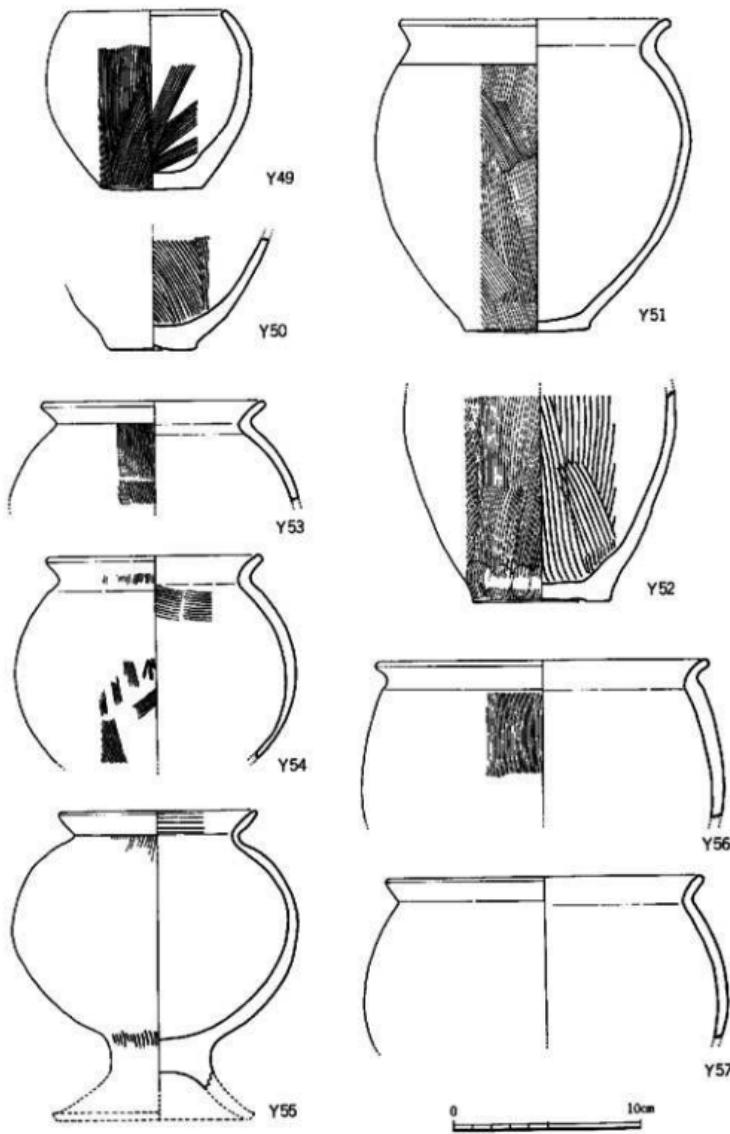


Fig. 19 出土土器実測図(5) (縮尺1/3)

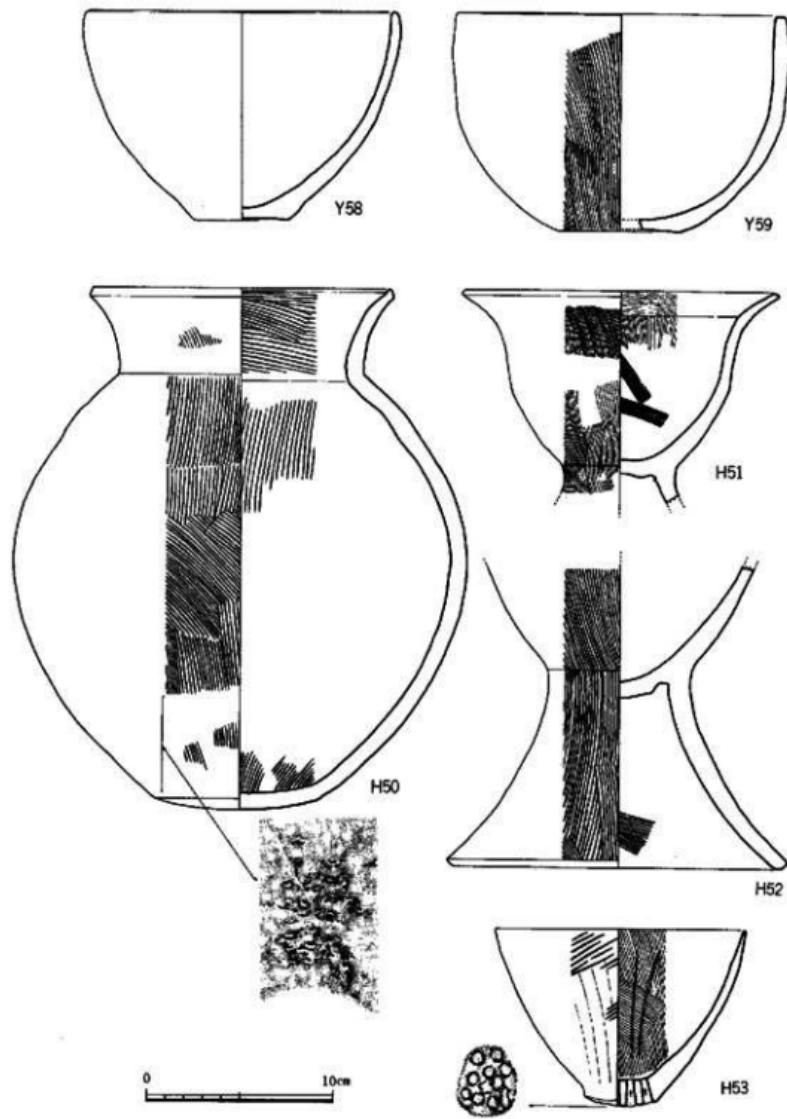


Fig. 20 出土土器実測図(6) (縮尺1/3)

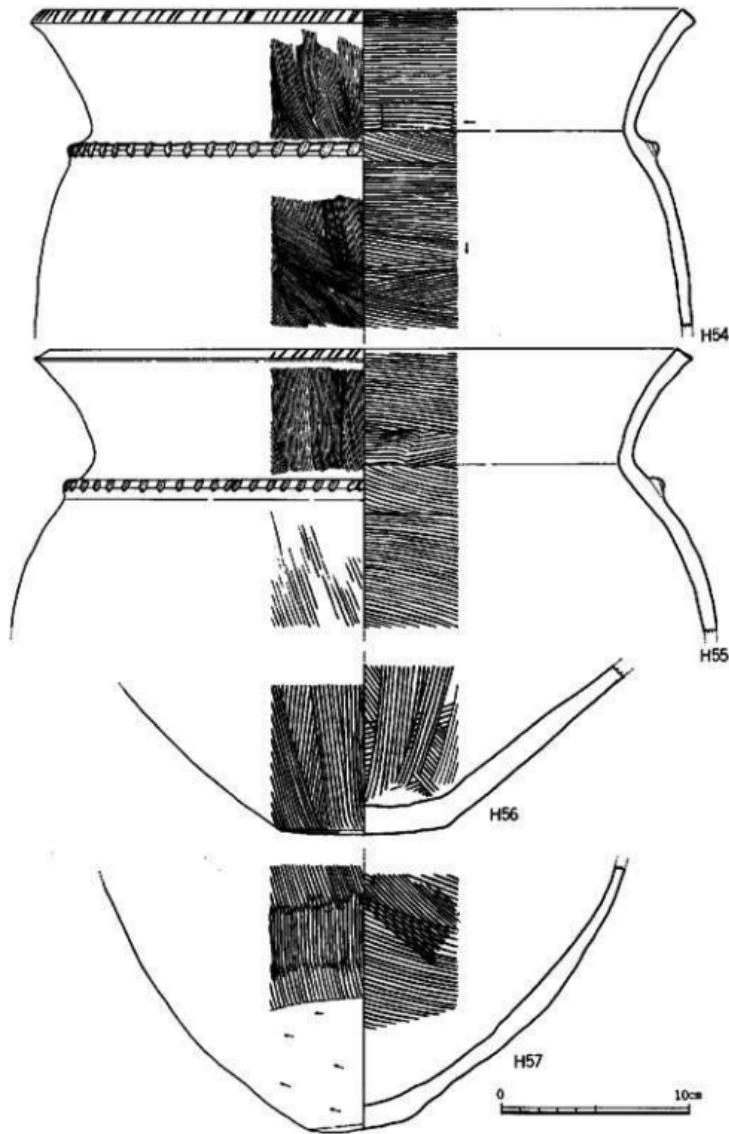


Fig. 21 出土土器実測図(7) (縮尺1/3)

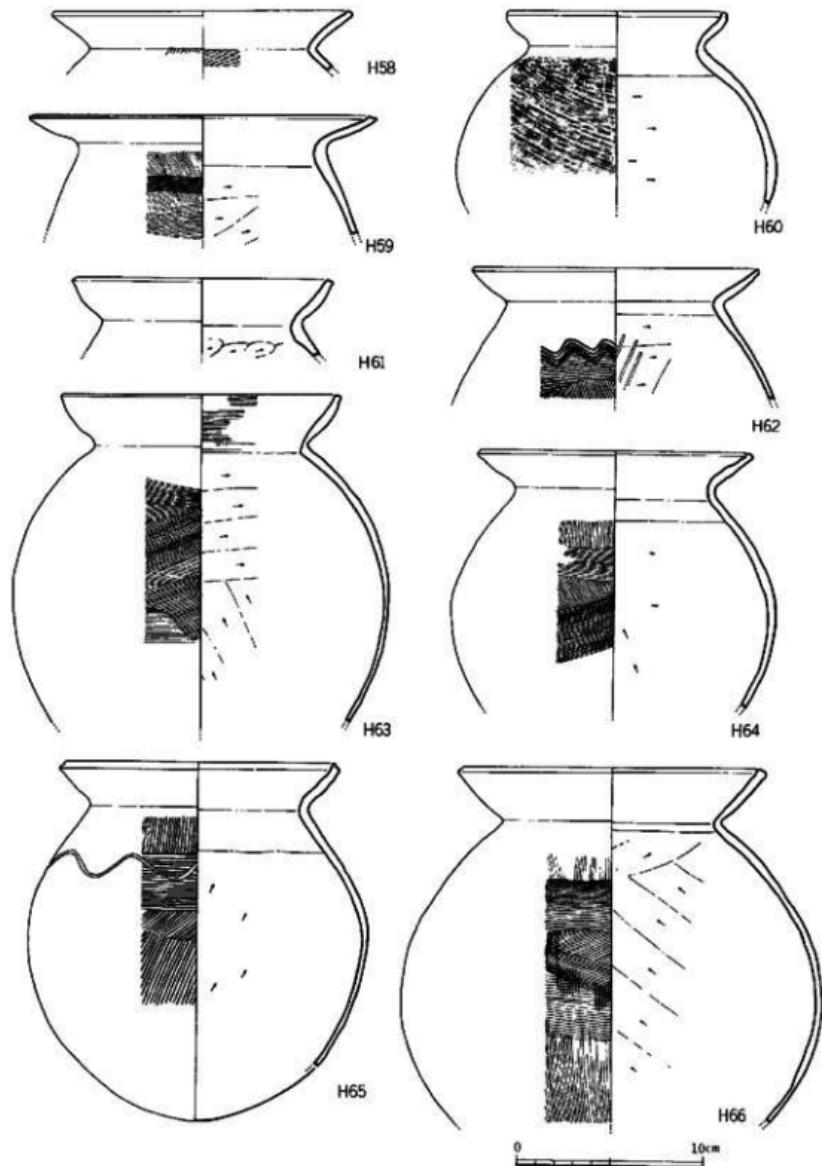


Fig.22 出土土器実測図(8) (縮尺1/3)

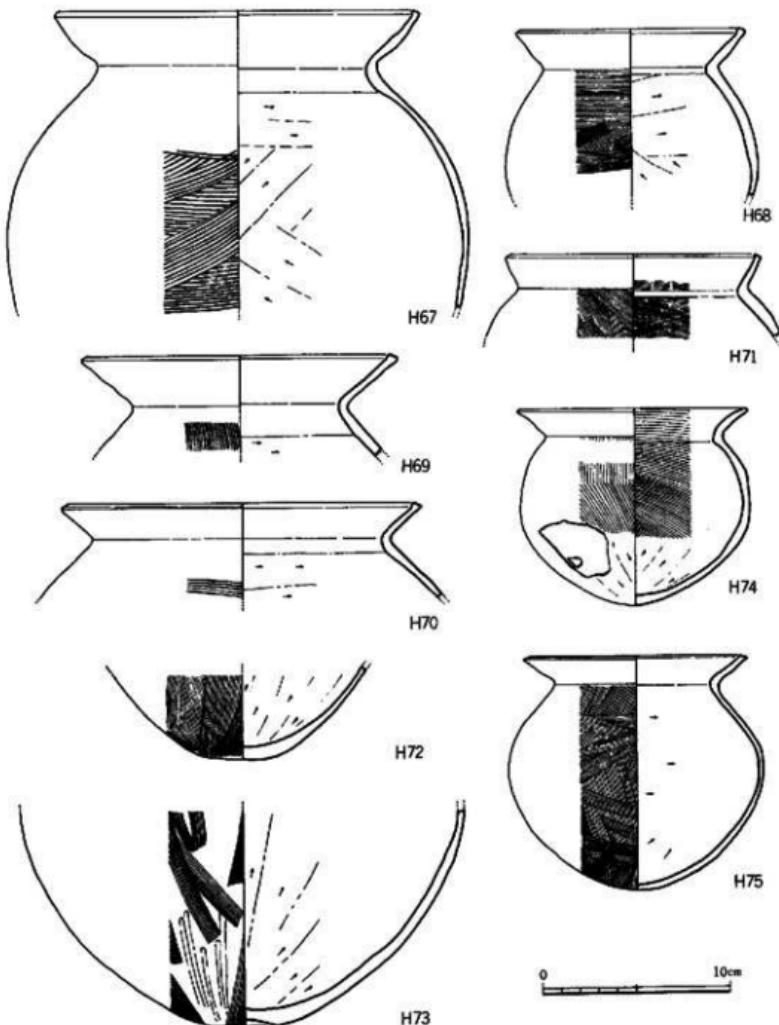


Fig. 23 出土土器実測図(9) (縮尺1/3)

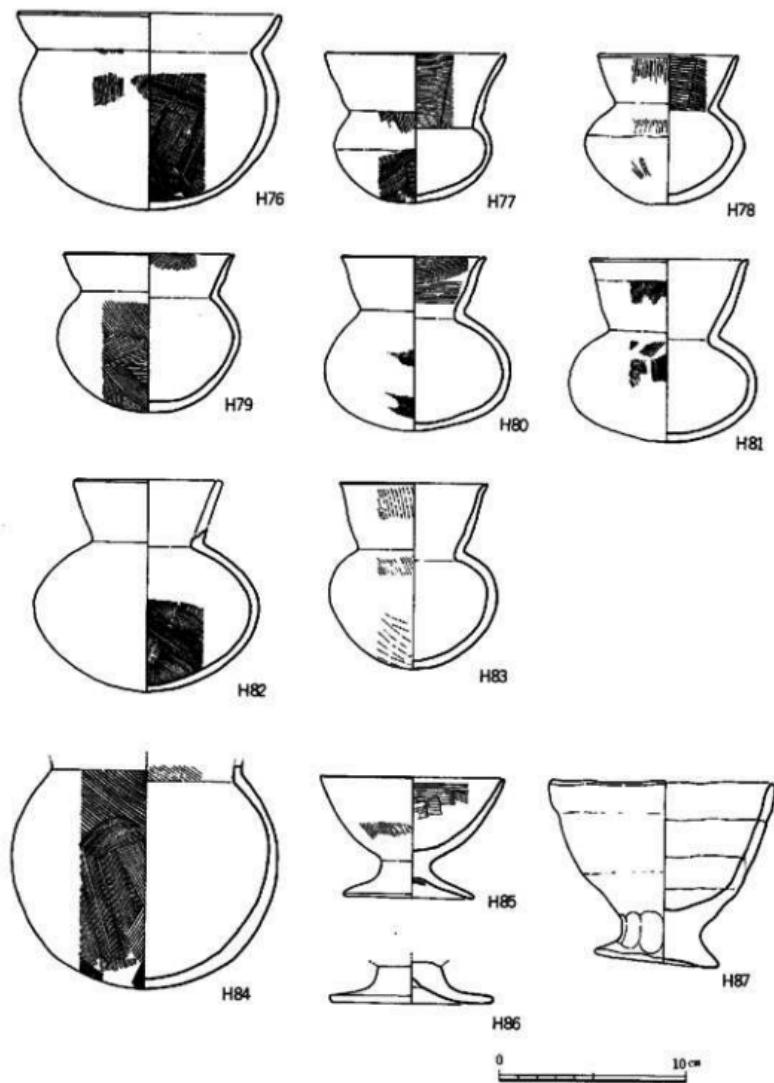


Fig. 24 出土土器実測図(10) (縮尺1/3)

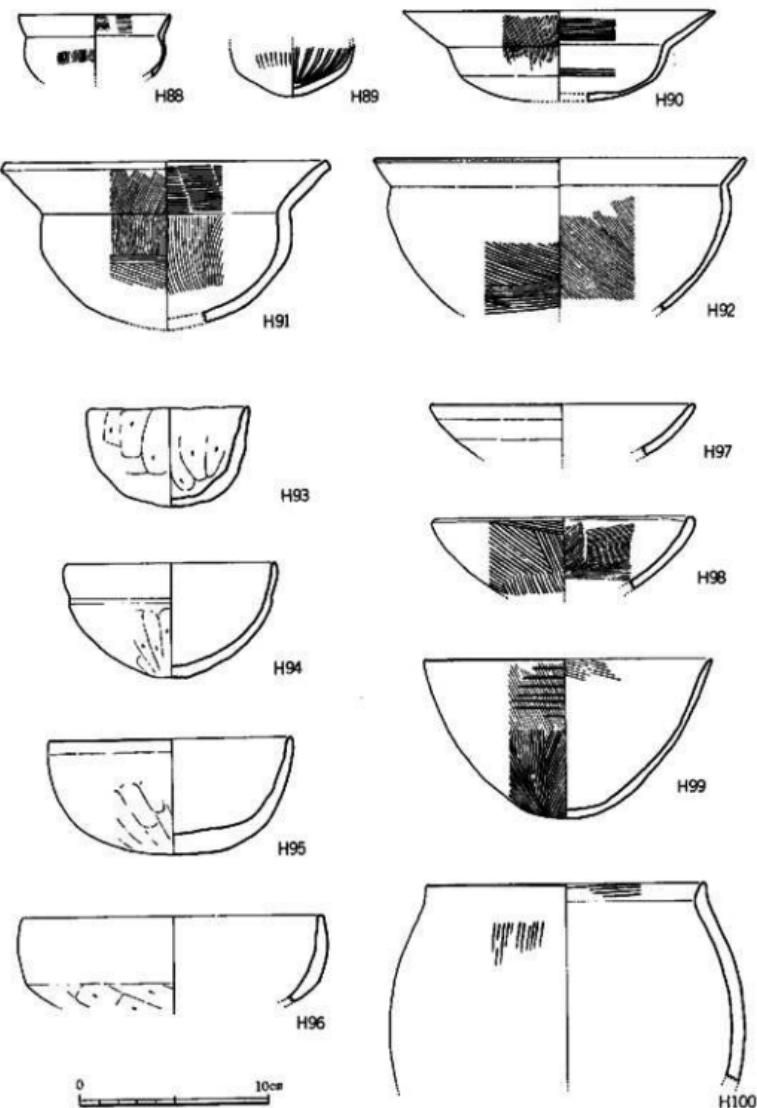


Fig. 25 出土土器実測図(11) (縮尺1/3)

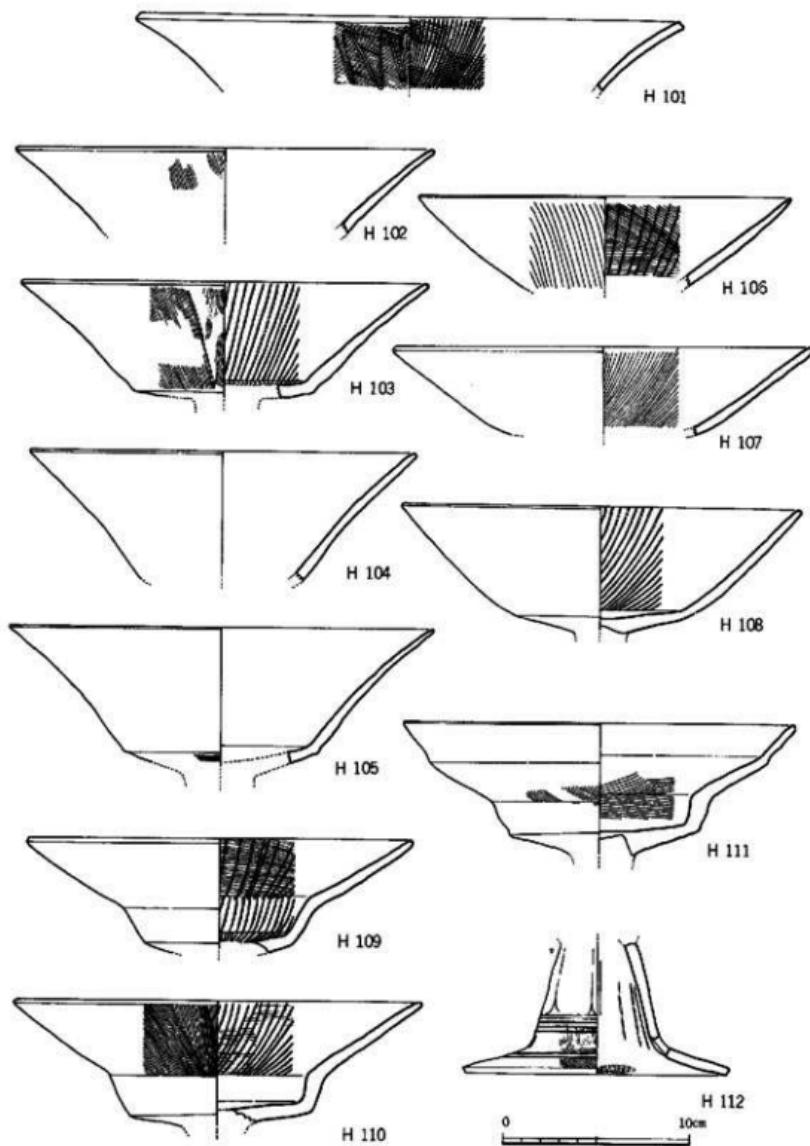


Fig. 26 出土土器実測図(12) (縮尺1/3)

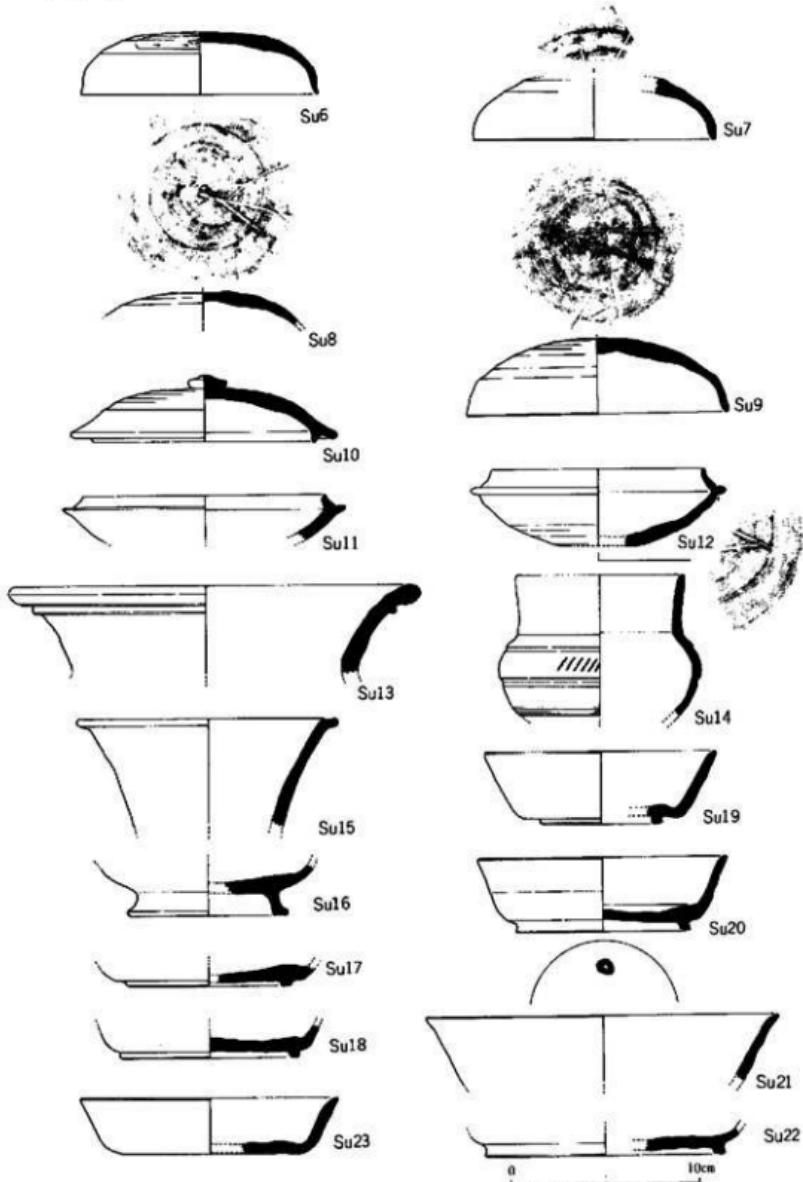


Fig. 27 出土土器実測図(13) (縮尺1/3)

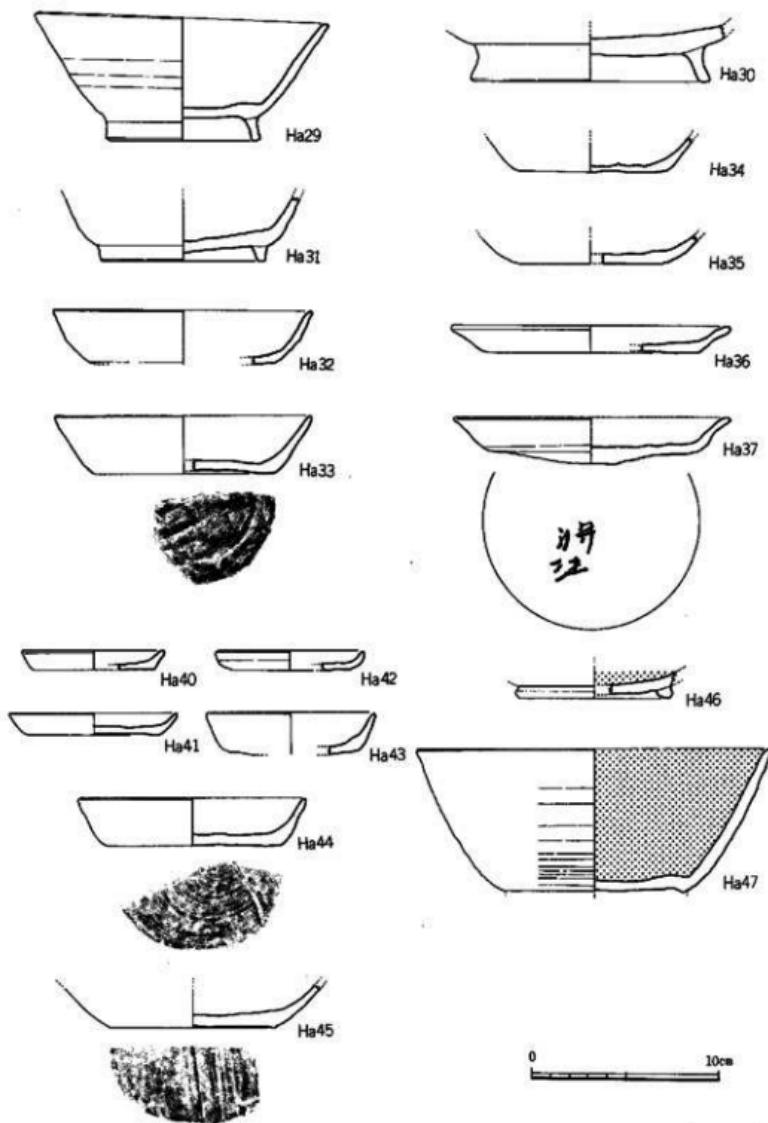
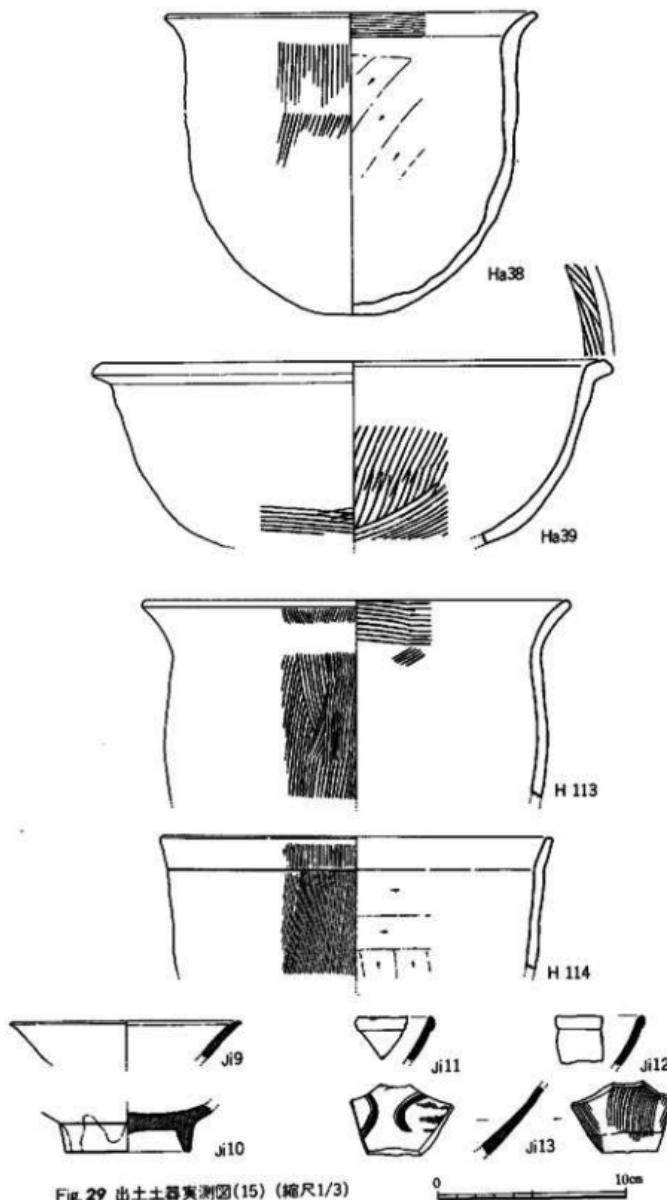


Fig. 28 出土土器実測図(14) (縮尺1/3)



## 出土土器観察表

一九 例一 ●番号欄の一段目は、J→縄文式土器、Y→弥生式土器、H→古墳時代土器、Se→須恵器、Ha→歴史時代土器と内黒土器、Ji→磁器の略号である。

二段目は登録番号、三段目は持図番号、四段目は図版番号である。

●造形は、第1~6号溝をM1~M6、第3号横状造形を構3、第1~4号溝を測1~測4、第1~2号溝を堅1~堅2と略記する。

●法量欄は、口=口径、体=体部径、底=底径(高台径)、高=器高である。

●備考欄は、胎=胎土、焼=焼成、色=色調、他=その他である。

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
J 1 137 F 15 P 27	D23区 測木間	窓	口、 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 口縁部はほぼ直線的のもので、口 脣部は先細くなっている。 外側には3条の隆起が走り、断 面は薄斜形を呈する。	外側はナデ調整。 内側は横に横方向の糸痕をナデ消 して調整している。 外側には口唇部より裏が付着して いる。	胎、毛: 小砂粒を含む 燒、普通 色、黒褐色 地、
Y 23 67 F 15 —	B15区 測3 窓辺	窓	口、 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 小さく外反し、いわゆる如意形 口縁をなす。	外側の調整は幾十度。 内側はナデ上げ調査。 口部の削り目は下端部のみで浅 い。	胎、毛: 小砂粒が多い 燒、普通 色、灰褐色 地、
Y 24 152 F 15 —	B15区	窓	口、 8.3 体、 底、 高、	口縁部の小破片で、窓部との接 合部より分離している。 窓部は、ほぼ直線的に内傾し、 口縁部は小さく外反する。 口縁部は厚さを加えず、地も明 顯な段がない。	内側は磨耗し砂粒が露出している が外側は丁寧に横ナデ調整されて いる。	胎、毛: 小砂粒を含む 燒、普通 色、内: 黑灰色 外: 灰茶色 地、
Y 25 30 F 15 P 27	B15区 測3	窓	口、 14.2 体、 18.6 底、 7.8 高、 12.4	ほぼ完形の舟垂り磨研された無 鉢型である。窓部の鉢大径は中 位にあり、く字形に外反する口 縁部をもち、窓部は丸みがある。 口縁部には2個1組の小孔が向かいあう。	外側は因矢印方向に丁寧に磨研さ れている。 舟垂りは底部をのぞく外側と口縁 部内面にみられる。	胎、毛: 精良 燒、堅敏 色、外: 舟垂り 内: 茶色 地、
Y 26 141 F 15 P 27	B15区 測3	蓋	口、 10.9 体、 底、 高、 1.7	山形状の蓋で完形。 無鉢型の蓋では縫部に2個1組 の小孔が向かいあう。	外側は磨研した後に舟垂りされて いる。 内側はナデ調整。	胎、毛: 精良 燒、堅敏 色、外: 舟垂り 内: うすい茶 地、
Y 27 58 F 15 P 27	B15区 測3	蓋	口、 14.2 体、 19.2 底、 高、	Y 25と同じように舟垂り磨研の 無鉢型であるが、Y 25に比べ窓 部のほりが大きい。 口縁部も頗るならず厚みがある。	内側はナデ調整。 外側は横方向の細かいみがきを加 えて舟垂りされている。 縫部内面の舟垂り輪はY 25より もせまい。	胎、毛: 精良 燒、堅敏 色、外: 舟垂り 内: うすい茶 地、胎土粗良だが練り不足
Y 28 44 F 15 P 27	B15区 測3	窓	口、 体、 底、 高、 8.1	舟垂り磨研無鉢型の底部。 底部は周辺部のみが突出し、平 底ではない。 小破のため径、頗りともに不正 形。	内側は頗るナデ調整。 外側は横方向に磨研され舟が走ら れる。	胎、毛: 小砂粒を含み精良で はない 燒、普通 色、外: 舟垂り 内: 灰褐色 地、
Y 29 104 F 15 —	B 5区 (M 4)	窓	口、 体、 底、 高、 8.1	窓部中位より上部を欠く。 平底の底部に環状の縫部がつ。	内側はナデ調整。 外側は横の細かいハケ目調整。 底部はナデ調整され、わずかに凹 状をなす。	胎、毛: 小砂粒を含む 燒、普通 色、灰褐色 地、

Tab. I 出土土器観察表 (1)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y30 111 F15 P27	D19区 M4 右岸	壺	口、 体、 底、 高、	口の小さい底部は、平底でなくやや不安定である。 脚部最大部は中位であり、ここで屈曲し、算盤形状をなす。	脚部中位の屈曲部は丸みがあり、明瞭な棱はない。 中位より上部は内外面とも横ナガ下部外側はみがき状に横ナガ。	新。粗: 小砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地: 脚部に黒斑
Y31 135 F15 —	D19区	壺	口、 体、 底、 高、	平底が安定した底面から、やや内溝みに筋感のついたり。 全体が漸減している。	内面はナゲ調整。 外側は窓のハケ目調整。	新。小砂粒を含む 焼: 普通 色: 茶褐色 地:
Y32 117 F15 —	D19区 M4	壺	口、 体、 底、 高、	平底の底部は厚く、周辺部をのこし、わずかに隠す。	内外面ともに丁寧なナゲ調整。	新。密: 砂粒わずか 焼: 普通 色: 茶褐色 地: 内面に黒斑
Y33 50 F15 —	B15区	壺	口、 体、 底、 高、	安定した平底で、わずかに窪む。	底部外側は未調整。 内面はナゲ調整。 外側は窓方向のハケ目調整。	新。1mmの大砂粒多い 焼: 普通 色: 外: 茶褐色 内: 黑褐色 地:
Y34 146 F15 —	B15区	壺	口、 体、 底、 高、	ほとんどを欠失しているが、安定した平底をなすのであらう。	底面部内面には指揮圧痕が見られる。 内面はナゲ調整。 外側は窓のハケ目調整。	新。小砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地:
Y35 115 F16 —	B15区 周2	壺	口、 体、 底、 高、	口縁部は逆し字形をなし、端部はやや下がりとなる。 脚部に張りはないようである。	口縁部は横ナガ調整。 外側は窓のハケ目調整。 小砂粒が表面に露出している。	新。小砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地:
Y36 110 F16 P28	D19区 M4 右岸	壺	口、 体、 底、 高、	脚部上方に張りがあり、く字形の口縁部がつく。 口縁下には断面台形の突唇が1条ある。	口縁の屈曲部は丸みがあり縦をなさない。内面はナゲ調整。 口縁部は横ナガ調整。 脚部は窓ハケ目をナゲ消し、丹波りを加える。	新。密: 小砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地: 内: 茶褐色 外: 丹波り
Y37 45 F16 —	B15区 周3 周辺	壺	口、 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 く字形に外反する口縁部の端部は丸くおさめる。	内面はナゲ調整。 口縁部は横ナガ調整。	新。粗: 砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地:
Y38 49 F16 P27	B15区	壺	口、 体、 底、 高、	口縁部はく字形に外反するが脚部は丸みがあり、明瞭な棱をなさない。	脚部内面は左上りのナゲ調整。 脚部外側は窓のハケ目調整。 口縁部は横ナガ開きされるが、内面には、ハケ目が消されている。 全体的に調整は丁寧である。	新。小砂粒を含む 焼: 普通 色: 外: 茶褐色 内: 明茶色 地:
Y39 149 F16 P27	B15区 周3 周辺	壺	口、 体、 底、 高、	張りの強い脚部に内傾する逆し字形口縁がつく。 口縁下に断面台形の突唇1条をもたらす。	口縁部から突唇までは横ナガ開き。 脚部内面は横ナガ後方に左上りのナゲ調整。	新。小砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 地:

Tab. 2 出土土器観察表 (2)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y40 46 F16 —	B15区 測3 廻辺	甕	口. 41.0 体. 底. 高.	Y39と同じような内傾する波状 字形口縁がつく。 口縁外端上面はやや水平となり、 端部は凹状となる。断面コ字形 の突帯は下方に垂れぎみである。	胴部内面はナナ調整。 口縁部は横ナナ調整。 調整は丁寧である。	胎. 小砂粒を含む 焼. 黒い 色. 灰茶色 他
Y41 93 F17 P28	D19区 M4 右岸	甕	口. 17.1 体. 30.2 底. 高.	企形のV字が欠失する。 やや長い手の跡部は中央に最大幅 があり頭部はしまる。頭部は外 方に開き口縁部は丸みをもつて 内傾し波状口縁となる。頭部に 断面三角形の突帯を延ばせる。	口縁部と突帯部は横ナナ調整。 内面はナナ調整。口縁部外面に浅 い波状が1条ある。 頭部外面は底のハケ目で丹が施設 する。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 外: 丹あり. 茶灰色 内: 茶色 他
Y42 32 F17 —	C11区 壁穴	甕	口. 17.6 体. 29.0 底. 8.0 高. 36.5*	頭部の一部を欠失する。 Y41に比べ頭部の最大幅は上方 にあり、頭部も長く口縁部の凹 山も強い。頭部には小さな断面 三角形の突帯を1条送らす。表 面は底で頭部は丸みがある。	内面は削離はげしく調節痕不鮮明。 頭部外面は細かいハケ目調整。 頭部外面は底のハケ目調整。	胎. 磨: 精良 焼. 普通 色. 茶色 他
Y43 127 F18 P28	D19区 M4 右岸	甕	口. 10.5	二重口縁の蓋で頭部より下を欠 失する。頭部は直立してのび上方 方に外反し、内傾する口縁部が つく。頭部には断面三角形の突 帯を1条めぐらす。	口縁部と突帯部は丁寧なナナ調整。 頭部は内外面ともにナナ調整。	胎. 小砂粒を含む 焼. 普通 色. 灰茶色 他
Y44 150 F18 P28	B15区	甕	口. 18.8 体. 底. 高.	頭部の上半部と口縁部のみ残る。 頭部は大きく外反してのび、口 縁部は強く内傾し、非対称的に内 傾する。	口縁部は内外面とも横ナナ調整。 頭部は内外面ともナナ調整。	胎. 磨: 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他. 外面擦耗し砂粒露出
Y45 116 F18 P28	D19区 M4	甕	口. 16.0 体. 底. 高.	頭部は欠失する。 頭部は直立的にのび、口縁部は ほぼ水平に折り曲げる。 折り込しが丸みがある。	頭部内面は粗い横ハケ目。外面は 細かいハケ目調整。 口縁部の折り込しが強である。 全体的に調整、整形とも強い。	胎. 磨: 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他
Y46 103 F18 —	B5区 M4	甕	口. 体. 底. 5.1 高.	底部の小破片。 底部は丸底に近い形状をなす。	内面はナナ調整。 底部から肩部への境部はヘラナナ 調整か(?)	胎. 磨: 小砂粒多い 焼. 普通 色. 灰茶色 他
Y47 165 F18 —	B4区 M4 左岸	甕	口. 体. 29.8 底. 高.	肩下半部と口縁部を欠く。 頭部は弧形をなし、頭部との境 に上向きに断面三角形の突帯を 1条送らす。	突起部は横ナナ調整。 頭部は内外面ともハケ目調整。 外側のハケ目は上から下へ、左か ら右への順序である。 調整はさわめて丁寧。	胎. 磨: 小砂粒わずか 焼. 普通 色. 灰茶色 他
Y48 161 F18 —	C12区 壁穴	甕	口. 33.4*	Y47と同じように肩下半部と口 縁部を欠する。 頭部の断面三角形の突帯は、わ ずかに上方に突出する。	内面は左上りのヘラナナ調整。 頭部外面はナナ調整。 頭部外面は細かいハケ目調整。 調整は丁寧である。	胎. 磨: 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他
Y49 14 F19 P29	B5区 M4	無蓋甕	口. 8.3 体. 10.9 底. 5.5 高. 9.6	平底の底部に球形の頭部がつき、 上部で内溝しそのまま口縁部と なる。 口縁部は内傾し丸くおさめてい る。	口縁部は横ナナ調整。 頭部外面はハケ目をナナ調整して いる。	胎. 砂粒少ない 焼. 黒い 色. 灰茶色 他

Tab. 3 出土土器観察表 (3)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y50 78 F19 P29	B15区 溝2	無縁 壺?	口, 体, 底, 高.	平底の腹部中央は、わずかに盛 んでいる。 胴部の上半部を欠失するので全 形を知りえないが無縁壺か?	胴部内面から底部の境まで細いハ ケ目調査。 胴部外面は粗いナデ。	胎: 砂粒少ない 地: 普通 色: 底茶褐色 他: 脱土の跡不足
Y51 18 F19 P28	D 区	壺	口, 14.6 体, 17.0 底, 6.7 高, 16.8	底部は平底であるが、中央部が わずかに突出する。 胴部の最大径位置は中位よりや や上にあり、口縁部はく字形に 外反する。 腹曲部はなく丸みがある。	口縁部は横ナデ調整。 胴部外面。	胎: 砂粒少ない 地: 良好 色: 底茶色 他:
Y52 156 F19 P29	B15区	壺	口, 体, 14.6 底, 7.4 高,	平底のままで並めの胴部がつく。 胴部上半部を欠いているが、Y 51のような器形をなすのであろ う。	底部中央部は窪み、未開墻のまま。 胴部内面は粗いハケ目調査。 胴部外面部は指揮伝板が見られる。 胴部外面は内面よりも細かいハケ 目調査。	胎: 砂粒少ない 地: 普通 色: 外: 底茶色 内: 底茶褐色 他:
Y53 63 F19 P29	B5区 M4	台付 壺	口, 12.0 体, 底, 高,	胴部下半部を欠失する。 口縁部にく字形に外反し、屈曲 部内面は丸みがある。 胴部は球形に近い。	口縁部は横ナデ調整。 胴部内面はナデ調整され器面はな らかである。 胴部外面は細かい縦のハケ目をナ デしている。	胎: 密: 砂粒少ない 地: 普通 色: 底茶色 他:
Y54 147 F19 —	B15区	台付 壺	口, 11.6 体, 15.0 底, 高,	Y53と同じようにく字形に外反 する口縁部は球形の胴部がつく。 底部を欠いてく字形のような脚が つくものと思われる。	口縁部は断面方形に近いが脚部は 丸がある。 口縁部外面は縦ハケ目を強く横ナ デして消す。 胴部内外面ともにハケ目をナ デしている。	胎: 密: 砂粒少ない 地: 塩鐵 色: 底茶色 他:
Y55 31 F19 P29	D 区	台付 壺	口, 10.6 体, 15.4 底, 高,	口の一部が残る。 球形の胴部にく字形に外反する 口縁部がつく。 口縫痕部は丸みがあるが、器 體はうすくなっている。	口縁内面は粗い横ハケ目後に横ナ デ調整。底部はナデ調査。 台付合部外面は縦のハケ目後に横 ナデ調整している。 調査は全体的に特に丁寧でない。	胎: 砂粒少ない 地: 塗 色: 外: 底茶色 内: 濃底茶色 他:
Y56 95 F19 P29	C11区 壁穴	壺	口, 17.8 体, 19.4 底, 高,	Y57に比べると胴部の張りは弱 く、口縁部の屈曲も小さい。 口縫痕部は丸くおさめている。	口縫痕部は強く横ナデし、ゆる やかな段を作す。 胴部内面は左上りのナデ調査。 胴部外面は細かい縦ハケ目調査。	胎: 密 地: 塗 色: 茶色 他: 外面に縁?
Y57 109 F19 P29	D19区	壺	口, 17.0 体, 19.5 底, 高,	底部を欠く。 球状の胴部にく字形に小さく外 半する口縫痕部がつく。 口縫痕と屈曲部は丸みがある。	口縫痕部は横ナデ調整。 胴部は内外面ともに丁寧なナデ調 査。	胎: 密: 小砂粒少ない 地: 塗 色: 底茶色 他:
Y58 89 F20 P29	B 区 M4	鉢	口, 16.5 体, 底, 5.0 高, 11.2	ほぼ平底な底部から体部は内側 しながらのび、上方でわずかに 内傾する。 縁部は丸くおさめる。	内面に上半部は右上りのナデ調査。 外縁はナデ調査。	胎: 小砂粒多い 地: 普通 色: 外: 赤茶色 内: 底茶色 他:
Y59 19 F20 P29	B5区 M4	鉢	口, 17.6 体, 底, 6.6 高, 11.6	平底から内側ぎみに体部がのび、 口縫痕部は直立ぎみとなり。上縁 は平坦面をつくる。	口縫痕部は内外面とも横ナデ調査。 体部内面は左上りのナデ調査。 体部外面は縦のハケ目調査で、上 から下、右から左への順序である。	胎: 小砂粒少ない 地: 普通 色: 外: 黒褐色 内: 茶褐色 他:

Tab. 4 出土土器観察表 (4)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H50 158 F20 P30	D 区	甕	口. 16.0 体. 24.2 底. 8.7 高. 27.9	丸底ぎみの底部に最大径を中位にもつ長めの脚部がつく。颈部はしまり、外反して口部部をつくる。口縁部内面は、わずかに上方に突出する。ほぼ完形。	脚部外面はハケ目を横ナタ削し。脚部外面は上から下へハケ目調整。脚部下面に系形の圧痕がある。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 灰茶色 性.
H51 29 F20 P30	B15区 周 2	甕(肩付甕)	口. 17.0 体. 底. 高.	脚部のはほとんどを欠失するが、H52のような脚部のくびである。口縁部はゆるやかに外傾する。底部は内外面とも縦を有さない。	口部は内面は横ハケ目。外側は横ナタ調整。体部下半部から脚部へ連続して細い縦のハケ目調整。脚部内面は指押圧痕のこころ。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 外: 茶褐色 内: 黑褐色 性.
H52 12 F20 —	B15区 周 2	脚付甕	口. 体. 底. 高. 18.4	脚部上半部を欠くがH51と同じような脚部を有するのである。脚部は長く、大きく開き安定感がある。	脚部内面はナタ調整。脚部外側は肩のハケ目調整で脚部に連続している。脚部内面は横のハケ目を横ナタして削している。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 性. 脚部から脚部にかけて黒斑
H53 13 F20 P30	B15区 周 2	甕	口. 13.4 体. 底. 3.9 高. 9.5	完形の甕。 不安定な底部には11個の小孔があり、脚部に穿孔されるが、うち1個は貫通していない。 脚部は直角のくびき、口縁部はそのまま縮くおさめる。	脚部内面は細かいハケ目調整の後、内面に縦の直孔がある。 口縁部外側は右上りの叩き痕があり、その後に縦のヘラナタ調整を加える。	胎. 砂粒わずか 焼. 塗り 色. 外: 灰茶色 内: 赤茶色 性. 脚部に黒斑
H54 41 F21 P31	B15区 周 2	甕	口. 34.3 体. 35.4 底. 高.	大型の腹で脚部中位より下を欠く。口縁部はく字形に外反し、長いびく。脚部は丸みがあり、にぶい後をもつ。	H13脚部と脚部央帶の割れ目は丸みというよりも押した感じで、開閉不規則。内面は口縁部から横ナタ調整。口縁部は口縁部を横ナタしめた後に縦のハケ目調整。内面の脚部は右から下へ、右から左への順。	胎. 砂粒多い 焼. 普通 色. 次茶色 性.
H55 42 F21 P31	B15区 周 3	甕	口. 33.5 体. 38.0 底. 高.	柱54と同じように大型の甕であるが脚部にやや張りがある。 口縁部はさらにも丸みがある。	脚部内面は横ハケ目を部分的にナタ削している。 脚部外側は横ハケ目をほとんどナタ削している。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. うす茶色 性.
H56 162 F21 —	D19区 M 4	甕	口. 体. 底. 高. 9.0	不安定な底部から脚部が直線的に伸びる。 器壁は全体的に厚くつくられていて。	底部内面は指押さえのまま。外面は粗いハケ目調整。 脚部内面は脚部から脚部へハケ目調整。	胎. 粗: 砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 性.
H57 92 F21 P31	D 区	甕	口. 体. 底. 高. 4.8	底部は丸底で不安定である。 脚部は内凹しながら伸びる。	脚部は内外面とも粗いハケ目調 整で費かりかえしている。 底部外側は横いヘラ削りで内面はナタ上げ調整。	胎. 砂粒多い 焼. 良好 色. 灰茶色 性.
H58 151 F22 —	B15区 M 4	甕	口. 15.6	口縁部の小底。 (く字形に外反する)口縁で、屈曲は強く内面に側をもつ。球状の脚部がつくのである。	脚部外側に縦のハケ目底がわずかに残る。 口縁部は内外面とも横ナタ調整。 脚部内面は屈曲部より横のハケ目調整。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 灰茶褐色 性. 脚付看
H59 125 F22 P33	D19区 M 4 右半	甕	口. 17.6 体. 底. 高.	く字形口縁であるが脚部上半部の内傾が弱いために屈曲は大きくなり丸みをもつ。 口縁はやや長く、脚部内面は上方に小さく突出する。	脚部外側は横ハケ目後に横ハケ目調 整で脚部上部にハケ目工具で波状沈線を一回させる。 脚部内面はナタ上げ。 脚部内面は屈曲部のやや下方からヘラ削り。	胎. 粗: 小砂粒含む 焼. 塗り 色. 灰茶白色 性.

Tab. 5 出土土器観察表 (5)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H 60 129 F 22 P 32	D 19 区 M 4	甕	口、11.4 体、17.2 底、 高、	球形の胴部は上半部でよくしまる。 口縁部はゆるやかに弧曲して、内側しながらのびる部で小さく突立し丸くおさめている。	口縁部外側は凸状の段がつく。 胴部内面は底曲部より約1cm下よりへら削りされる。 胴部外面は右下りの印き。 口縁部は内外面とも横ナナ調整。	胎、小砂粒を含む 地、普通色、灰茶色 他、外面に媒付着
H 61 80 F 22 P 33	B 15 区 南 2	甕	口、13.2 体、 底、 高、	く字形に外反する口縁部はやや内側しながらのびる。 口沿部は直線的に外傾する。	胴部のへら削りは底曲部のわずかに下よりなされる。 底曲部内面はナナ上げ。 口縁部は横ナナ調整。 胴部外面にはハケ目は見られない。	胎、わずかに砂粒を含む 地、普通色、外：灰茶色 内：暗灰茶色 他、
H 62 126 F 22 P 33	D 19 区 M 4	甕	口、15.2 体、 底、 高、	胴下半部を欠く。 胴上半部は直線的に内傾し、胴部はよくしまる。 (く字形に外反する)口縁部はわずかに内側してのびる。	胴部内面は底曲部の下よりへら削りし、部分的にナナ上げ。 底曲部は横ハケ目で下方は壁ハケ目調整。 口縁部の横ナナ後にハケ目工具で底状凹部を運らせる。	胎、わずかに砂粒を含む 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 63 90 F 22 P 32	B 5 区 M 4	甕	口、14.4 体、20.0 底、 高、	底部を欠く。 球形の胴部にく字形に外反する 口縁部がつぶつ。 底曲部はふい縁をもつ。 口縁部は突出せず平坦となる。	底曲部内面は底曲部よりへら削りされ、下半部が左上り、上半部は右方向になれる。 口縁部内面は壁ハケ目で調整。 胴部外面は細かい張のハケ目調整。	胎、少砂粒多い 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 64 88 F 22 P 32	B 5 区 M 4	甕	口、14.2 体、17.5 底、 高、	球形胴部の最大径位置は中位よりやや下にある。 口縁部は丸みがあり、口縁部は、わずかに内湾しながらのびる。	底曲部内面はナナ上げ。 底曲部内面のへら削りは稍い。 底曲部は横ナナ目で調整で下半部はナナ上げ調整。	胎、小砂粒を含む 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 65 17 F 22 P 32	B 5 区 M 4	甕	口、14.2 体、18.1 底、 体、19.2	球形の胴部は中位の最大径より上位に底部へとびる。 (く字形)口縁部の底曲部内面は上方に小さく突出している。 胴上半部にへらで波状模様を残す。	口縁部はやや厚いが全体的にうすいつくりでよく整った器形をなす。 底曲部内面のへら削りは底曲部より約2cm下より右上りになれる。	胎、密：砂粒少ない 地、普通色、外：黒褐色 内：灰茶色 他、媒付着
H 66 155 F 22 P 32	D 区 M 4	甕	口、15.8 体、22.6 底、 高、	表面はよくしまり直曲は強い。 口縁部は内側にわずかに突出する。	口縁部外側は横ナナ調整。 胴部外側は壁ハケ目で壁ハケ目調整。 底曲部内面のへら削りは底曲部の直下よりなされる。	胎、小砂粒多い 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 67 96 F 23 P 32	B 5 区 M 4	甕	口、18.8 体、24.6 底、 高、	胴部上位にやや張りがある。 口縁部は内湾ぎみにのび、底部は内側に小さく突出する。	口縁部は横ナナ目調整。 底曲部内面はナナ上げ。 胴部外側は壁ハケ目調整。上半部はナナ消し。 全体的に丁寧な調整である。	胎、小砂粒を含む 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 68 64 F 23 P 33	B 5 区 M 4	甕	口、11.4 体、13.5 底、 高、	胴部の最大径位置は中位よりやや下方にある。 (く字形)口縁部は直線的にのび、底部は内側に丸く突出する。	胴部外側は横ナナ目調整。 口縁部内面は横ナナ目調整。 底曲部内面は底曲部よりへら削りする。 胴下半部は底が厚く付着する。	胎、密：小砂粒を含む 地、普通色、灰茶色 他、媒付着
H 69 79 F 23 P 33	B 15 区 南 2	甕	口、16.0 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 口縁部は直線的にのび、やや長めである。 底部は外傾し、四角となる。 底曲部内面は丸みがある。	口縁部外側とも横ナナ目調整だがやや凹凸めだつ。 底曲部内面は底曲部よりへら削りする。 胴部外側は壁ハケ目調整。	胎、少砂粒多い 地、普通色、灰茶色 他、媒付着

Tab. 6 出土土器観察表 (6)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H70 99 F23 P33	B5区 M4	甕	口. 18.5 体. 底. 高.	く字形口縁の罐部は内側に丸く突出し、上面は凹状となる。 口縁部は直線的にのび泡に比べ短い。	肩部外側の調整は横ハケ目をナデ調している。 肩部内面は横のヘラ削り。	胎. 小砂粒多い 地. 墓色 色. 灰茶色 性. 風の付着なし
H71 76 F23 P33	B15区 測2	甕	口. 13.0 体. 底. 高.	口縁部の小破片。 口縁部はく字形に外反するが細 曲小さく立ちあがり、さらに短い。 肩曲部にはくい縫をもつ。 口縁部は、わずかに内側に突出 する。	肩部は内外面ともに細かいハケ目 調整。 口縁部は横ナデ調整。	胎. 小砂粒少ない 地. 普通 色. 灰茶色 性. 風の付着なし
H72 102 F23 —	B5区 M4	甕	口. 体. 底. 高.	丸底の底部小破片。	内面は上方へのヘラ削り。 外側は適時計まりに細かいハケ 目調整。	胎. 小砂粒少ない 地. 墓色 色. 外: 黒色 内: 灰茶色 性. 風付着
H73 100 F23 P33	B5区 M4	甕	口. 体. 底. 高. 3.6	小さな丸底の中央部は陥み上げ 底状となる。 腹部は球形をなすのである。	内面は上方へのヘラ削り。(ヘラ ナデ上げ) 外側は底のハケ目で部分的に粗 いナデ消し。	胎. 密: 褐良 地. 墓 色. 外: 黑茶色 内: 灰茶色 性. 風付着
H74 141 F23 P33	D18区 測3	甕	口. 12.3 体. 12.3 底. 高. 10.6	H75とともに小型の甕で、光沢品。 腹部は球形をなすが底部に向か ってややとがる。 口縁部は内側しながらのび、肩 曲部にはくい縫をもつ。	口縁部内面は横ハケ目を横ナデで 消す。 下半部は内外面ともにヘラ削り。 肩部に小孔があるが入為的なもの と思われる。	胎. 小砂粒を含む 地. 普通 色. 灰茶色 性. 風付着
H75 11 F23 P33	B5区 M4	甕	口. 12.0 体. 13.7 底. 高. 12.6	腹部最大径は中位にあるが、頸 部に向直角的に内傾する特徴 はH65にもある。 内湾しながらのびる口縁部も同 じ特徴をもつ。	腹部外側は細かい縦ハケ目後に斜 めのハケ目調整を加える。 全体的にう手なつくりをなし、 よく變っている。	胎. 小砂粒多い 地. 普通 色. 灰茶色 性. 風付着
H76 37 F24 P34	B15区 測2	丸底甕	口. 14.0 体. 13.8 底. 高. 10.5	偏球状の体部にく字形に外反す る口縁がつく。 口縁部は内側みにのび縫部は 丸くおさめる。	口縫部は内外面とも横ナデ調整。 体部内面は細かいハケ目調整。 体部上半部外側は横ハケ目を横ナ デ消し。下半部はナデ調整。	胎. 密 地. 墓 色. 灰茶色 性. 風付着
H77 20 F24 P34	B15区 測2	丸底甕	口. 9.6 体. 8.4 底. 高. 8.1	偏球状の体部中位はややかどり 頸部はよくくしまる。 頸部はあまりしまらず、体部延 よりも口縫部が大きい。 口縫部は体部に比べ長く、やや 外湾しながらのびる。	口縫部外側は横ナデ。内面は横ハ ケ目後ろに横ナデ調整。 体部外側は細かいハケ目調整で上 半部はナデ消している。 肩曲部内面は縫がつく。	胎. 小砂粒少ない 地. 墓 色. 茶色 性. 口縫部内面に黒斑
H78 27 F24 P34	B15区 測2	丸底甕	口. 7.2 体. 6.6 底. 高. 8.1	偏球状の体部中位はややかどり 頸部はよくくしまる。 口縫部は直線的にのび縫部で微 妙に弯曲する。 口縫部は体部延よりも小さい。	口縫部内面は横ハケ目。外側は横 ハケ目後ろに横ナデ調整。 体部下半は丁寧なナデ調整で光沢 がある。	胎. 砂粒少ない 地. 墓 色. 黑褐色 性. 風付着
H79 24 F24 P34	B15区 測2	丸底甕	口. 9.2 体. 9.8 底. 高. 9.2	口縫部は直線的に外反するが短 かい。 体部は球状に近く、口縫部は体 部延よりも小さい。	口縫部内面のハケ目は外側と同時 に横ナデで消される。 体部外側はハケ目調整、内面は粗 いナデ調整。	胎. 小砂粒少ない 地. 墓 色. 茶色 性. 風付着

Tab. 7 出土土器観察表 (7)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H80 21 F24 P34	B15区 測2	丸底壺	口、7.7 体、9.9 底、9.3	体部は楕球状で張りが強い。 口縁部は内側しながらのび、週部で小さく外反し先端をくびれる。 体部径が口縁径よりも大きい。	体部外面のハケ目はナデ削し。 口縁部内面の横ハケ目も横ナデ調整される。	胎、小砂粒少ない 地、堅敏色、外：黒茶色 内：茶褐色
H81 23 F24 P34	B15区 測2	丸底壺	口、8.6 体、10.3 底、9.8	口縁部はH80と同じような特徴を持つが、さらに長く頸部に丸みがある。 全体は楕球状で頸部はよくしまる。	体部外面の上半部は細かいハケ目、 下半部はナデ削製。 口縁部外面の横ハケ目は横ナデで削されるが、口縁部は強く横ナデし段がつく。	胎、審：砂粒少ない 地、堅敏色、ナチュラル色
H82 144 F24 P34	B15区 測2	丸底壺	口、7.9 体、12.0 底、11.4	口縁部を欠く。 頸部はよくしまり頸部にはよい模をもつ。 全体は楕球状で張りがある。	体部下半部内面は細かいハケ目調 整で、上半部はナデ。 外側はハケ目後に丁寧なナデ調整を加え器面は滑らかである。	胎、審：砂粒少ない 地、堅敏色、茶褐色
H83 25 F24 P34	B15区 測2	丸底壺	口、8.0 体、9.0 底、10.0	よくしまった頸部にH80、81と同じ特徴をもつ頸部がつく。 全体は球状であるが底部がやや尖りぎみである。	口縁部外面の横ハケ目は横ナデで削される。 体部下部は粗い条痕がのこる。	胎、砂粒少ない 地、堅敏色、灰茶色
H84 160 F24 P34	D18区 M4	丸底壺	口、 体、14.2 底、 高、	口縁部を欠くが、ほぼ直立に立ちあがっているようである。 全体は球状に近く、特に北へ大きき。小型丸底壺とは別にすべ きか。	体部外面の調整は上半部を粗いハ ケ目後に下半部にかけて細かいハ ケ目後に頸におこなう。 体部内面はナデ調整。	胎、砂粒少ない 地、堅敏色、灰茶色
H85 87 F24 P33	B5区 M4	台付 鉢	口、9.6 体、 底、 高、6.4	半球状の縁に低い吉がつく。 器腹は薄く、よく整った器形をなす。	調整は全体的に粗い。 器前内面は粗いハケ目後に横ナデ 調整。下半部はナデ。 下半部外面は粗いハケ目をナデ削 し、台部は横ナデ調整。	胎、審 地、普通色、茶褐色
H86 66 F24 —	B5区 M4	台付 鉢	口、 体、 底、 高、8.8	H85よりもやや底径の大きい台 部と上部を欠く。	外面は横ナデ調整。 内面中央部は円形に盛む。	胎、審 地、堅敏色、灰茶色
H87 146 F24 P33	D19区 M4 (右肩上崩)	台付 鉢	口、12.2 体、 底、 高、9.8	瘤みのある半球状の体部に台が つくが、全体的に瘤なつくりをなす。	体部は約2mm幅で4段接合されて いる。 台根部外面は指拌え痕がみられる。	胎、小砂粒を含む 地、普通色、灰茶色
H88 39 F25 —	B15区 測2	鉢	口、8.0 体、7.3 底、 高、	半球状の体部に直線的に外反する 口縁部がつく。 頸部はあまりしまらないが、内 面にはよい模をもつ。	両手のつくりで口縁部内面の横ハ ケ目と体部の横ハケ目は横ナデで 削される。	胎、審 地、堅敏色、外：茶 内：灰茶色
H89 40 F25 —	B15区 測2	鉢	口、 体、 底、 高、	底部の小破片。 丸底であるが尖りぎみである。	体部内面はナデ調整の後に細かい 模のみがきか？ 体部外面はハケ目後にナデ調整。	胎、審 地、堅敏色、灰茶色

Tab. 8 出土土器観察表 (8)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H90 6 F25 P34	B 区	鉢	口. 16.8 体. 底. 高. 4.9	浅い体部に外方に開く口縁部が つく。 口縁部はほぼ直線的に丸くのび 端部は縮くなっている。	薄手のつくりで調整は全体的に丁 寧である。 底部内面はよい接着をなす。	胎. 密 燒. 塗装 色. うす茶色 他.
H91 131 F25 P34	D 区	鉢	口. 16.5 体. 底. 高. 9.0*	半球状の体部は、中位よりわざ かに上方に最大膨がある。 口縁部はやや外周彎みで端部は 断面方形でやや凹状となってい る。	口縁部. 体部ともハケ目調整で口 縁部は横ナナメ削し、体部外側はナ ナメ削し。	胎. 粒粒多い 燒. 普通 色. 茶色 他.
H92 101 F25 —	B 5 区 M 4	鉢	口. 20.0 体. 底. 高.	底部を欠く。 H91に比べひとまわり大きい鉢 で、口縁部はく字形に外反する が頗る。	体部内面は口縁部の横ナナメ削に相 応しいケ目調整をする。 体部外側の下半部は粗いハケ目調 整。	胎. 砂粒少ない 焼. 普通 色. 茶色 他.
H93 26 F25 —	B 5 区 M 4	鉢	口. 8.6 体. 底. 高. 5.3	手舟型的上器で器面の凸凹が はげしい。 体部下部より直線的にのびる 縁部をなす。		胎. 砂粒多い 焼. 普通 色. 黑褐色 他.
H94 22 F25 —	B 15 区 測 2	鉢	口. 11.0 体. 底. 高. 6.1	半球状の体部は上半部に段をも りわざかに内側した口縁部が立 つ。 底部は小さな平底状をなしてい る。	口縁部は横ナナメ調整。 体部内面はナナメ調整。外側は瓶の ヘラ削り。	胎. 密 燒. 壓い 色. うす茶 他.
H95 143 F25 P34	D 区	鉢	口. 13.0 体. 底. 高. 6.2	半球状の体部に丸みのある口縁 部がつく。	口縁部は横ナナメ調整。 体部内面の横ナナメ調整は丁寧であ る。 体部外側はへら押え。	胎. 密 燒. 壓い 色. 深茶色 他.
H96 47 F25 —	B 5 区 M 4	鉢	口. 16.0 体. 底. 高.	H95のような半球状の体部であ るが、口縁に比べ浅く口縁部は わざかに内側している。口縁部 は丸みがある。	口縁部は横ナナメ調整。 体部内面と外側上部はナナメ調整。 体部外側の下半部はヘラ削り。	胎. 密: 小砂粒少ない 焼. 壓い 色. 茶色 他.
H97 51 F25 —	B 16 区 測 2	鉢	口. 14.0 体. 底. 高.	口縁部の小破片。 底部を欠くが浅い皿状をなす。	口縁部は横ナナメ調整。 体部外側は丁寧な横ナナメ調整でな めらかとなる。	胎. 粒粒を含む 焼. 壓い 色. 茶色 他.
H98 65 F25 —	B 5 区 M 4	鉢	口. 13.4 体. 底. 高.	底部を欠き、口縁部もいびつで ある。 浅体で口縁部は丸く、やや内側 に内曲する。	体部内面は細かいハケ目。外側は 粗いハケ目調整。 口縁部は横ナナメ調整。	胎. 小砂粒を含む 焼. 普通 色. 外: 茶色 内: 白灰色 他. 黒斑
H99 16 F25 P34	B 5 区 M 4	鉢	口. 15.2 体. 底. 高. 8.6	丸底から体部はわざかに内側 しながらのびてそのまま口縁とな る。	外側の調節は、上半部に印き、上 半部のハケ目。下半部の右から左 への横ハケ目の順序でおこなわれ る。 内面はナナメ上げている。	胎. 砂粒少ない 焼. 壓い 色. 深茶色 他.

Tab. 9 出土土器観察表 (9)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H100 53 F25	B 4 区 M 4 左岸	盆	口、15.0 体、19.0 底、 高、	やや深めの体部に小さく外反する口縁部がつく。 底面部内面は丸みがあり明瞭な綻をなさない。	口縁部内面は粗い横ハケ目をナデ消す。 体部上半部も横ハケ目をナデ消す。 全体に磨耗する。	胎、小砂粒多い 地、普通 色、灰茶色 地。
H101 134 F26 —	D 区	高环	口、29.4 体、 底、 高、	口縁部上半部のみの小破片。 口縁部上半部はゆるやかに外反しそのまま口縁部となる。 口縁部は細かく面取りされ断面方形に近い。	外周は細かいハケ目を横ナデで消し、さらにヘラ状工具で液状土を蒸らしている。 内面は横ハケ目の後に細かいみがき。	胎、密 地、堅緻 色、灰茶色 地。
H102 114 F26 —	D 19 区 M 4	高环	口、22.4 体、 底、 高、	口縁部上半部の小破片。 上半部は柄曲部から、ほぼ水平的にのび、口縁部は丸みがある。	外周は横ハケ目をナデ消す。 内面は横ナデ後に軸のナデ調整。	胎、密：胎良 地、堅緻 色、灰茶色 地。
H103 1 F26 P35	B 区	高环	口、21.8 体、 底、 高、	わずかに口縁下半部を残す。 下半部はほぼ水平で上半部は直線的に長くのびる。	上半部外面は底のハケ目を横ナデ消し。内面は横ナデ後に底のみがき。	胎、密 地、堅緻 色、茶色 地。
H104 38 F26 —	B 15 区 測 2	高环	口、20.6 体、 底、 高、	口縁部上半部の小破片。 上半部は長く、直線的ではあるが、中段でさらに外湾する。 口縁部に比べ口縁下半部の径が小さく、底の外縁をなす。	全体的に磨耗しているため調整痕不鮮明。 内面は細かいみがき？	胎、小砂粒少ない 地、堅緻 色、明茶色 地。
H105 2 F26 P35	B 5 区 M 4	高环	口、22.7 体、 底、 高、	両手のつくりで口縁下半部の一筋がある。H103に比べわざわざに凹凸がある。 上半部は外湾しながら長くのびる。 口縁部は細く尖る。	上半部は丁寧な横ナデ調整。	胎、小砂粒少ない 地、堅緻 色、明茶色 地。
H106 74 F26 P35	B 15 区 測 2	高环	口、20.0 体、 底、 高、	口縁部上半部の小破片。 底曲部よりわざわざに内湾しながらのびる縫合でさらに小さく消す。	内面は細かいハケ目を横ナデ消し、さらに底みがきの余氷。 外周は縦の粗いハケ目後に横ナデ調整。	胎、密：精良 地、堅緻 色、灰茶色 地。
H107 132 F26 P35	D 18 区 M 4	高环	口、22.6 体、 底、 高、	底曲部下半を欠く。 口縁上半部はわずかに内湾しながらのび、立ち上がりは弱く浅い凹部をなす。	口縁部は横ナデ調整。 内面は底のみがき。	胎、密：精良 地、堅緻 色、灰茶色 地。
H108 84 F26 —	B 15 区 測 2	高环	口、21.5 体、 底、 高、	脚部を欠く。底合部より剥離。 口縁上半部はほぼ水平で径が小さい。底曲部はにぶく上半部は内湾しながらのびる。	上半部内面は底のみがき。	胎、密：精良 地、普通 色、灰茶色 地。
H109 34 F26 —	B 15 区 測 2	高环	口、20.6 体、 底、 高、	口縁部に2つの底曲部をもつ。 いずれの底曲部も丸みがある。 1段目の底曲部では水平ではなくわざわざに凹みがある。 口縁部は内湾しながらのびる。	口縁部外周は細かい横みがき。 内面は横ハケ目後に底みがき。 一段目内面は放射状のみがき。	胎、小砂粒少ない 地、堅い 色、外：うす茶色 内：灰茶色 地。

Tab. 10 出土土器観察表 (10)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H110 139 F26 P35	D19区 M2 左岸	高 环	口. 21.8 体. 底. 高.	H109と同じ器形をなす。 1段目までは、ほぼ水平で口縁部へは直線的にのびる。	口縁部内面は横ハケ目調整後に縦 の細かいみがき。 外面は横ハケ目の後に横ナナフ消し。 一段目内面は放射状の細かいみがき。	胎. 密 燒. 雜燒 色. 茶褐色 他.
H111 3 F26 P35	B5区 M4	高 环	口. 21.2 体. 底. 高.	H109, 110の器形にさらにもう 一段の肩曲部がつき口縁部をつ くる。 脚窓部の接合部より剥離してい る。	内面はハケ目を横ナナフ消し。 二段目外面はハケ目を横ナナフ消し。 いずれの肩曲部も丸みがある。	胎. 密 燒. 雜燒 色. うす茶色 他.
H112 10 F26 P35	B5区 M4 (背面)	高 环	口. 体. 底. 高. 14.4	背の低い脚窓部で焼泥はややく らみがある。底部は大きく外に 開く。 肩曲部には3か所に小孔が焼成前 にあけられている。	脚窓部には整形時のヘラ痕残る。 外側は縦の細かいハケ月後に横の 余れ。脚窓部内面はハケ目を横ナナフ 消す。	胎. 密 燒. 雜燒 色. うす茶色 他.
H113 133 F28 —	D24区 左岸	瓶	口. 23.0 体. 20.8 底. 高.	底部を欠く。 体部は中位でわずかにふくらみ、 口縁部はなるべく外反する。	外側は縦ハケ目調整で、肩曲部の み横ナナフ消し。 口縁部内面は横ハケ目を横ナナフ消 し。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 黒茶色 他.
H114 75 F28 —	B15区 M3	瓶	口. 21.0 体. 底. 高.	底部を欠く。 体部はほぼ直立しており、口縁 部はわずかに外反する。 底部外側は細い沈線が1本延 る。	口縁部外側は縦ハケ目後に横ナナフ 消し。内面はナナフ調整。 体部内面はヘラ削りで粗曲部はに よい模をなす。	胎. 小砂粒多い 燒. 普通 色. 黑茶色 他.
Su6 5 F27 P36	B5区 M4	杯 蓋	口. 12.6 体. 底. 高. 3.3	天井部と口縁部との境は明瞭で なく丸みがある。 口縁部は丸くなり、内面に 段をもつ。	天井部はヘラ削り。 口縁部は内外面とも回転ナナフ調整。 天井部内面はナナフ調整。	胎. 密 燒. 雜燒 色. 灰色 他.
Su7 120 F27 —	D18区 左岸	杯 蓋	口. 13.0 体. 底. 高.	小破片であるが、天井部にわざ かにヘラ削きが見られる。 口縁部と天井部との境は明瞭で なく口縁部も丸みがある。	天井部の沿をヘラ削り。他の部分 は回転ナナフ調整。	胎. 密 燒. 雜燒 色. 灰色 他.
Su8 118 F27 P36	D18区 左岸	杯 蓋	口. 体. 底. 高.	天井部のみの破片。 天井部の内縁がヘラ削りされる が平坦ではなく丸みがある。	ロクロ回転は逆時計まわり。 天井部のヘラ削りは粗い。 天井部内面はナナフ調整。外側にヘ ラ削き。	胎. 小砂粒少ない 燒. 普通 色. 濃灰色 他.
Su9 4 F27 P36	D18区 左岸	杯 蓋	口. 14.0 体. 底. 4.0 高.	口縁部と天井部とはわずかに境 がつく。 天井部は丸みがあり、口縁部は やや外に開き丸みがある。	天井部の沿をヘラ削りする。 ロクロ回転は時計まわり。 天井部にヘラ削き。	胎. 砂粒少ない 燒. 黒い 色. 黑色 他.
Su10 119 F27 P36	D18区 左岸	杯 蓋	口. 11.6 体. 14.2 底. 高. 3.6	天井部に扁平な宝珠形のつまみ を付ける。 口縁部は丸太く、内面にかえり をもち、その先端は口縁部より下に出る。	天井部の沿をヘラ削りする。 ロクロ回転は逆時計まわり。ヘラ 削り端はせまい。 かえり部は回転ナナフ調整で先端は 尖る。	胎. 砂粒少ない 燒. 雜燒 色. 外: 濃灰色 内: 桃色 他.

Tab. 11 出土土器観察表 (11)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Sa11 122 F27 —	D16区 左岸	杯 身	口。12.8 体。15.0 底。高。	底部を欠く小瓶片。 受部は水平でなく、わずかに内傾する。 立ちあがりは軽く内傾し、端部は小さく直立する。	受部と立ちあがり部との境は浅い 凹模状となる。 回転ナナ調整。	胎。小砂粒を含む 焼。普通 色。灰色 化。
Sa12 142 F27 P36	D 区 左岸	杯 身	口。11.4 体。13.6 底。高。4.1*	受部は水平にのり端部は丸くおわる。 立ちあがりは内傾し、中位で屈曲し、わずかに直立する。	底部の辺をへラ削り。 底部の内面はナナ調整。 他は回転ナナ調整。	胎。砂粒少ない 焼。堅焼 色。灰色 化。
Sa13 32 F27 —	B 5 区 M 4	罐	口。22.0 体。底。 高。	腹部より下部を欠く。口縁部は外凸しながらのび、端部は丸くおさめる。 端部外側は1条の沈線がめぐり、底には小さな突部をつくり出す。	頸屈曲部にはよいが後をもつ。 口縁部は回転ナナ調整。やや凹凸があつた。 内面は灰をかぶる。	胎。砂粒少ない 焼。堅い 色。灰色 化。
Sa14 159 F27 —	B15区 (M 3)	罐	口。9.0 体。10.8 底。高。	球状の体部に直立する口縁部がつく。 頭部はよくしまらず、内面は明確な棱をなさない。 底部はやや尖りぎみか?	体部上半部には2条の凹線間に横筋状の刺突文がつけられる。 底部下部はカキ目。 口縁部外側は回転ナナ。	胎。小砂粒を含む 焼。堅い 色。灰色 化。
Sa15 112 F27 —	D 区	長 罐 蓋	口。14.0 体。 底。 高。	長颈壺の口縁部と思われる小瓶片。外縁部は水平で、上方に向って直線的に外傾する。	外側は灰をかぶる。 口縁部は丸みがある。	胎。砂粒少ない 焼。堅焼 色。白灰色(灰をかぶる) 化。
Sa16 154 F27 —	B15区 (M 3)	高 古 付 杯	口。 体。 底。8.6	高台は高く、体部との境よりも内面にハサ形につけられる。境は丸みがあり体部は内傾ぎみにのびるようである。	高台疊部は四角となり、さらに外縁部は外に丸く突出している。 底部内面はナナ仕上げ。	胎。密 燒。堅 色。灰色 化。
Sa17 121 F27 —	D16区 左岸	高 古 付 杯	口。 体。 底。8.8	低い高台が体部との境より内側につけられる。	底部内外面は仕上げのナナ調整。	胎。砂粒少ない 焼。堅い 色。灰色 化。
Sa18 113 F27 —	D24区	高 古 付 杯	口。 体。 底。9.5	底部と体部との境は丸みがあり、高台は境よりわずかに内側につけられる。 高台は断面形で低い。	外側は回転ナナ調整。 底部内面は粘土織ぎ目(?)がらせん状に残り、部分的にナナ仕上げされる。	胎。砂粒少ない 焼。堅い 色。墨灰色 化。
Sa19 124 F27 —	D25区 壁 2	高 古 付 杯	口。12.4 体。 底。6.6 高。4.0	底部を欠く。 水平な底部から体部は直線的に外反し底部はそのまま丸くおさめる。 高台は体部との境より内側につけられる。	高台は低く断面形であるが外縁部はやや上向きとなる。 体部は回転ナナ調整。	胎。小砂粒を含む 焼。堅い 色。墨灰色 化。
Sa20 160 F27 P37	D18区 左岸	高 古 付 杯	口。13.4 体。 底。9.4 高。4.0	高台は体部との境のやや内側につくが、堆塑は丸みがある。 高台は低くハサ形につけられ外縁が後退する。	体部は回転ナナ調整。 底部内面はナナ仕上げ。 外縁部に丸印の奉書。	胎。砂粒少ない 焼。堅焼 色。墨灰色 化。

Tab. 12 出土土器観察表 (12)

番号	出土区 遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
Su21 123 F27 —	D25区 堅 2	高 台 付 杯	口. 16.8 体. 底. 高.	底部を欠くが高台が付くものと思われる。 体部は直線的に外に開き口縁部はさらに小さく外反する。	体部は回転ナデ調整。やや凹凸がある。	胎. 密 燒. 坚 色. 外: 灰黑色 内: 灰茶色 他.
Su22 153 F27 P36	B15区 (M 3)	高 台 付 杯	口. 体. 底. 12.8 高.	底径の大きい高台で、体部と底部の境は丸みがあり明瞭でない。 高台は低く、水平で外端部はわずかに突出する。	高台部は強くナデ。 外端部は切り離し後にナデ調整。 内面はナデ調整。	胎. 密 燒. 坚 色. 灰 他.
Su23 140 F27 —	D19区	杯	口. 13.6 体. 底. 10.0 高.	体部と底部の境は丸みがあり、 体部はわずかに外湾しながらのびる。	口縁部は回転ナデ調整。 底部内面は化上げナデ。 体部と底部との境は回転ナデ調整。	胎. 小砂粒少ない 燒. 普通 色. 灰 他.
Su24 105 F13 P37	D24区 堅 1	高 台 付 杯	口. 10.8 体. 底. 6.2 高. 3.2	高台は断面方形であるが、低く小さい。 体部と底部との境は明瞭で、境より内側に高台がつけられる。	体部は直線的に開き、口縁部内面ではぶい段をもつ。 体部は回転ナデ調整。 底部内面はナデ仕上げ。	胎. 密 燒. 坚 色. 灰 他.
Su25 161 F13 P37	D24区 堅 1	高 台 付 杯	口. 12.8 体. 底. 3.8 高. 7.7	底部は平坦でなくやや渦みがあり、 体部との境はぶい段をなす。 体部はわずかに内湾する。 高台はよりも内側にハサ形につけられる。	高台の貼りつけは強。 体部の内外面は回転ナデ調整。 底部内面はナデ仕上げ。	胎. 小砂粒を含む 燒. 坚 色. 青灰色 他.
Su26 162 F13 P37	D24区 堅 1	高 台 付 杯	口. 13.6 体. 底. 9.0 高. 4.2	平坦な底部に直線的に外反する 体部がつく。 体部との境は丸みがあり、さら に高台をつくためほとんど区別 しがたい。	体部と高台部は回転ナデ調整。 底部外面は切り離しのままで未 調整。 内面はナデ仕上げ。	胎. 小砂粒少ない 燒. 普通 色. 黑灰色 他.
Su27 166 F13 P37	D24区 堅 1	杯	口. 14.0 体. 底. 9.0 高. 3.9	やや凹凸のある底部にわずかに 内湾しながら体部がのび口縁部 で小さく外反し丸くおさめる。	底部はナデ調整。 体部は回転ナデ調整。	胎. 小砂粒少ない 燒. 坚 色. 黑灰色 他.
Su28 107 F13 P37	D24区 堅 1	杯	口. 14.4 体. 底. 9.6 高. 3.7	平坦な底部に直線的に開く体部 がつき、口縁部はそのまま丸く おさめる。	体部は回転ナデ調整。 底部外面はナデ調整。 内面は粘土巻き上げ痕で凹凸があ る。ナデ仕上げ。	胎. 小砂粒多め 燒. 普通 色. 深灰色 他.
Su29 163 F13 P37	D24区 堅 1	杯	口. 13.8 体. 底. 10.0 高. 4.4	底部は平坦でなく中央部でわざ かに深くなる。 底部とは境をなして体部は直線 的に外反する。 口縁部は小さく外反する。	体部は回転ナデ調整であるがやや 凹凸がある。 底部内面(内底)はナデ仕上げ。 外縁(外底)はへら切り離し後にナ デ調整。 「中守」の墨書き	胎. 小砂粒含む 焼. 坚 色. 灰 他.
Su30 164 F13 P37	D24区 堅 1	杯	口. 13.3 体. 底. 10.0 高. 3.7	ほぼ平坦な底部から不明瞭なが ら境をなし体部が直線的にのび る。	体部は回転ナデ調整であるが凹凸 がある。 底部内面はナデ仕上げがなされる か外縁はへら切り離しのままで未 調整である。	胎. 小砂粒少ない 焼. 坚 色. 灰 他.

Tab. 13 出出土器観察表 (13)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Su31 165 F13 P37	D24区 堅 1	皿	口、18.0 体、 底、15.0 高、 2.0	底部はほぼ平底。 体部は中位で垂直し、強く外反する。 口縁部は棱をもつ。	底部内面に粘土堆ぎ目(?)からせん状に残る。外側は切り離し後にナナ調整。 体部は回転ナナ調整。 底部外側に墨青。	胎、密 燒、堅鐵 色、灰色 他。
Su32 166 F13 P37	D24区 堅 1	皿	口、19.2 体、 底、16.0 高、 1.1	底部は平底であるが中央部がわずかに膨らむ。 体部は強く外反し、きわめて浅い皿である。	底部は切り離し後にナナ調整。 内面に仕上げのナナ調整されているが凹凸がめだつ。 体部は回転ナナ調整。 底部外側に墨青。	胎、砂较少 燒、堅 色、うす茶色 他。
Su33 167 F13 P37	D24区 堅 1	皿	口、18.6 体、 底、 高、	底部は水平でなく丸みがありこのためSu31、32に比べ深みがある。 体部との境は丸みがある。 口縁部はわずかに外反する。	底部は切り離し後にナナ調整。内面はナナ仕上げ。	胎、砂较少 燒、堅鐵 色、深灰色 他。
Su34 138 F13 P37	D24区 堅 1	高杯	口、 体、 底、 高、	脚部は長く中位がよくしまり、脚部は焼成して脚部は丸くおさめる。 底部内面は四状となる。	内外面ともに回転ナナ調整で、脚部はしばり痕がみられる。脚部に1条の沈線が走る。	胎、密 燒、堅鐵 色、灰色 他。
Ha27 108 F13 —	D24区 堅 1	盤	口、22.6 体、 底、 高、	口縁部のみの破片。 脚部はく字形に外反し肥厚している。体部は脚間から張りのないものと思われる。	口縁部は横ナナ調整。 体部内面は脚のヘラ削りで口縁部とは斜い縁をなす。 外面は脚のヘラナナか?	胎、小砂粒多 燒、普通 色、灰茶色 他。
Ha28 130 F13 P37	D24区 堅 1	杯	口、12.0 体、 底、5.6 高、 3.8	平坦な底部から明瞭な縁をつけずそのまま内凹してのびえみの口縁部をつくる。	全般的に丁寧な調整が施され器面はなまらかである。 内外面は横のきがき。 体部内面と底部外側の2か所に◎印の刻印がある。	胎、密：精良 燒、堅鐵 色、深灰色 他。
Ha29 9 F28 P35	B4区 M3	高台付碗	口、15.7 体、 底、6.4 高、 6.6	平底な底部に背の高い高台がハ字形に開いてつく。 体部は直線的に外反し口縁部はそのまま丸くおさめる。	完形品であるが外面は剥離はげしく異色不透明。 内面と高台部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。	胎、精良 燒、普通 色、外：茶色 内：黒茶色 他。
Ha30 126 F28 —	D19区 右岸	高台付碗	口、 体、 底、12.8 高、	やや大きめの幅で基盤も厚いくくりを付す。 高台は体部との境より内面にハ字形につけられる。 高台は背が高く、縁部は丸みがある。	高台部は横ナナ調整。 内底部はみがき状のナナ。 外底部はナナ調整。	胎、密：精良 燒、堅鐵 色、深灰色 他。
Ha31 55 F28 —	B4区 杭列A	高台付碗	口、 体、 底、9.0 高、	体部上半部を欠く。 底部と体部との境は丸みがあり明瞭な段をなさない。 体部は直線的に立ちあがっているようである。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部は切り離し後にナナ調整。 きわめて斜上、縁部ともよい。	胎、密 燒、堅鐵 色、茶色 他。
Ha32 59 F28 —	B15区 (M3)	杯	口、14.0 体、 底、10.0 高、 2.9	底部を欠く。 底部と体部の境は丸みがあり体部は内凹してのび、口縁部は小さく外反して細丸くおさめる。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ調整。 外底部はヘラ切りか?	胎、小砂粒を含む 燒、普通 色、灰茶色 他。

Tab. 14 出土土器観察表 (14)

番号	出土区 遺構	器種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Ha33 62 F28 P35	B15区 (M 3)	杯	口. 13.8 体. 底. 9.6 高. 3.1	底部は平底であるが、中央部がやや盛り。 体部は直線的にのびる。	体部は横ナナ調整した後に内底部をナナ仕上げする。 外底部はヘラ切り。	胎. 密：熟成ではない 燒. 麗緻 色. 黄茶色 他.
Ha34 72 F28 —	B15区 (M 3)	杯	口. 体. 底. 8.0 高.	底部のみの小破片。 平坦な底部は薄いつくりをなす。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部はヘラ切り。	胎. 小砂粒多 燒. 麗緻 色. 外：褐色 内：黒褐色 他.
Ha35 54 F28	B 4 区 続列 A	杯	口. 体. 底. 高. 7.5	底部は平底で体部の立ちあがり はHa34よりゆるい。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部はヘラ切り。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 外：灰茶色 内：赤茶色 他.
Ha36 97 F28 —	B 5 区	皿	口. 15.0 体. 底. 11.6 高. 1.4	底部を欠く。 体部の立ちあがりはゆるく内湾 ぎみにのびて縁部でさらに湾曲 する。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部はヘラ切り後にナナ調整。	胎. 密：精良 燒. 麗緻 色. 茶色 他.
Ha37 7 F28 P38	B 4 区 M 3	皿	1. 15.0 体. 底. 10.9 高. 2.6	底部は平底でなく、中央部がや や突出する。 体部は外端へのひじ接觸部は 丸くおさめる。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部はヘラ切り後にナナ調整。 やや凸凹あり。 外底部に墨書き。	胎. 砂粒を含む 燒. 暗い 色. 深茶色 他.
Ha38 28 F29 —	B 5 区	甕	1. 20.0 体. 底. 高. 16.2	口縁部はゆるく外反し、体部は よしらみをもたず丸底の底部へ つながる。	内部内面は右上りのヘラ削りであ るが縫曲部内面は直線な波をなさ ない。 外側は複ハケ目調査。 U縫部内面は複ハケ目調査。	胎. 砂粒を含む 焼. 普通 色. 外：黒色 内：黒褐色 他. 外面墨付有
Ha39 91 F29 —	B 4 区 続列 A	土 鍋	1. 28.0 体. 底. 高.	半球状の体部に断面方形の口縁 部が内側してつく。 縫曲部内面はにおい波をなす。	口縁部は横ナナ調整。 内部内面は横ナナ仕後に粗いハケ目 をつける。 体部下部は粗い複ハケ目調査。	胎. 小砂粒少ない 焼. 暗い 色. 茶褐色 他. 外面墨付有
Ha40 36 F28 —	B19区 M 3	小 皿	口. 7.6 体. 底. 6.4 高. 1.1	平坦な底部から直線的に短い体 部がつく。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部は糸切りか?	胎. 密：精良 焼. 麗緻 色. 茶色 他.
Ha41 70 F28 —	B10区 続列	小 皿	口. 9.0 体. 底. 6.8 高. 1.2	体部は内湾ぎみにひき出され、 口縁部は丸縁となる。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部は糸切り、板目压痕が残る。	胎. 密：精良 焼. 麗緻 色. 外：淡灰茶色 内：深灰茶色 他.
Ha42 83 F28 P35	B15区 (M 3)	小 皿	口. 7.8 体. 底. 6.6 高. 1.1	きわめて浅い小皿でHa40に比べ 体部の立ちあがりは大きく、口 縁部は丸く直立する。	体部は横ナナ調整。 内底部はナナ仕上げ。 外底部はヘラ切りか?	胎. 小砂粒含む 焼. 普通 色. 明茶色 他.

Tab. 15 出土土器観察表 (15)

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ha43 57 F28 —	B15区 (M3)	小皿	口、9.0 体、 底、7.0 高、2.3	やや縮みのある小皿で、体部は わざかに内溝しながらのびる。	体部は横ナナ子調整。 外底部は斜切り。	胎、密：精良 能、底要 色：淡黄茶色 他。
Ha44 94 F28 —	B4区 杭列A	杯	口、12.3 体、 底、9.6 高、2.6	平坦な底部から体部がわずかに 内溝しながらのびる。 口縁部はそのまま丸くおさめ る。	体部は横ナナ子調整。 内底部はナナ子調整。 外底部は斜切り。	胎、砂粒少ない 能、普通 色：淡茶色 他。
Ha45 77 F28 P36	B15区 (M3)	杯	口、 体、 底、9.0 高、	口縁部を欠く。 平坦な底部に内溝きみにのびる 体部がつく。	体部は横ナナ子調整。 内底部はナナ子調整。 外底部は斜切り、板目压痕が残る。	胎、密：精良 能、堅穀 色：灰褐色 他。
Ha46 60 F28 P36	B15区 M3	碗	口、 体、 底、8.0 高、	底部のみの小破片。 底部は平坦でなく湾曲しており、 そのまま体部へのびる。 高台は低く、丸みがある。	内底部は極かいらみがき。 高台部は横ナナ子調整。 外底部はナナ子調整。	胎、密：精良 能、堅穀 色：外：白灰色 内：黑色 他。
Ha47 157 F28 —	D25区	碗	口、19.0 体、 底、9.9 高、8.0■	平坦な底部から体部がわずかに 内溝しながらのびる。 高台が体部との境につけられる。	高台は剝離しているが、痕跡から みて幅広くない。 体部外縁は僅のみがき。 内面はなめらかで黒色の光沢があ る。	胎、密：精良 能、堅穀 色：外：灰茶色 内：黑色 他。
Ji 9 35 F29 —	B4区 杭列A	皿	口、12.4 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 直線的に外反し、口縁部はさ らに小さく外放す。	口縁部は露胎。	胎、黑色微粒子 能、灰白色 色：灰白色 他。
Ji 10 56 F29 —	B区	碗	口、 体、 底、 高、	底部のみの破片。 高台はほぼ直立に削り出され疊 付は水平であるが縫せまい。	高台は露胎で釉が流れる。 見込み内底部には小砂粒が付着し ている。	胎、 能、 色：灰白色 他。
Ji 11 68 F29 —	B15区 (M3)	碗	口、 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 口縁部は小さな玉縁。	内外面とも細かい貫入。	胎、 能、 色：灰白色 他。
Ji 12 85 F29 —	B3区	碗	口、 体、 底、 高、	口縁部の小破片。 小さな玉縁口縁。	内外面とも細かい貫入。	胎、 能、 色：灰白色 他。
Ji 13 60 F29 —	B16区 杭列	碗	口、 体、 底、 高、	底部の小破片。 内面はヘラ、難描き文。 外面は縦の擦過書き文。	体部下半部は露胎。削りは粗い。	胎、粘土灰色 能、 色：灰茶色 他。

Tab. 16 出土土器観察表 (16)

## (2) 石 器 (Fig.30)

石器類の出土は、第2・3次発掘調査を通じてきわめて少なく、圓化した砥石以外には打製石器数点が出土しているにすぎない。石錐は黒曜石製で、凹基式である。B4区第3号溝より出土。

砥 石 T1はB15区の第2号溝より出土した。石材は砂岩で、両端が欠けている。現在値は長さ9.2cm、幅4.4cm、厚さ2.3cmで、4面とも砥面に使用されている。砥面はほぼ平坦で、側面には、斜めの浅いキズがある。中砥用であろう。T2は砥石の小破片で、B5区第4号溝より出土した。砥面は表裏面と側面の3面に残されており、側面は使用のため湾曲している。粘灰岩質の石材で、きめが細かく仕上げ用の砥石である。

## (3) 土 製 品 (Fig.30)

土製品は投弾形土製品の1点のみで、土製紡錘車や土製漁鉤などの出土はなかった。

D1は、D24区の流木の間より出土した。断面は径2.0cmの円形で、長さ3.3cmを測る。両端はやや尖っている。胎土は小砂粒を含み、焼成はよく、茶色を呈する。

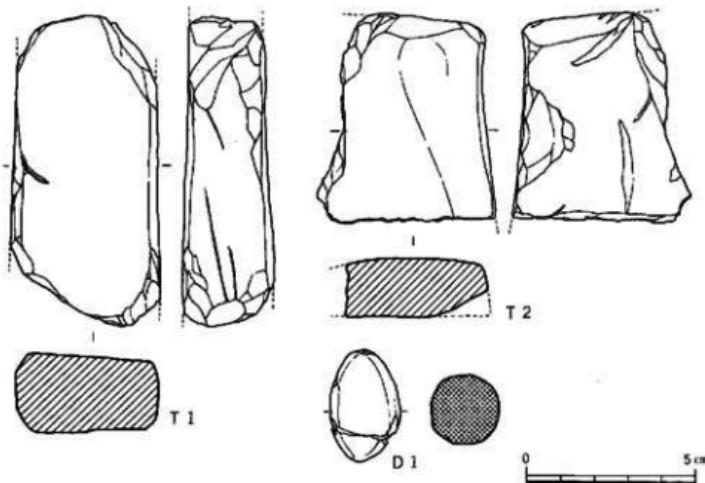


Fig. 30 出土石器・土製品実測図 (縮尺3/5)

## (4) 木 製 品 (Fig. 31~39, PL. 39~46)

第2・3次発掘調査での木製品の出土は、第1次発掘調査に比べ少なかった。これは第1・2号柵状造構のような溝中の造構がなかったこと、さらにはB区第4号溝の溝底より出土する流木は砂粒が付着凝固し、取り上げが困難であったことなどにもよる。木製品の多くは、B・D区の第4号溝と、D区第6号溝の流木の間より出土したもので、明らかに第1~3号溝に伴って出土したものはない。木製品は49点を取り上げた。木製品の種類には、鋸、鉤などの農耕具、建築部材、杭などで、大部分の木製品は用途を明らかにできなかった。杭については、そのほとんどを抜き取り、全長を測定し、樹種や加工痕などを観察した。杭には芯持ち丸太材を用いているものが多く、割り材、板材による杭は少なかった。これらの杭は原形をとどめるものがなかったために、加工法の特異な3点のみを図化した。取り上げた49点の木製品は、すべて図化し、樹種の同定を九州大学農学部の松本勗先生と林弘也先生にお願いした。以下個々の木製品について詳述するが、鋸、鉤、鉄など用途の明らかな木製品から先に記す。用途不明の木製品については、加工法、加工部位および形状などによって分類した。

**鋸 (Fig. 32, PL. 39)** 鋸には三叉鋸 (W 1~3) の3点が出土した。平鋸や二又鋸の出土はなかった。3点とも完形でなく破損品である。

**W 1** 全長40.4cm、身幅14.7cmを測る三叉鋸であるが、現在中央の歯を欠失し、他の1本も歯先を欠いている。原形をとどめている歯の長さは26.3cm、歯幅は先端部で2.7cm、厚さは1.2cmである。丸形に近い頭頂部は裏面より斜めに削り取られている。柄孔は頭頂部より4.8cmの位置に長方形に穿孔されている。柄孔は5.3×3.1cmで、柄との角度は約60度をなしている。外側2本の歯断面は、外側縁は直線で内側縁は両面より削られて断面三角形をなす。肩は緩やかで張りがない。歯の全体に占める率は65%である。樹種はカシでD19区第4号溝出土。

**W 2** 肩部のみの破片であるが、頭部と歯部の一部が残っており三叉鋸と考えられる。肩部は張りがなく、頭頂部はW 1と同様に丸形をなすのであろう。歯内側縁は直線に削り落とされ、内側縁は断面三角形に削り出している。歯幅2.9cm、厚さ1.6cm、柄孔は残っていないが、基部長は約18cmを測る。W 1の約14cmよりも4cmも長く、頑丈なつくりといえよう。樹種はカシで、D19区第4号溝から出土した。

**W 3** D23区第6号溝の流木の間より出土した。樹種はカシ、歯のみの小破片で、歯の長さ27.8cm、幅3.5cm、厚さ1.2cmを測る。歯内側縁は断面三角形であるが、外側縁はW 1と異なり直線ではなく丸みがある。歯先も両側からではなく、内側からのみの削りである。

**鉤 (Fig. 31~32, PL. 39~41)** 鉤と思われる木製品はW 4の1点のみである。W 36は先端を削り尖がらせているが、本来は鉤の柄部をなしていたものと考えられる。

**W 4** 鉤の身と柄の一部が残る。カシの板材から削り出して作られている。身の上縁は水

半でなく、柄に向かって山形をなしており、両側が互い違いになっている。身は刃部を欠いており、現在長13cm、幅14.3cmの長方形である。厚さは中央部で1.8cmを測る。側縁は直線となっているが、刃部に向かって次第に薄くなっている。柄の断面は円形に近い。

W36 ステッキ状の木製品で、T字形の把手を持つ。全長75.9cm、把手長は11cmを測る。先端部は一方からの削りで尖っている。この加工は二次的なもので鉤の柄ではないかと考えた。柄と把手の断面は径2.5cmと径3.5cmである。樹種はカシで、B15区第4号溝左岸より出土した。

槌 (Fig. 33, PL. 40) 槌はB21区Dトレンチの落ち込みより出土した1点のみである。

W11 材はヤブツバキが用いられている。全長55.8cm、頭部断面は $\frac{1}{4}$ ほどが残るにすぎないが、円形をなすのであろう。握部は径3.3cmの断面円形で、握部先端は切断されている。握部径は頭部径よりやや大きく11cmを測る。頭部は磨耗しているが、槌部には使用による窪みはない。豊作を再加工し、槌に転用したものと思われる。

弓 (Fig. 35・36, PL. 42・43) 端部近くを両側から削り取り、弓状の加工をした木製品が7点出土した。加工部の形状は、弓の弾に類似しているものの、完形品がなく弓とは断定できない。これらの木製品は、B15区第4号溝とD23・25区流木の間から出土している。

W20 アワブキ属の材が用いられており、全体的に樹皮が残っている。一方が折れているので原形は知りえないが、現在長は38.3cmを測る。図左端の加工は両面からの削りで、全周を削ったいわゆる乳頭状の加工法とは異なる。体部の断面は23×14mmの楕円形をなす。

W21 一端にW20と同じような加工が見られる。断面は18×21mmの円形をなす。樹皮は残っていない。加工はきわめて鋭利な工具が使われている。樹種はシイノキである。D23区第6号溝の流木より出土した。

W22 端部の小破片で、しかも縱 $\frac{1}{2}$ を欠いている。端部の欠き込み加工は、W20・21とは異なる。欠き込みの一方の壁は垂直であるが、他方の削りは浅く長い。樹種はシイノキである。

W23 断面は16×17mmの楕円形をなす。材はカシが用いられている。端部の加工法は、他と同じであるが、径がきわめて小さい。樹皮は見られない。

W24 D23区第6号溝の流木より出土したもので、端部近くでやや湾曲している。アワブキ属の材が用いられており、全体的に樹皮が残っている。端部の加工法は変りがなく、削り痕がよく残っている。一方は腐れによって折れている。現在長は51.7cmを測る。

W25 材はアワブキ属で、湾曲せずにほぼ直線をなす。加工は端部のみで、他には見られない。断面は19×23cmの円形をなす。樹皮は残っていない。

W26 一方が折れているが現在長78.8cmを測る。直線的な材が用いられており、両端の大きさも、ほぼ等しい。図上端部が樹根（幹）部にあたる。アワブキ属の材が用いられている。樹皮は残っていない。

建築部材 (Fig. 36~39, PL. 44・45) 乳頭状の加工があるW27~35、枝別れ部を加工して二又状にしたW37~39、梯子と思われるW40、欠き込みのあるW44を建築部材と考えた。これらの木製品は第4号溝や第3号横状遺構の構築材、およびD23~25区の流木として出土したもので、本来の用途は不明である。

一端が乳頭状をなす部材 (Fig. 36・37, PL. 44・45)

W27 矢としたW20~26と同じような径の材が用いられているが、端部の加工は全周が削られ乳頭状をなしており区別した。樹種はアワブキ属。D25区第6号溝の流木より出土。

W28 一端に乳頭状の加工をなすが、全周ではなく3方向からの鋭利な削りでL字形をなす。端部も削り切れて、加工痕がよく残る。樹種はユズリハである。

W29 乳頭状の加工部は、腐蝕がすすみ加工痕は不鮮明であるが、細かい削りのようである。断面は49×40mmの楕円形をなす。樹種はヤブニッケイである。

W30 直径38mmの芯持ち丸太材を両面から削り、扁平にした後に乳頭状の加工をなす。削りはきわめて鋭利である。カラスザンショウの材が用いられている。

W31 端部の加工は、W28と類似し3方向からの削りでL字形をなす。断面は楕円形をなし、43×27mmを測る。樹種はマンサクである。

W32 加工部の断面は、6角形で削りは鋭利であるが、雑な加工である。ユズリハ属の材が用いられており、樹皮は残っていない。D23区流木の間より出土した。

W33 D18区の横状遺構から出土した。直径66mmの芯持ち丸太材の一端を乳頭状に加工している。加工部の断面は8角形で、削りは幅広く鋭利である。現在長55.4cmを測る。

W34 断面は67×42mmの楕円形で、現在長121.8cmを測る。端部は削りで乳頭状の加工をなすが、端部はさらに両面から大きく削り取り、尖らせている。樹皮はなく、端部のほかは加工されていない。樹種はシイノキである。

W35 端部の加工は乳頭状の加工とはやや異なり、材に平行の削りではなく、材に直角に1条の凸帯を削り出している。この凸帯は全周せず%程度を巡っている。図左端が樹頭部で、樹種はユズリハ属である。小枝は削り落とされているが、他に特別の加工はない。D25区の流木の間より出土した。

梯子 (Fig. 38, PL. 44)

W40 断面台形をなす小破片であるが、梯子の突起部と考えた。足かけ部は高さ約5cmで垂直となっている。樹種はシイノキで、D25区流木の間より出土した。

一端が二又状をなす部材 (Fig. 37, PL. 44・45) 枝別れ部を利用し二又状を作り出しているが、枝と幹の両方を加工するもの (W37)、幹だけを加工したもの (W38)、枝・幹を切断しただけのもの (W39) がある。

W37 二又部は、どちらが幹か区別しがたいが、両方の内側を平坦に削りU形の又部をなす。さらにそれぞれの先端部は山形に削られている。二又の長さは両方とも6.6cmを測る。樹種はクリで、D23区の流木より出土した。

W38 土止めと思われる構築材の一つで、全体に火を受けた痕跡がある。二又部は幹の内側を平坦に削りV字形をなす。枝には切断以外の加工ではなく、樹皮が残っている。枝の長さは約14cmで、幹のもう一端よりも短い。現在長96.3cm、幹断面は直径8.5cmの円形をなす。樹種はケヤキである。

W39 D18区の樅状遺構に流れついたような状況で出土した。現在長142.7cmを測る。二又部には特別な加工はなく、切断されているのみである。枝の径は2cmと小さく、長さは約8cm。幹に対してほぼ直角に突出している。二又部より32cmの位置に欠き込みがある。欠き込みの壁は、一方はゆるやかに削られているが、他方は欠けており不明。欠き込みの長さは約14cmである。樹種はユズリハである。

#### 欠き込みのある部材 (Fig. 39)

W44 D23区の流木の間より出土した。一端は折れているが、現在長175.6cmを測る。もう一端は斜めに削り切斷されている。欠き込みは端部より約19cmの位置にある。欠き込みの壁は一方が垂直で、他方は壁をなさず緩やかに削られている。欠き込みの長さは15.8cmである。この他には加工はなされていない。樹種はクリである。

#### 用途不明の木製品 (Fig. 32~35・38・39, PL. 40~44・46)

W5 断面は半円形であるが、板材から削り出している。用途は明らかにしないが完形品であろう。全長12.6cm、幅3.0cmで断面半円形をなす。球面側は丁寧な削りでなめらかとなっている。他面は平坦で、中央に幅1.4cmの浅い溝を縱に彫り、溝底に小孔を穿っている。両端とも丸形で、団上端部はやや先細くなっている。樹種はアスナロである。

W6・7 いずれもD24区流木の間より出土した。W6はユズリハ、W7はアワブキ属の材が用いられている。W6は枝別れ部を利用したもので、枝の断面は1.8×1.5cmの楕円形で、削りは加えられていない。幹部は薄く加工されている。用途は明らかにしないが、幹部は使用のためか表面がなめらかで、枝部を柄として用いたのではなかろうか。

W8 板材の一面に2つの突帯を平行に削り出している。突帯の高さは1.8cmで、断面台形で、むかい合う壁は傾斜が強い。板材は1cm前後のほぼ均一の厚さをなす。側面の切斷は丸みがあり、各隅も角張っていない。樹種はカシである。

W9 D24区流木の間より出土。板材から削り出した杓子状の木製品である。身、柄部とともにその下半を欠いているが、身は倒卵形であろう。身の断面が蒲鉾形のために杓子とは考えがたい。樹種はカシである。

W10 W9と同じような形であるが、身の側面が削られ、断面は厚さ26mmの板状をなす。側面の削り痕はよく残っている。W9・10の樹種はカシである。

W12 スギを用いた板材で、上端部に切り込みと小孔がある。全体的に17mmの均一の厚さで小孔近くの側面には2か所で圧痕が認められる。

W13 厚さ1cm前後の板材で、全長41.8cm、図左端の幅6.5cm、右端の幅9.2cmで、一端がやや短い長方形をなす。3個の孔が相対して両端に寄って見られる。孔は画面からの穿孔で、いずれも雄で、整形されていない。各孔の位置関係には企画性があるようだが、組ずれなど使用された痕跡は認めがない。現在、材はねじれているが当初からのものであるかは不明。D23区流木の間より出土した。樹種はナラガシワである。

W14・15 W14は全長37cm、幅8cm、厚さ11mmの板材で、両端の近くで抉られ、孔が4か所に見られる。W15は両端を欠いているが、加工法、孔、形状などからして同じ形態をなすであろう。いずれも樹種はスギで、表裏、側面とともに粗い削りで、雑な加工の木製品である。W14の中心線の左右に相対して穿孔された4つの孔は直径5~7mmの不整円形で、横の相互の間隔は3.9cm、3.7cm、縦の相互の間隔は9.3cm、9.1cmである。W15の円孔は横の相互の間隔は4.3cm、4.1cm、縦の相互の間隔は10.9cm、10.5cmで、W14の間隔よりもやや広い。これは材の幅とも関係しているのである。いずれもD24区の流木より出土した。

W16 完形ではなく、W17のような木製品の断片と思われる。現在長36.6cmで厚さ13mmを測る。両端部は粗い削りで丸形に切断され、長側部には浅い抉りが見られる。両端部近くに孔の一部が認められ、孔の間隔は30.5cmを測る。樹種はスギである。

W17 D23区の流木の間より出土したもので、概ね割れ、X字状に重なっていた。全長35cm、幅15.8cm、厚さ12mmを測る。両端部はW16のように丸形に切断し、さらにU字状に深さ3~4.5cmを欠き込んでいる。長側部も同じ位置を浅く抉り、左右対称の形態をなす。加工部の削りは粗雑である。材はスギが用いられている。

W18 D25区流木の間より出土。シイノキ板材に2つの隅丸長方形の孔が並んでいる。図左端部は一部を欠いているが丸形をなすのである。左端の孔は1.3×2.7cm、他方の孔は1.7×2.5cmで、相互の間隔は7cmである。

W19 図右端部は発掘時に損傷したが長側部は原形をとどめていよう。幅16.6cm、厚さ17mmのスギの板材に6つの孔が見られる。孔は粗雑な穿孔で不整長方形をなす。これら不整長方形孔は材の長軸に対し、平行するものと直交するものとがある。中央部の4つの孔は、長軸を挟んで対称しているが、端部寄りの孔はこれらの線上にない。樹種はスギで、D24区流木の間より出土した。端部に焼けた痕跡がある。

W41 長さ22.3cm、幅18.9cm、厚さ4.4cmの断面台形の木製品で、周囲を切断している以外

には特別な加工はない。図表面は、発掘時に乾燥し凹凸がめだつが、裏面は平坦で細かな傷が無数にある。工作台であろうか。樹種はクスノキである。

**W42** 断面が蒲鉾形をなす材で、両端は折れて原形をとどめていないが、方形孔と思われる一部が残っている。上端寄りの孔は、仕上げ前の跡か難な加工である。D25区より出土した。樹種はシイノキである。

**W43** D18区柵状遺構の構築材である。全長235cmの横木であったが、腐蝕が進んでおり長さ44.5cmを図示した。端部は両側からの削りで、半月状の形状をなす。小枝は削り落とされており、樹皮も残っていない。樹種はクロモジ属。

**W45** 長さ113.3cmの板材で、両端は切断しているが、他面は割りのままで仕上げは加えられていない。断面は三角形で、一面に樹皮を残していることから、材の中心から放射状に削られていることがわかる。D23区流木の間より出土した。樹種はコナラである。

**W46** クスノキを用いた木製品で、D25区流木より出土した。長さは105.5cm、幅28.1cm、厚さ12cmを測る。材芯部の角材で、図裏面と右端部は腐れて原形をとどめていないが、各面は平坦に加工されており、本来は方柱状をなしていたものと思われる。両端は弧状に抉られている。

**杭 (Fig.30, PL.46)** W47・49はD25区の台地の縁に打ち込まれていた杭である。W48は矢板状の板材で第3号柵状遺構の立杭である。

**W47** 長さ30cmの芯持ち丸太材で、杭には適さない二又部が使われている。二又部の一方は切り落とし、他方の外側からのみ鋭利な削りを加え尖らせている。

**W48** シイノキの割り板で、割り面には特別な削りは加えられていず凹凸がめだつ。側面の削りは鋭利である。

**W49** 4本の小枝を切断し杭に加工している。先端は両側からの短かい削りで打撃歴は少ない。樹皮が全体に残る。

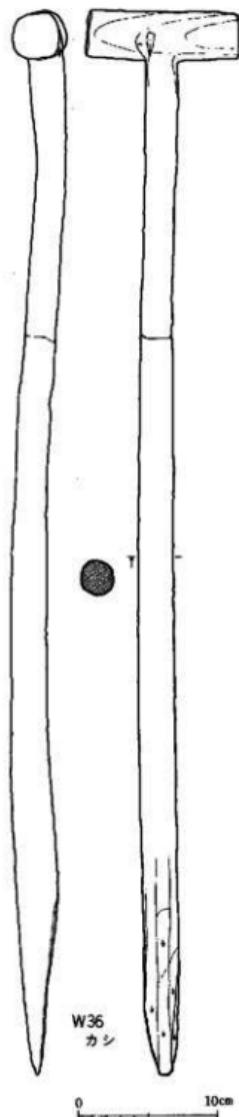


Fig. 31 出土木製品実測図(1) (縮尺1/4)

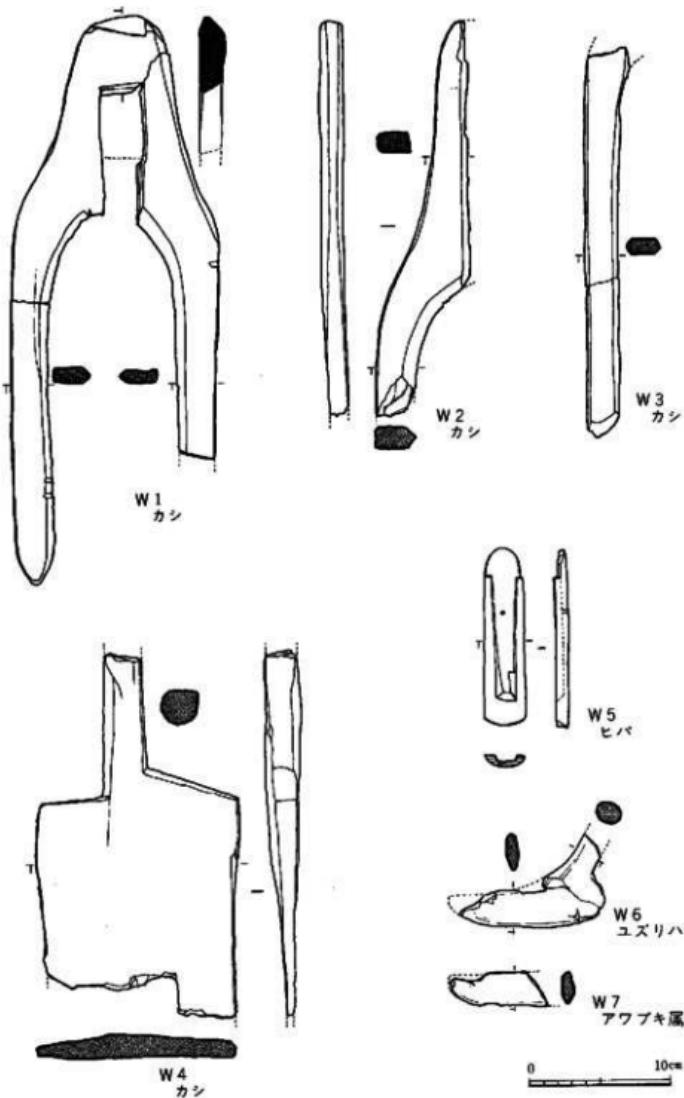


Fig. 32 出土木製品実測図(2) (縮尺1/4)

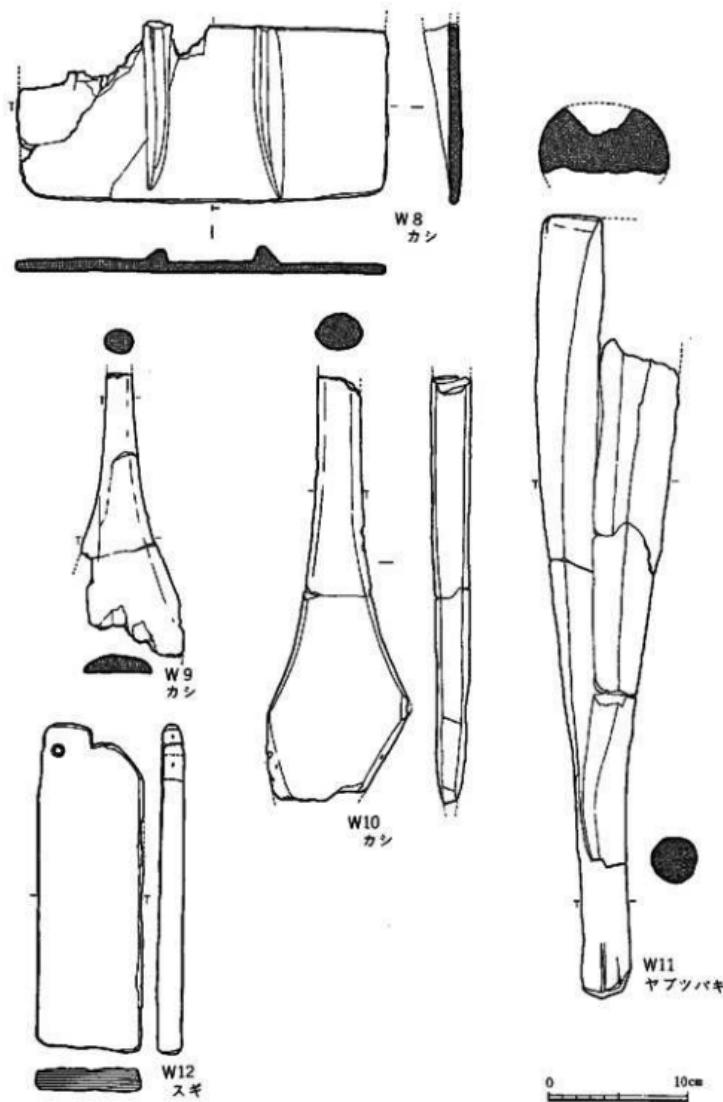


Fig. 33 出土木製品実測図(3) (縮尺1/4)

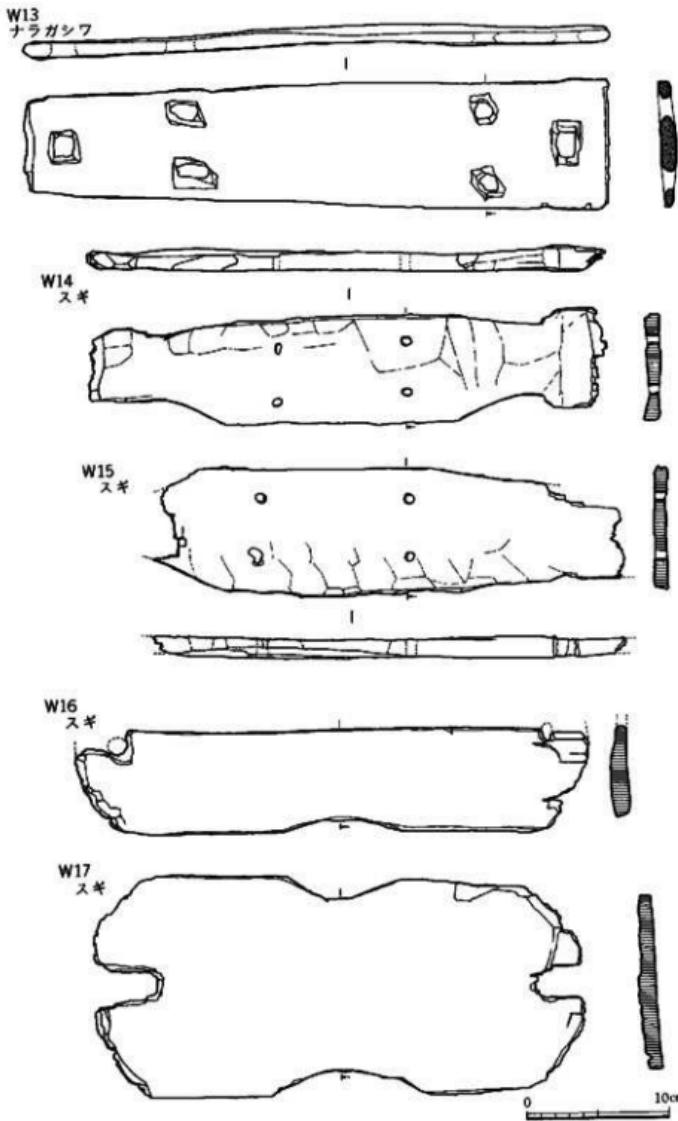


Fig. 34 出土木製品実測図(4) (縮尺1/4)

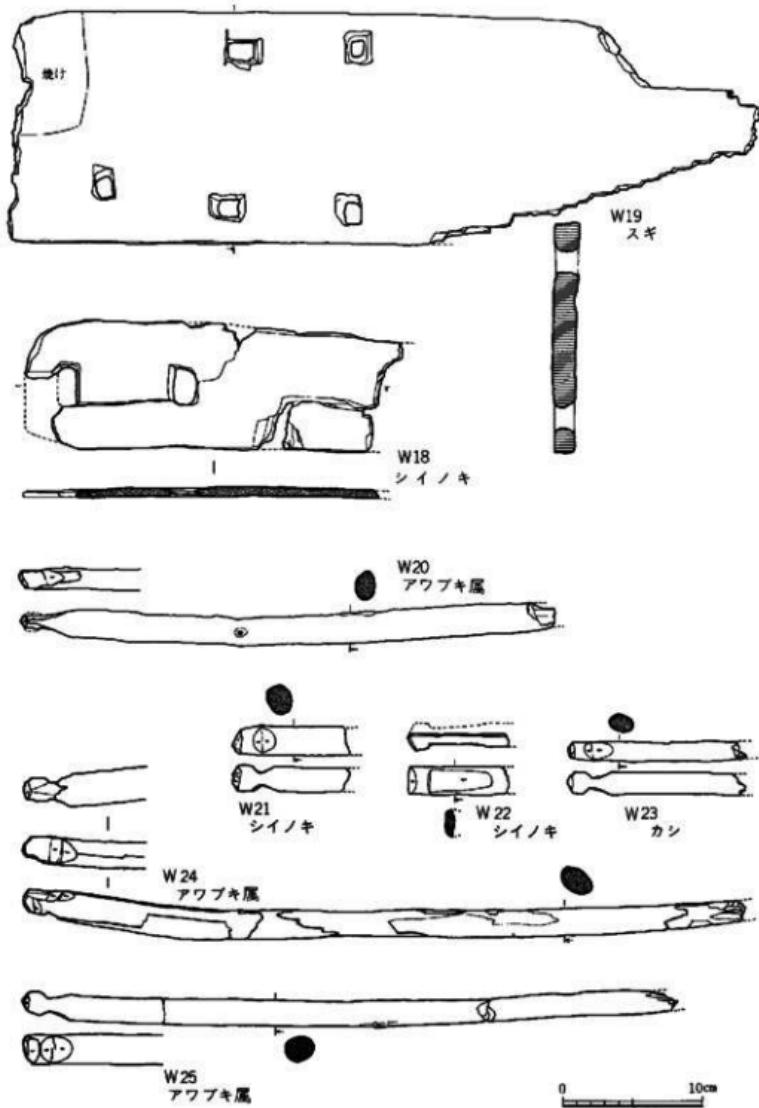


Fig. 35 出土木製品実測図(5) (縮尺1/4)

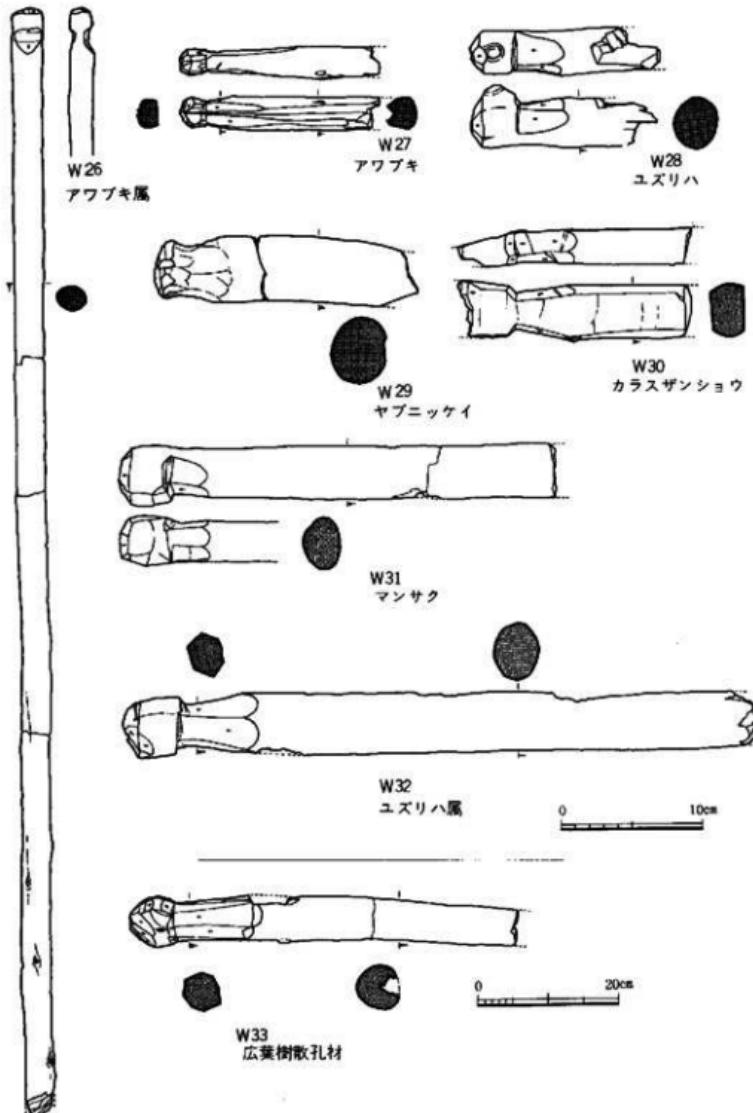


Fig. 36 出土木製品実測図(6) (縮尺1/4・1/8)

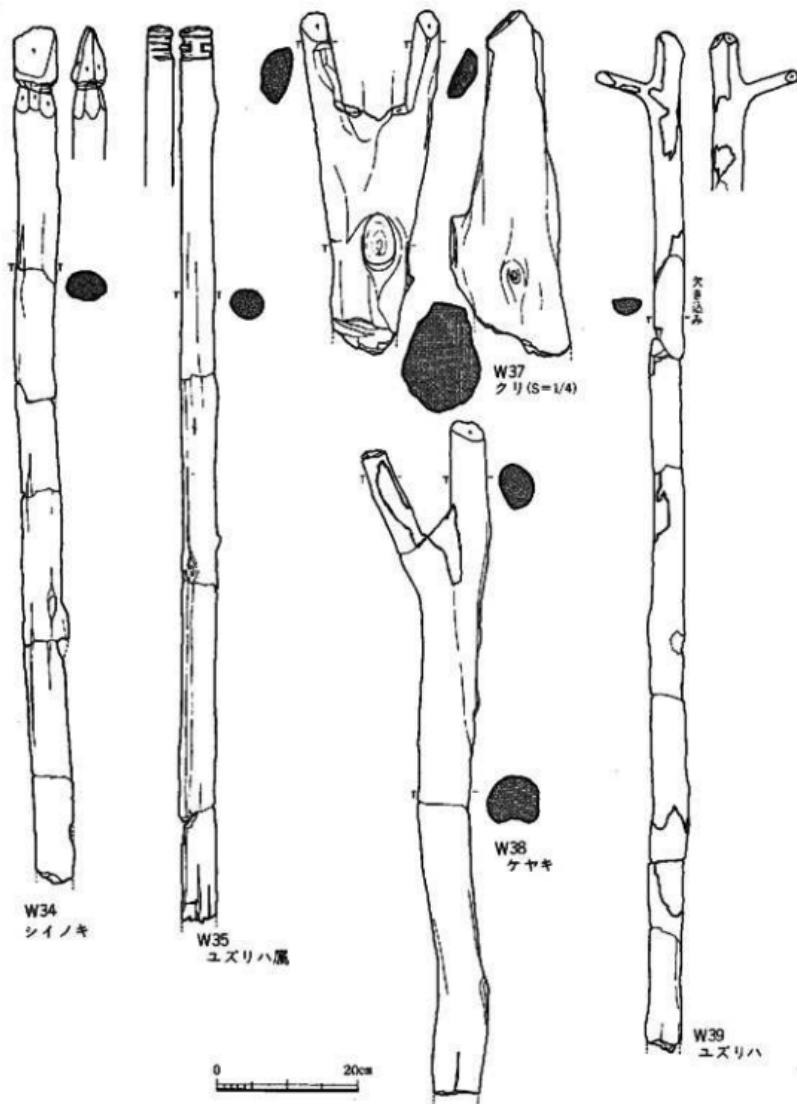


Fig. 37 出土木製品実測図(7) (縮尺1/4-1/8)

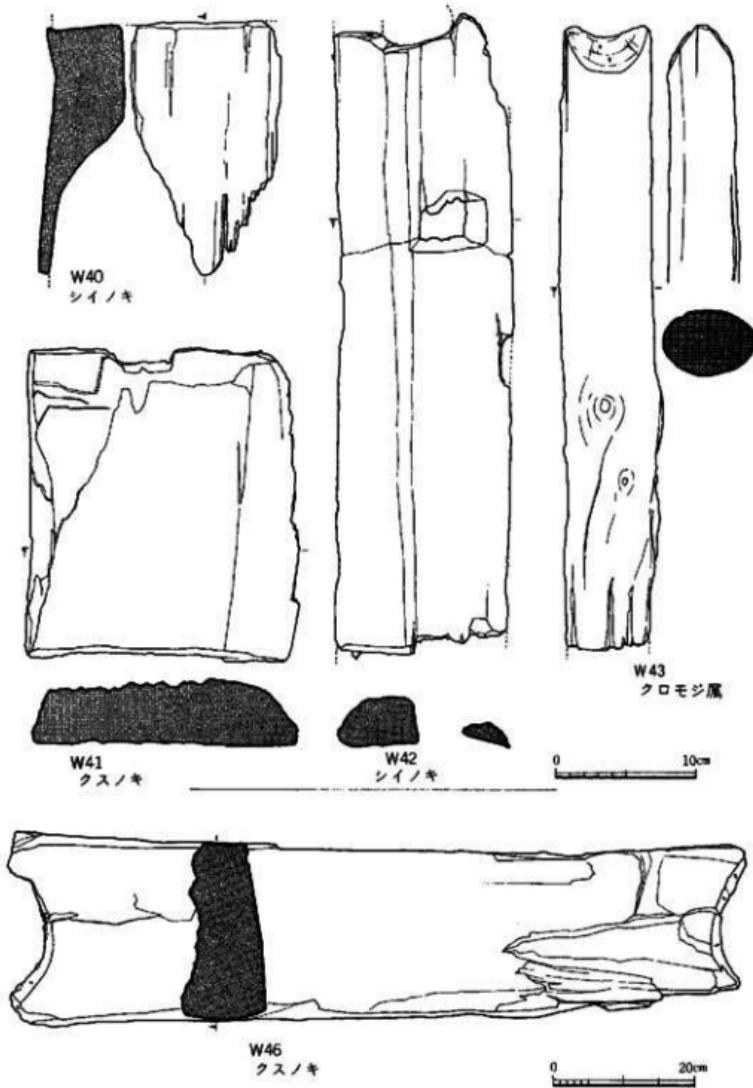


Fig. 38 出土木製品実測図(8) (縮尺1/4・1/8)

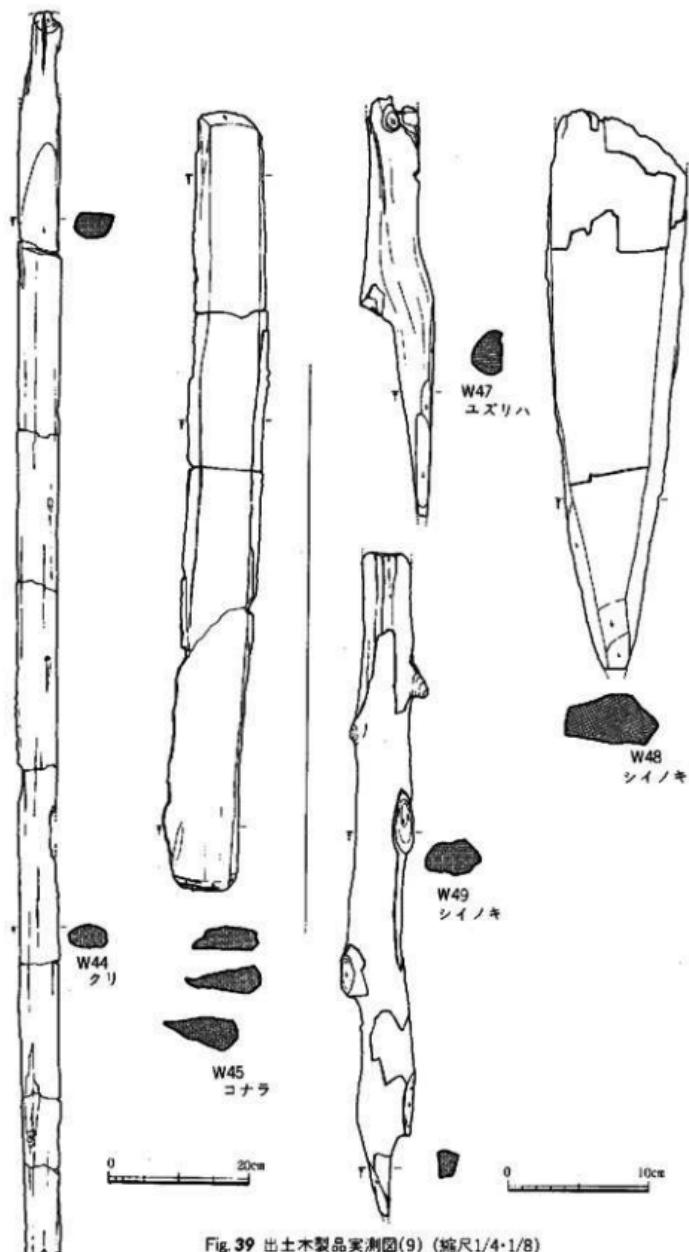


Fig. 39 出土木製品実測図(9) (縮尺1/4-1/8)

## 82 出土木製品一覧表

番号	出土区	遺構	用途	樹種名		法量(cm)			標識番号 Fig.	木製品 PL.
				和名	学名	長さ	幅	厚さ		
W 1	D19区	第4号溝左岸	三叉櫟	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	407	147	18		39
W 2	D19区	第4号溝左岸	三叉櫟	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	282	53	16		39
W 3	D23区	第6号溝木	三叉櫟	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	278	35	12		39
W 4	D19区	第4号溝左岸	曲	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	262	143	18		39
W 5	B5区	第4号溝	不明	アスナロ	<i>Thujopsis</i> sp.	126	30	9	2	40
W 6	D24区	第6号溝木	不明	ユズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	103	25	9		40
W 7	D24区	第6号溝木	不明	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	69	24	9		40
W 8	D19区	第4号溝左岸	不明	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	264	129	16		40
W 9	D24区	第6号溝木	不明	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	202	66	18		40
W 10	D24区	第6号溝木	不明	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	303	100	26	3	40
W 11	B21区	第4号溝	楳	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	558	110	33	16	40
W 12	B15区	第4号溝	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	236	76	17		40
W 13	D23区	第6号溝木	不明	ナラガシワ	<i>Quercus aliena</i>	418	98	15	5	42
W 14	D24区	第6号溝木	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	370	80	11		41
W 15	D24区	第6号溝木	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	336	93	15	1	41
W 16	D23区	第6号溝木	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	366	76	13		41
W 17	D23区	第6号溝木	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	350	158	12		42
W 18	D25区	第6号溝木	不明	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	269	93	7		42
W 19	D24区	第6号溝木	不明	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	537	166	17		43
W 20	D23区	第6号溝木	弓?	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	383	23	14		43
W 21	D23区	第6号溝木	弓?	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	84	21	18		
W 22	B15区	第4号溝	弓?	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	72	21	8		
W 23	B15区	第4号溝	弓?	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	129	16	17		

Tab. 17 出土木製品一覧表 (1)

番号	出土区	遺構	用	樹種名		法量(m)			剖面図 Fig.	木製品 PL.
				和名	学名	長さ	幅	厚さ		
W24	D23区	第6号溝流木	弓?	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	517	19	24		43
W25	D25区	第6号溝流木	弓?	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	467	23	19		43
W26	B15区	第4号溝	弓?	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	788	22	18		42
W27	D25区	第6号溝流木	建築部材?	アワブキ属	<i>Meliosma</i> sp.	143	24	22	15	
W28	D23区	第6号溝流木	建築部材?	エズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	136	36	30		
W29	D23区	第6号溝流木	建築部材?	ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum</i> sp.	189	49	40	10	
W30	D23区	第6号溝流木	建築部材?	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum silanoides</i>	167	38	23	13	45
W31	D23区	第6号溝流木	建築部材?	マンサク	<i>Hamamelis</i> sp.	313	43	27	12	
W32	D23区	第6号溝流木	建築部材?	エズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	453	42	33		
W33	D18区	第3号柵	建築部材?	広葉樹散孔材		554	66	58	17	44
W34	D23区	第6号溝流木	建築部材	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	1218	67	42		
W35	D25区	第6号溝流木	建築部材	エズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	1268	53	41	14	45
W36	B15区	第4号溝	衝柄	カシ	<i>Cyclobalanopsis</i> sp.	759	24	25		41
W37	D23区	第6号溝流木	建築部材	クリ	<i>Castanea crenata</i>	243	56	79		44
W38	D23区	第6号溝流木	建築部材	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>	963	65	64	8	
W39	D18区	第3号柵	建築部材	エズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	1427	55	23		45
W40	D25区	第6号溝流木	梯子?	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	182	107	54		44
W41	D23区	第6号溝流木	工作台?	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>	223	189	44	9	46
W42	D24区	第6号溝流木	建築部材?	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	458	125	34		44
W43	D18区	第3号柵	建築部材	クロモジ属	<i>Lindera</i> sp.	445	73	47	11	44
W44	D23区	第6号溝流木	建築部材	クリ	<i>Castanea crenata</i>	1756	65	37	6	
W45	D23区	第6号溝流木	建築部材?	コナラ	<i>Quercus serrata</i>	1113	117	33	4	
W46	D25区	第6号溝流木	工作台?	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>	1055	281	120		
W47	D25区	土止め杭	杭	エズリハ	<i>Daphniphyllum</i> sp.	300	54	22		46
W48	D18区	第3号柵	杭	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	399	97	34		46
W49	D25区	土止め杭	杭	シイノキ	<i>Castanopsis</i> sp.	474	42	25	7	46

Tab. 18 出土木製品一覧表(2)

(樹種同定結果をもとに方式が作成)

### 第3章

## 那珂深ヲサ遺跡から出土した 木製遺物の樹種同定

九州大学 農学部

林 弘也

松 本 昇

	ページ
I 樹種同定の方法	85
II 同定結果	85

## 写真図版

P L. 1	スギ (W15) アスナロ (W5) カシ (W10)	89
P L. 2	コナラ (W45) ナラガシワ (W13) クリ (W44)	90
P L. 3	シイノキ (W49) ケヤキ (W38) クスノキ (W41)	91
P L. 4	ヤブニッケイ (W29) クロモジ属 (W43) マンサク (W31)	92
P L. 5	カラスザンショウ (W30) ユズリハ (W35) アワブキ属 (W27)	93
P L. 6	ヤブツバキ (W11) 広葉樹散孔材 (W33)	94

那珂深ヲサ遺跡の2次および3次発掘により木製遺物49点が出上している。本遺跡の年代は弥生時代後期から古墳時代にわたっているとされているが、木製遺物個々の年代は判定されていない。今回、福岡市教育委員会の依頼により出土した木製遺物49点の樹種を同定したので、その結果をとりまとめた。

### I 樹種同定の方法

樹種の同定は光学顕微鏡で木材組織学上の特徴を観察して分類し、更に樹種名の明らかな標本プレパラートと対照して行なった。

検鏡資料は次の手順で調整した。1辺が数ミリメートルの直方体ブロック数個を遺物から切り出し、これらのブロックをポリエチレングリコールで包埋した。木材の3断面（横断面、放射断面、接線断面）の切片を包埋ブロックから切り出し、通常の方法でプレパラートを作製して検鏡試料とした。

### II 同定結果

同定した樹種は針葉樹材2樹種、広葉樹材15樹種と広葉樹材の散孔材であるが、樹種が同定できなかったもの1樹種であった。同定結果はTab.17-18に示し、各樹種の顕微鏡写真はFig. 1-Fig.17に示した。

同定した樹種について木材組織学上の特徴を簡単に述べる。

#### 1. スギ *Cryptomeria japonica*

資料：W12、14、15、16、17、19 顕微鏡写真：Fig. 1

早材と晩材の仮道管の形や仮道管壁の厚さが著しく異なっており、軸方向に樹脂細胞が散在する。単列放射組織があり、放射柔細胞の水平壁は肥厚している。分野壁孔はスギ型である。

#### 2. アスナロ *Thujopsis* sp.

資料：W5 顕微鏡写真：Fig. 2

樹脂細胞は散在しているが、数個の細胞が接線方向に連なった状態のものもある。放射組織は単列であり、分野壁孔はヒノキ型とスギ型の両型がある。ヒノキ型壁孔がスギ型壁孔より多数分布している。早材と晩材の仮道管の形や仮道管壁の厚さの差異はあまりない。

#### 3. カシ *Cyclobalanopsis* sp.

資料：W1、2、3、4、8、9、10、23、36 顕微鏡写真：Fig. 3

道管の直径は100-200  $\mu\text{m}$  の大きさであり、放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と幅の広い広放射組織とがある。広放射組織は各断面で肉眼でも容易に認められる。また放射組織は同性放射組織型である。軸方向柔組織は横断面では線状、帯状および散在状に認められる独立柔組織であり、多数分布している。放射組織や軸方向柔組織には結晶を含む柔細胞もある。

“カシ”はアカガシ、シラカシ、イチイガシなど数種類の樹種を含んだ総称として示した。これらの樹種はよく似た木材組織学上の特徴をもつてるので、個々の樹種を区別することなく、まとめて表示した。

#### 4. コナラ *Quercus serrata*

資料：W45 肉眼鏡写真：Fig. 4

100–380  $\mu\text{m}$  の直径をもった道管が生長輪界にそって配列する環孔材である。大きな道管の外側に小さな道管が放射状または紋様状に配列する。広放射組織をもち、肉眼でも認められる。軸方向柔組織は横断面では線状に認められる独立柔組織であり、多数分布する。放射組織および軸方向柔組織には結晶を含む柔細胞もある。

#### 5. ナラガシワ *Quercus aliena*

資料：W13 肉眼鏡写真：Fig. 5

環孔材であり、晚材部の直径が小さな道管は放射状または紋様状に配列する。放射組織は多列であり、同性放射組織型である。軸方向柔組織は横断面で線状に分布する独立柔組織である。軸方向柔組織には結晶を含む柔細胞もある。

#### 6. クリ *Castanea crenata*

資料：W37、44 肉眼鏡写真：Fig. 6

日本産の広葉樹材では最も大きな直径の道管をもつ樹種の1つであり、直径は 500  $\mu\text{m}$  以上にも達する。環孔材であり、晚材部の道管は放射状、紋様状に配列する。放射組織は単列であり、同性放射組織型である。軸方向柔組織は短い接線状や散在状に分布する。

#### 7. シイノキ *Castanopsis* sp.

資料：W18、21、22、34、40、42、48、49 肉眼鏡写真：Fig. 7

早材部では直径150–300  $\mu\text{m}$  の道管が配列する環孔材であるが、配列する道管の数は少なく、全体としては放射方向に配列する傾向がある。放射組織には単列放射組織と集合放射組織があるが、集合放射組織はあまり多くは認められない。同性放射組織型である。軸方向柔組織は独立柔組織であり、線状または帯状に分布する。軸方向柔組織には結晶を含む柔細胞もある。

#### 8. ケヤキ *Zelkova serrata*

資料：W38 肉眼鏡写真：Fig. 8

環孔材であり、晚材部では接線状、波状、斜状に道管が配列する。直径が小さい道管要素にはら旋肥厚がある。放射組織は多列であり、同性放射組織型と異性放射組織型の両者がある。異性放射組織型の放射組織には結晶を含む柔細胞もある。

#### 9. クスノキ *Cinnamomum camphora*

資料：W41、46 肉眼鏡写真：Fig. 9

比較的大きな直徑をもつ道管が散在状に配列する散孔材であるが、配列する道管の数は散孔材としては比較的少數であり、 $30\text{個}/\text{mm}^2$ 以下である。放射組織は単列および2-3細胞幅の多列放射組織であり、異性放射組織型である。軸方向柔組織は道管の周囲をさや状にとり囲んだ隨伴柔組織であり、多數認められる。放射組織や軸方向柔組織には大型の油細胞が多數認められる。

10. ヤブニッケイ *Cinnamomum* sp.

資料: W29 顕微鏡写真: Fig. 10

クスノキ材と類似した組織をもつが、道管の大きさはやや小さく、配列数が多い。

11. クロモジ属 *Lindera* sp.

資料: W43 顕微鏡写真: Fig. 11

道管は約  $100\ \mu\text{m}$  の直徑をもつ散孔材である。放射組織は単列および2細胞幅の多列であるが、2細胞幅の放射組織が多數をしめている。異性放射組織型であり、大型の油細胞がある。軸方向柔組織は横断面で翼状を示す隨伴柔組織である。

12. マンサク *Hamamelis* sp.

資料: W31 顕微鏡写真: Fig. 12

散孔材であり、道管の直徑は約  $50\ \mu\text{m}$  である。道管要素のせん孔は多孔せん孔である。単列放射組織であるが、異性放射組織型である。軸方向柔細胞の分布数は少ない。

13. カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides*

資料: W30 顕微鏡写真: Fig. 13

$100-170\ \mu\text{m}$  の直徑の道管をもつ散孔材であり、その配列数は  $15-30\text{個}/\text{mm}^2$  である。同性放射組織型の多列放射組織をもっている。軸方向柔組織には道管の周囲をとり囲む隨伴柔組織と生長輪界に帶状に連なる独立柔組織がある。これらの柔組織には結晶を含む柔細胞がある。

14. ユズリハ *Daphniphyllum* sp.

資料: W 6, 28, 32, 35, 39, 47 顕微鏡写真: Fig. 14

散孔材。道管の直徑は  $50\ \mu\text{m}$  以下であり、配列数が非常に多い。 $(200\text{個}/\text{mm}^2)$  に達する材もある。道管要素は多孔せん孔をもち、放射組織は1-2細胞幅をもつ異性放射組織型である。軸方向柔細胞は少なく、散在状に認められる。

15. アワブキ属 *Meliosma* sp.

資料: W 7, 20, 24, 25, 26, 27 顕微鏡写真: Fig. 15

散孔材であり、道管の直徑は  $100-150\ \mu\text{m}$  である。道管要素は单せん孔と多孔せん孔との2種類がある。放射組織は単列放射組織と2-4細胞幅の多列放射組織があり、異性放射組織型である。放射組織の高さは  $3-4\ \text{mm}$  にも達する程高いものもある。軸方向柔組織は道管の周囲

をとり囲む隨伴柔組織である。

16. ヤブツバキ *Camellia japonica*

資料：W11 顕微鏡写真：Fig. 16

散孔材。道管の直径は $50 \mu m$ 以下であり、道管要素は多孔せん孔である。放射組織は1-2細胞幅をもち、異性放射組織型である。また結晶を含む柔細胞も認められる。軸方向柔組織は顕微鏡で認められるが、その数は少ない。本部組織にはら旋肥厚がある。

顕微鏡写真について

1. 説明文は次のように配列されている。

Fig. 1 スギ *Cryptomeria japonica* (W15)

(図番号) (和名) (学名) (資料番号)

2. 写真是左から右にむかって横断面、放射断面、接線断面の順に配列されている。

3. 写真の倍率は、横断面および放射断面が30倍、接線断面が72倍である。

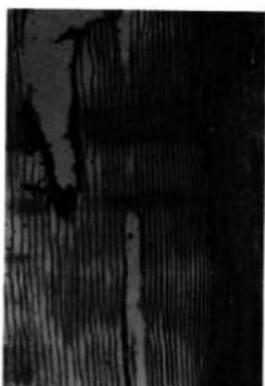


Fig. 1 クスガ *Cryptomeria japonica* (W15)

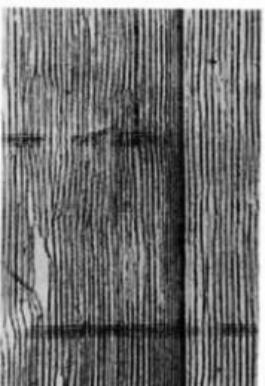
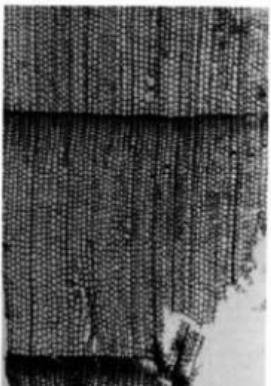


Fig. 2 ツスナロ *Thujaopsis* sp. (W5)

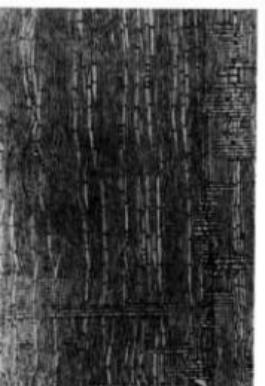
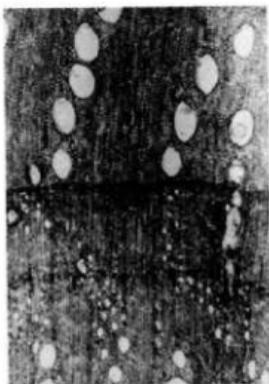
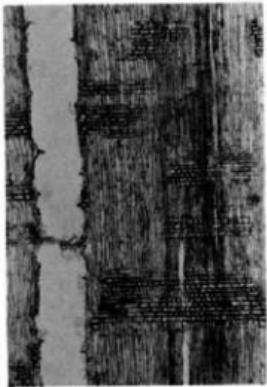
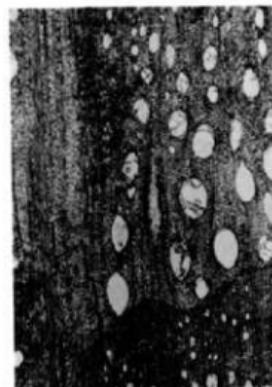
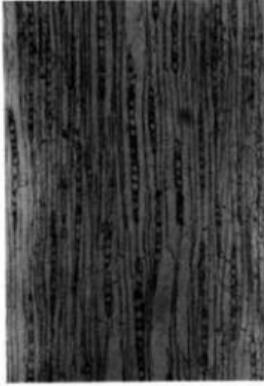
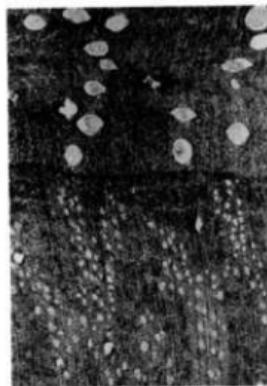


Fig. 3 カジ *Cyclobalanopsis* sp. (W10)

Fig. 4 コナラ *Quercus serrata* (W45)Fig. 5 ナラガシワ *Quercus aliena* (W13)Fig. 6 クリ *Castanea crenata* (W44)

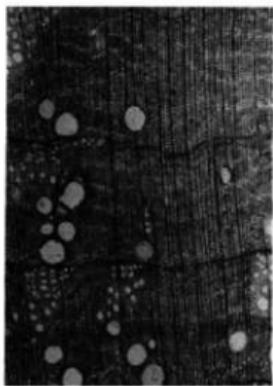


Fig. 7 シイノキ *Castanopsis* sp. (W49)

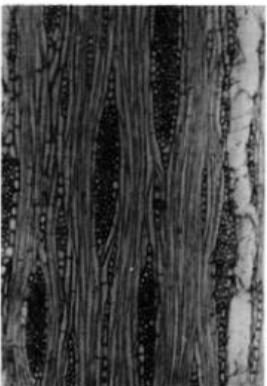
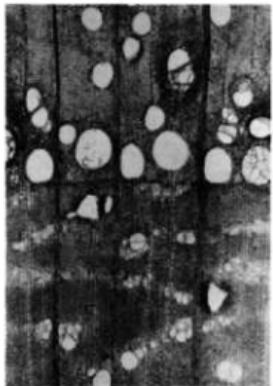


Fig. 8 ケヤキ *Zelkova Serrata* (W38)

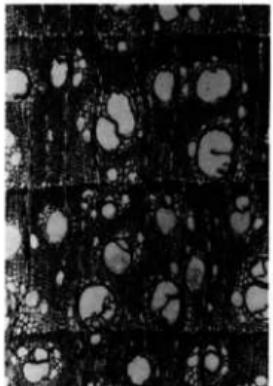
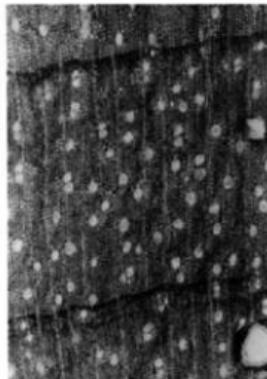
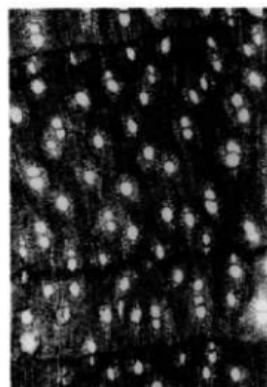
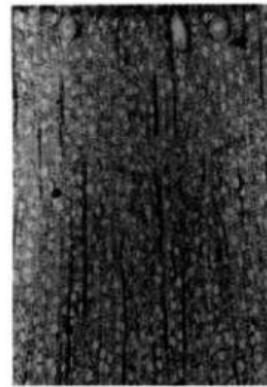


Fig. 9 クスノキ *Cinnamomum Camphora* (W41)

Fig. 10 ヤブニッケイ *Cinnamomum* sp. (W29)Fig. 11 クロモジ属 *Lindera* sp. (W43)Fig. 12 マンサク *Hamamelis* sp. (W31)

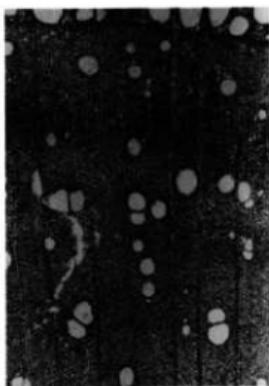


Fig. 13 カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* (W30)

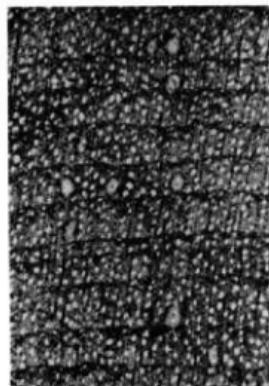


Fig. 14 ユズリハ *Daphniphyllum* sp. (W35)



Fig. 15 アワブキ属 *Meliosma* sp. (W27)



Fig. 16 ヤブツバキ *Camellia japonica* (W11)

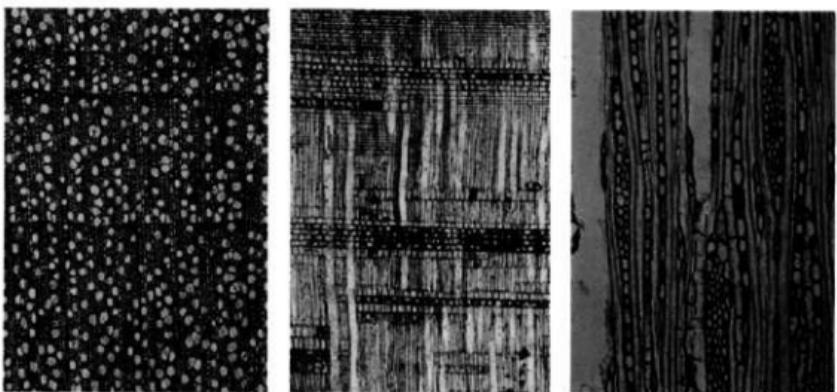


Fig. 17 広葉樹散孔材 (W33)

## 第4章 おわりに

那珂深タサ遺跡における発掘調査は、3次の発掘調査においてすべて終了したことになる。発掘当初は、調査対象地が那珂郡家推定地の一角を占めており、これまで考古学的調査が行なわれていなかったことから、大いに期待された。第1次発掘調査の成果については、すでにその報告書<sup>第2</sup>で述べられているとおりに古墳時代から近世に至る水田と水利施設が検出された。また2、3の問題点も指摘されており、第2・3次発掘調査ではこれら残された問題を発掘調査の重要課題としてとり組んだ。しかし発掘方法や時間的制約から十分に達成できたとは決して言いきれない。ここでは第2・3次発掘調査の結果と問題点についてまとめてみたい。

第1次発掘調査では、第1～4号溝と第1・2号横状造構、さらに水口状造構を持つ水田跡が検出されている。溝の重複関係、出土遺物や土層堆積状況等の観察、検討から各溝の時期が求められている。第3・4号溝は、杭列による護岸用工作が施されており、また堰としての横状造構の存在等から農業用水路という機能が考えられている。しかし、堰に対応する取水口（溝）と水田が検出されているわけではない。また溝の掘鑿が人工によるものか、自然的なものかも判断されていない。これらの問題点は、溝の掘鑿・埋没時期、杭の時期とともに低湿地遺跡の発掘課題でもある。

**第4号溝** A区から西に流路をとっていた第4号溝は、B区で溝幅を増し、D区で急に湾曲し、さらに蛇行しながら北にのびていることが知られた。第4号溝の溝幅は、B区で約22mを測るが、ある時期の溝幅を示しているのではなく、この約22mの間を何度も流路が移動したと考えるべきであろう。A区西端では11m、D区湾曲部のもっと狭い部分で約9mあることから約10m前後の溝幅が考えられよう。D区で急に湾曲し、流れを北に転じているのは、那珂丘陵線に接したためで、丘陵線をしばらく北流した後に御笠川に合流するのであろう。第3号横状造構は溝幅の狭い位置にあり、集水という堰の機能からすれば、上流のB区が溝幅がやや広いこともあって、効果的な構築位置ということができよう。もちろん堰のもう一つの機能である揚水は水田面と関係しており、堰の構築位置に強い制約があったことは言うまでもない。第3号横状造構が堰とすれば、取水口（溝）が検出されていないが、D区第4号溝左岸の平坦部へ導水されていた可能性が強い。この左岸平坦部ではD18・25区南壁上層に見られるように、粘質暗黒色土層が水平に堆積しており水田面として比定できよう。またD18区ではN-31°-E方向のうねの溝と考えられる浅い溝が平行して走っている。この水田面の時期については、出土遺物（Su7～12・18・20、H113）や、第1～4号堅穴が粘質暗黒色土層を切っていること、第4号溝と同時期と考えた第5号溝埋没後に堆積していることなどから、古墳時代から奈良時

代後半ごろと思われる。また、那珂丘陵の縁を北流していると思われる第6号溝と、その流木も、ほぼ同じ時期と推測される。ところで第3号樋状遺構が新たに検出され、第4号溝には長さ約97mの間に3つの樋状遺構が構築されていたことになる。これらの間隔は、上流の第1号樋状遺構から第2号樋状遺構までが約20m、第2号樋状遺構から第3号樋状遺構までが約77mである。3つの樋状遺構は、同時期に構築、機能していたかは明確にしがたいが、水害による流失によって改修、補強を繰りかえし、最終的には流路の移動や埋没等によって廃棄され移築されたのではないか。その遺存状況が構築順序を示すとすれば、第3号→第2号→第1号樋状遺構の順に下流から上流へと移動したことになる。

第4号溝の溝底には4つの測状遺構がある。第4号溝の流路は八女粘土層を浸食していることから、かなりの水量があったものと予想され、また第3号樋状遺構が堰として集水すればB区では約1.0mの深さとなり4つの測状遺構は完全に水没することになる。しかし、第1号測には集水溝と思われる溝があり、また第2・3号測からは祭祀的行為に供されたと思われる丹塗り壺形土器や小型丸底壺の完形品が多量に出土していることから、溝底があらわれる渴水期があったのではないかと思われる。しかも測状遺構から出土する土器は、弥生時代中期後半ごろから古墳時代までの長い時期を示しており、ある時期に岸から土器が一度に投げ込まれたわけではない。第1・2号樋状遺構が、下流への水を完全に断っていたとはその構造から考えられないことから、さらに上流に流路を変える施設が必要であるが、渴水は定期的に巡ってきていたのではないかと思う。第4号溝溝底における流木や土器などの遺物が、他の遺跡に比べ少なく感じるのは、この渴水期に流路の清掃や整備がなされたとすれば容易に理解されよう。

これらのことから第4号溝は、その対象となる水田面の確認はできなかったが、諸岡川の旧河道と考えられる古くからの自然流路を、弥生時代中期後半前後から農業用水路として利用し始め、古墳時代まで至っている。この間、護岸工作や樋状遺構の構築、補強、移築等の流路安定と確保のための一連の作業が行なわれたものの、新たに掘鑿し流路を変えることはなかったようで、流路自体は自然地形にさからうことなく依然としてもの姿をとどめていたのであろう。第4号溝の埋没時期については、埋土中の遺物が参考となろうが、第3号溝との重複で新しい時期の遺物の混入がありここでは測状遺構の出土遺物から5世紀前後を考えておきたい。

**第3号溝** 第3号溝は、第4号溝が完全に埋没した後に、上部に重複しながら西へのびる溝である。第1次発掘調査では、溝の時期を12世紀後半頃と推測している。第4号溝との時期差が大きいこと、溝には付属施設がなく、蛇行していることから、溝の機能、性格等など明確にしえないなどの問題点が指摘されている。第2次発掘調査では、連続してではなく、その延長部の一部をB19・20区で検出したにすぎない。このB19・20区では底部糸切り離しの土師器が数点出土し、12世紀後半をさかのばらないことが確認された。またB4・5区東壁土層では、

もう一つの溝があり、第3号溝の古い流路と考えた。この古い流路の東延長部は未掘部にあたり、A区第3号溝から同時期の分流か、あるいは時間的な差があるかは判断できないものの、溝底から古手の土師器が出土すること、この溝の埋没過程では再び流路となった可能性がうすいこと、さらに上部から口禿口縁の白磁が出土したことなどから、12世紀後半以前の流路を確認したことになる。しかし、第4号溝との年代的な隔りが埋められたわけではなく、古い溝の流路についても明らかにできなかった。第3号溝が農業用水路であるかは確定的な根拠を欠いているが、B4区・B6区・B16区で検出した杭列B・C・D・Fは第3号溝の新しい流路に伴うと思われる水田面に打ち込まれたもので、畦畔状に2列に並ぶものもある。B16区の杭列からは土師器(Ha41)、青磁(Ji13)や馬齒が出土した。杭列Fが横切る小溝は第3号溝の古い流路に切り込んでおり、水田からの排水溝であろうか。D区で推定した水田面は第3号溝の古い時期の流路に伴うものと思われる。B区の左岸からD区左岸にかけては第4号溝以降の長い間、水田として使用されたのであろう。

**第1・2号溝** 第1・2号溝の延長部は、B19・20区の第3号溝の上部に重複してその一部を検出した。砂層の埋土は第3号溝とほとんど区別できず、両岸も不明瞭なために全体は検出できなかった。A区では板付と邵珂の集落を結ぶ間道下部で検出されており、B区でも第3号溝とともにこの間道にそって検出された。この間道はかなり古い時期から利用され現在に至っていることを示していよう。

**C区粘土採掘豎穴** C区北西隅で群集している豎穴は、その形状や遺物出土状況等から粘土採掘跡ではないかと推測した。この推測は、単に豎穴群が土塙基や貯蔵穴、あるいは自然的な落ち込みと判断する積極的な根拠を欠いていたということにすぎない。ただ同じ粘土を十分に乾燥、粉砕し、同じように処理した粘質暗黒色土を混ぜて練りあげ、土器作りを試みた。土器の製作技術は、弥生・古墳時代人には遅く及ばないが、胎土の裏かせ、練りの時間、製作時の天候、粘土紐の接合、器壁の厚さと調整、完成後の乾燥等に留意しながら数個の土器を作製した。焼成は平地式の焚き火で行なったところ、失敗するものもあったが、これは製作技術の稚拙さや、乾燥不足によるもので、ほとんどはひび割れもなく赤みをおびた茶色に焼きあがった。しかし、このことをもって豎穴群を土器粘土の採掘跡と考えるつもりはなく、粘土の科学的分析、あるいは土器製作の工房跡、焼成跡等の遺構との関連で断定されるべきであろう。ここでは豎穴群の粘土が、土器製作の胎土として十分にたえうるということにとどめておきたい。

**第1号豎穴** 第1号豎穴は、第5号溝を覆う土層を掘り込んでいることから、出土遺物からその先後関係と年代を推測できた。第1号豎穴の出土遺物は完形品か完形に近い破片で、溝中の出土土器とはやや様相を異にしている。豎穴自体の性格については不明な点が多い。現在、豎穴内は湧水がはげしく、さらに豎穴より南東へ小さな溝がのび、飛び石状に石が置かれてい

ることから、湧水を利用した井戸的な使用が考えられる。豊穴の性格は出土土器との関連も無視できない。出土土器は須恵器が圧倒的に多く、もっとも新しい様相を持つSu26は、高台の貼り付けは底部と体部との境近くで、第1号豊穴の時期は8世紀後半（奈良時代後半）頃と考えられる。注目されるのは3個の墨書き土器である。2個の皿外底部に書かれた文字はよく読めないが、杯（Su29）の外底部の文字は「中寺」と読める。この墨書き土器は那珂郡家との関連ではなく、むしろ那珂深ヲサ遺跡の南西2.3kmに位置する三宅庵寺との関連を思わしめる。<sup>註3</sup> 三宅庵寺の発掘調査は昭和52年に行なわれた。瓦溜、堀立柱建物2棟や溝などの遺構が検出され、これらの遺構から多量の遺物が出土している。これらの遺構、遺物の検討から三宅庵寺は、7世紀後半から8世紀前半にかけて築造され、9世紀前半までの存続期間が考えられている。墨書き、ヘラ書きされた須恵器、上師器は8点出土しており、ほぼ8世紀代の時期を示している。文字は、「寺」、「造寺」、「堂」、「佛」、「中」、「衆」、「左」、「用」、「東」で直接に寺院を表現しているものが多い。那珂深ヲサ遺跡周辺は、第1次報告書においても指摘されているように奈良時代の遺跡や遺物の発見はけっして多くない。その詳細については各報告書に譲るが、これまでに那珂郡家の位置や規模を実証しうる考古学的資料は提示されていないといえよう。このような意味あいから、巻末に付した那珂君体遺跡と那珂沼口遺跡も同じような問題意識で発掘を進めた。那珂君体遺跡では、第2号溝が条里の復元線とほぼ同じ方向をなしているが、那珂深ヲサ遺跡で検出された各溝は、条里復元線とは無関係に走っており、水田もこの溝に規制された区画をなすようである。

以上のように、那珂深ヲサ遺跡の発掘結果は、当初の発掘目的の一つであった那珂郡家の位置、規模等の確認については、奈良時代後半期の第1号豊穴を検出したものの、その関連については明確にしえなかつた。

那珂深ヲサ遺跡周辺での発掘調査は、板付遺跡、諸岡遺跡などここ10年近く継続して行なわれているが、都市の再開発に伴ない埋蔵遺跡や比喩遺跡のように那珂丘陵北端部での発掘例が増加しつつある。今年度も数か所の遺跡で発掘が予定されており、丘陵上生活面と沖積地との関係、あるいは丘陵縁における水田經營のあり方などの資料が得られるものと思われる。

註1 日野尚志「筑前国那珂・唐田・柏屋・御笠四郷における条里について」

佐賀大学教育学部研究論文集24(Ⅰ) 1976年

註2 福岡市教育委員会『那珂深ヲサ遺跡』I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 1981年

註3 福岡市教育委員会『三宅庵寺』

福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集 1979年

図 版  
PLATES





那珂深川遺跡周辺航空写真（1980年11月撮影 約1/15000）



(1) 那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真 (1981年2月撮影)



(2) 那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真 (1981年2月撮影)



(1) 那珂深ヲサ遺跡全貌 (1978年3月 第1次発掘調査)



(2) 第1次発掘調査 (A区) 第4号溝 構造遺構



(1) 第2次発掘調査 (B区) 遺構全景



(2) B区遺構全景



(1) B4 区杭列A



(2) B4 区杭列A



(1) B4区杭列



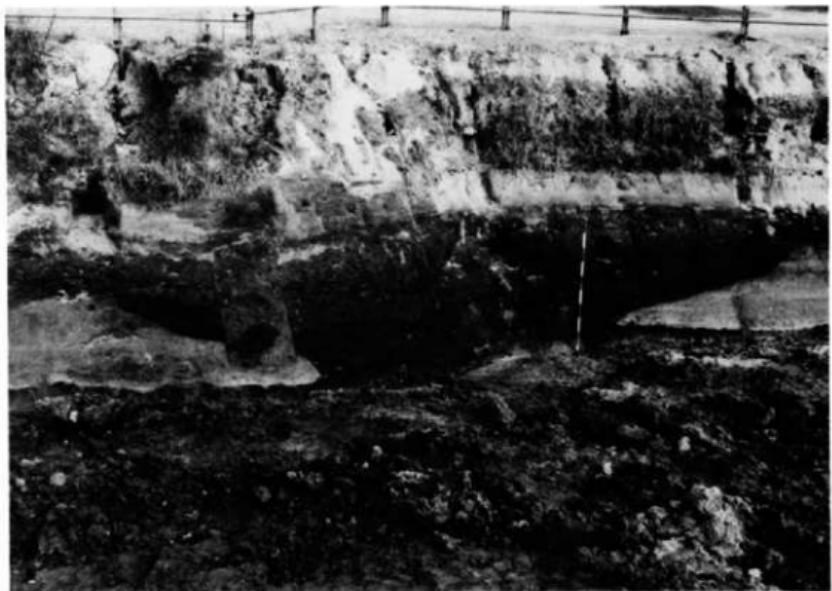
(2) B19・20区第3号溝



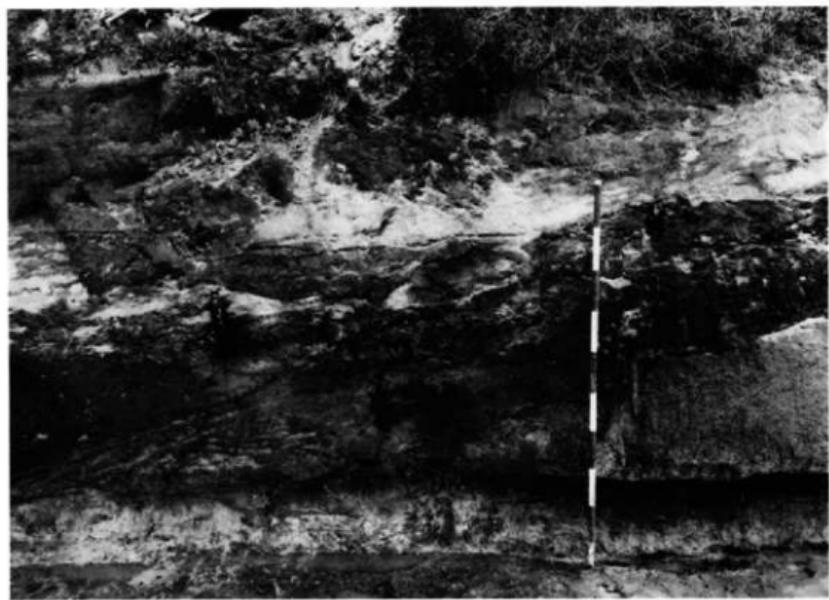
(1) B4・5区東壁土層断面



(2) B4・5区東壁土層断面 第4号溝



(1) B4・5区東壁土層断面 第3号溝



(2) B4・5区東壁土層断面 第1・2号溝



(1) C区全景（東から）



(2) C区全景（南から）



(1) C区全景（東から）



(2) C区豊穴群



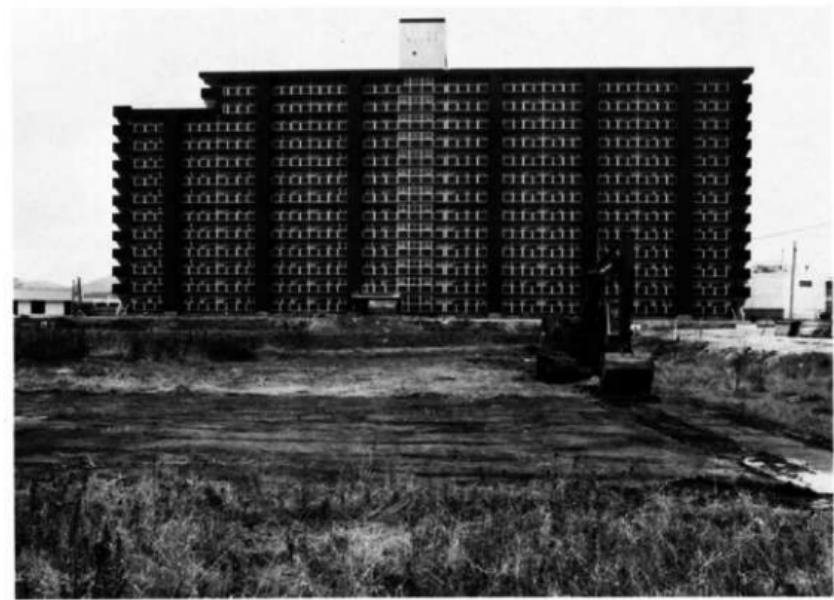
(1) C区竖穴



(2) C区竖穴 土器 (Y42) 出土状况



(1) 第3次発掘調査（D区）全景



(2) D区発掘調査前（西から）



(1) D区全景 第4号溝（北西から）



(2) D区全景 第4号溝（南東から）



(1) D区全景 (東から)



(2) D区全景 第5号溝



(1) C区第6号溝 (東から)



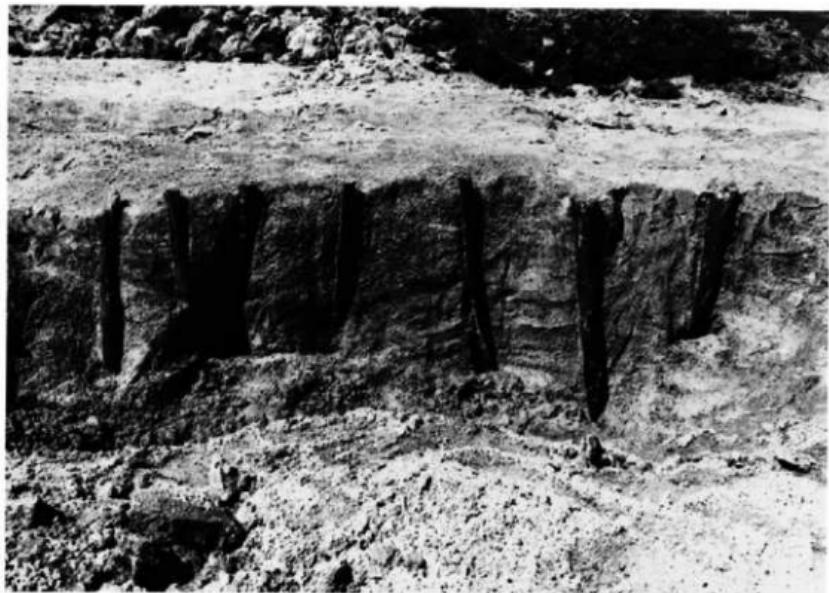
(2) C区第6号溝 (北から)



(1) D18区南壁土層断面



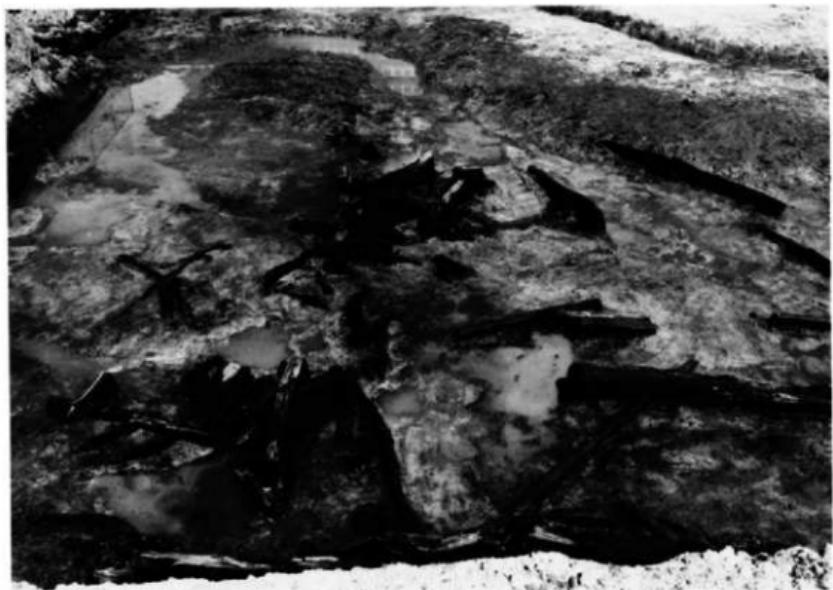
(2) D25区南壁土層断面



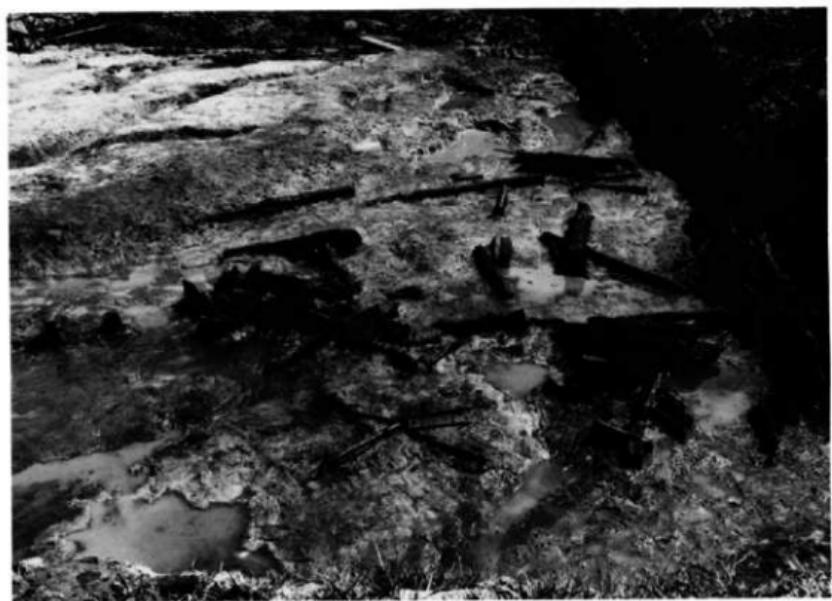
(1) D19区第4号溝左岸杭列



(2) D24区飛び石状遺構



(1) D23区流木出土状況（西から）



(2) D23区流木出土状況（北から）



(1) D23区流木間木製品出土状況



(2) D23区流木間木製品出土状況 (W13)



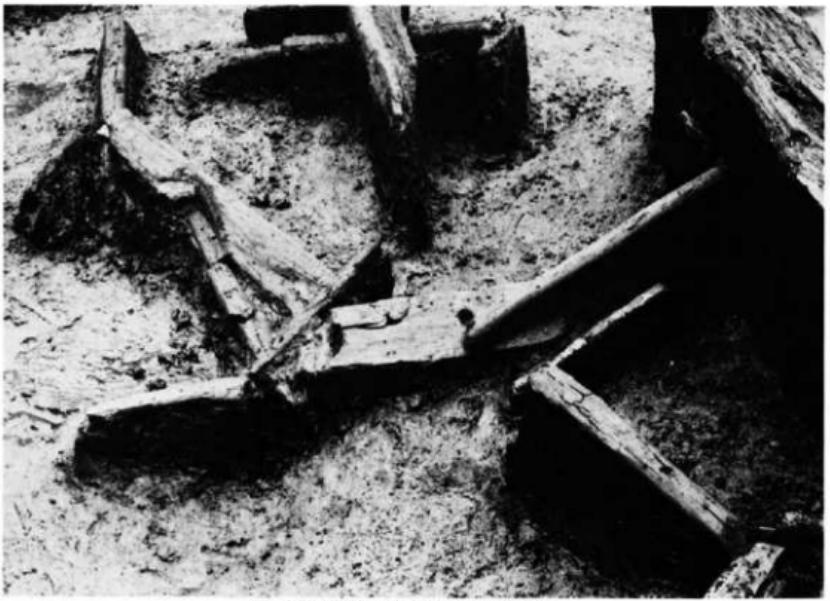
(1) D23区流木簡木製品出土状況 (W17)



(2) D23区流木簡木製品出土状況 (W41)



(1) D24区流木出土状况



(2) D24区流木和木製品出土状况 (W18)



(1) D25区杭列



(2) D25区流木出土状况



(1) D24区第1号竪穴（南から）



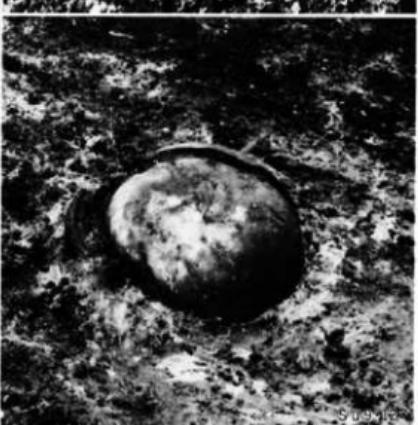
(2) D24区第1号竪穴（東から）



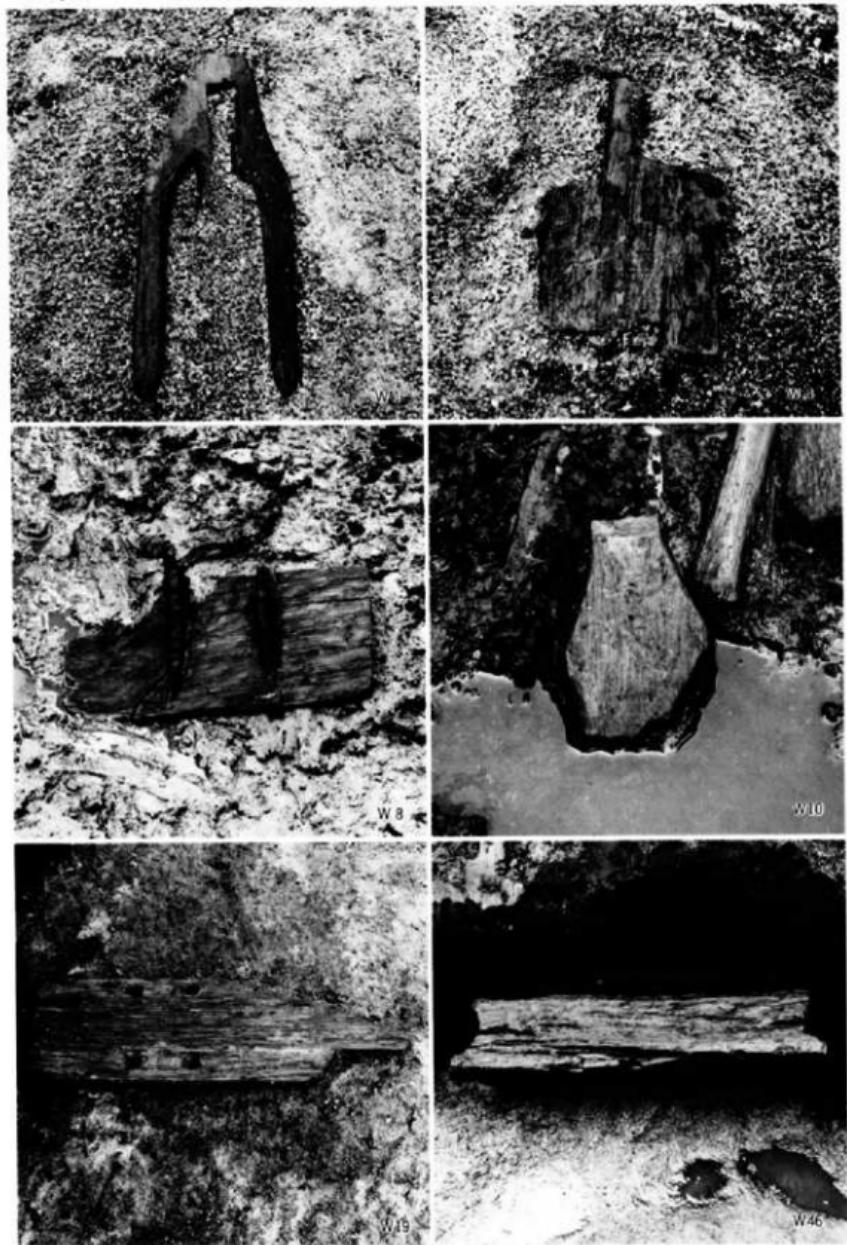
(1) D24区第1号竖穴土器出土状况



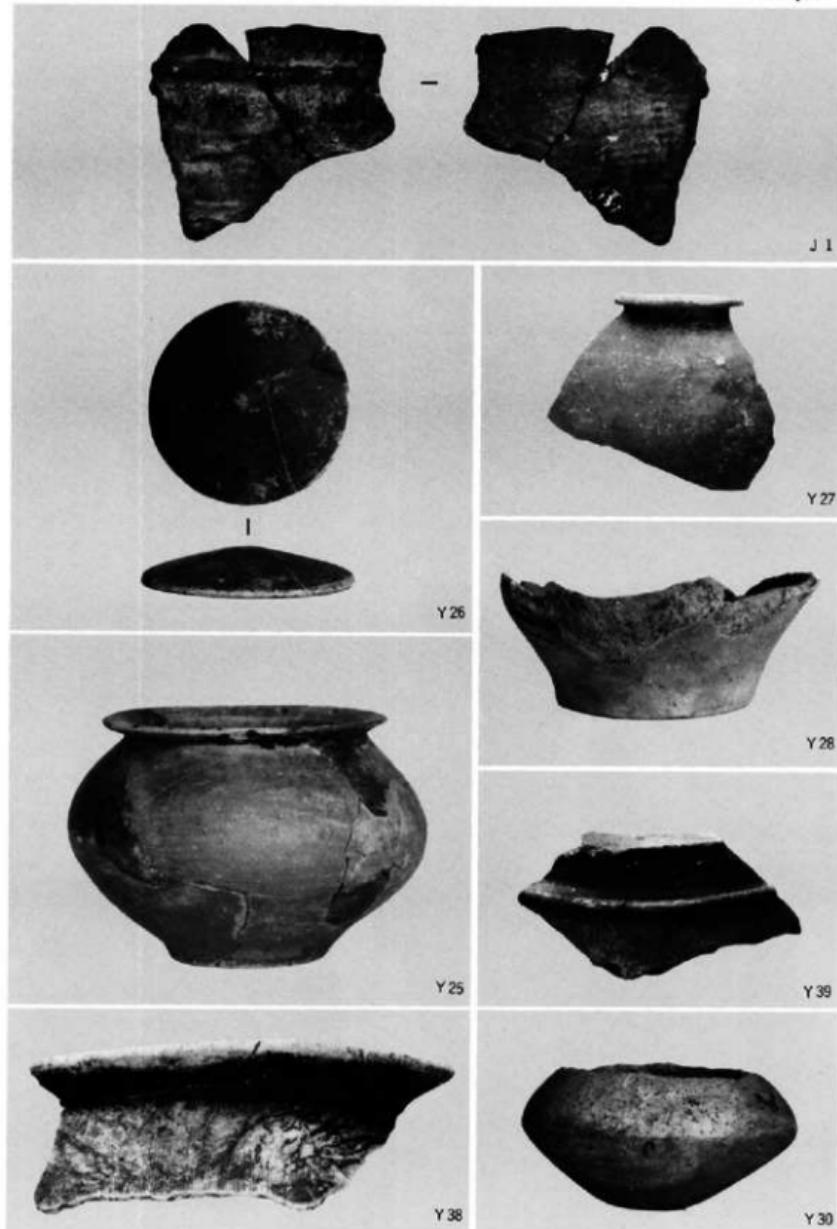
(2) D24区第1号竖穴土器出土状况



土器出土状况



木製品出土状況



出土土器 (1) 比尺1/3 J1は約1/2



Y 36



Y 43



Y 44

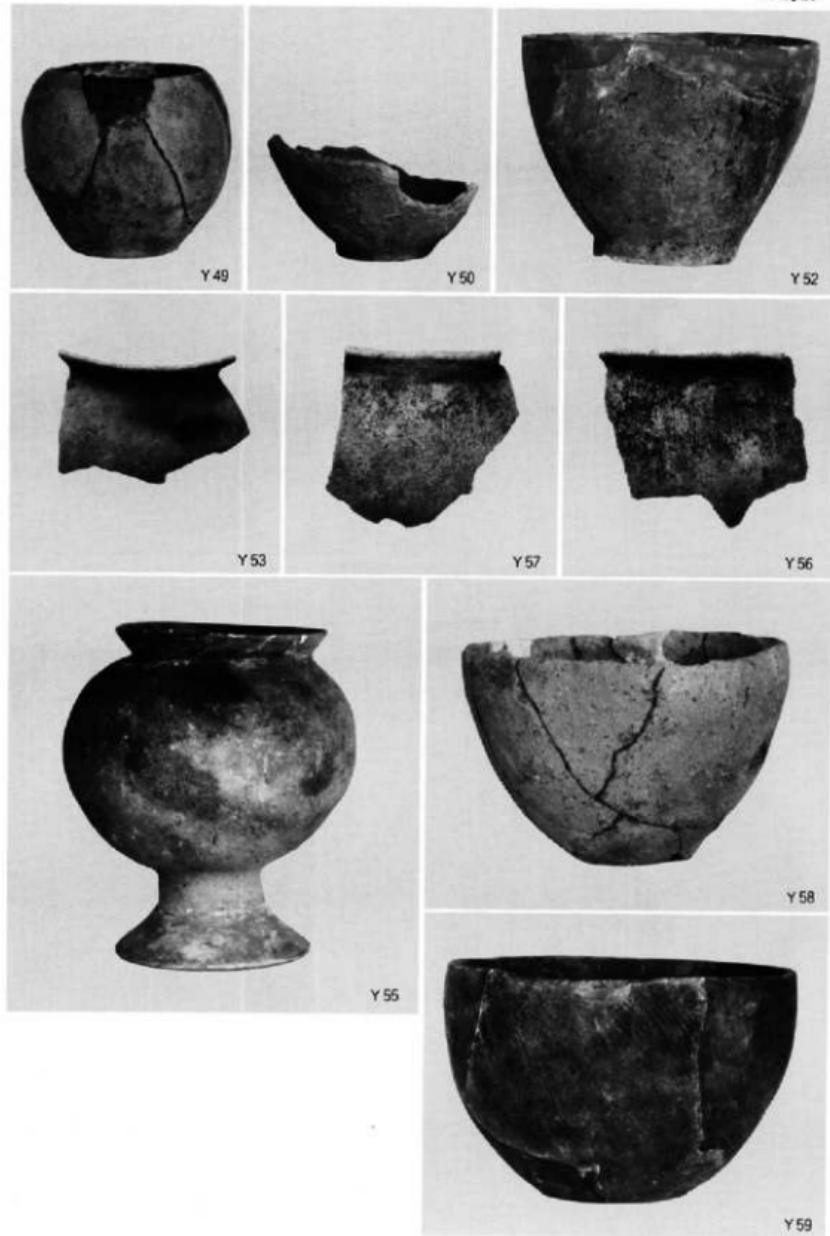


Y 41



Y 51

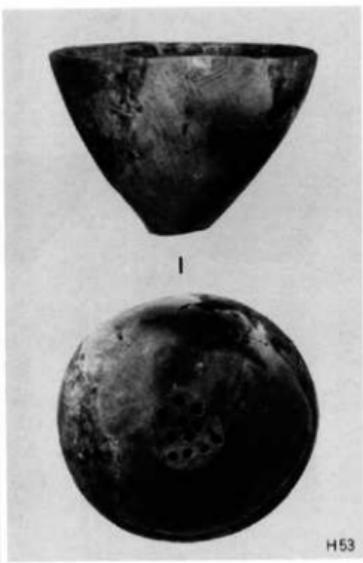
出土土器 (2) 缩尺 1 / 3



出土土器 (3) 比尺1/3



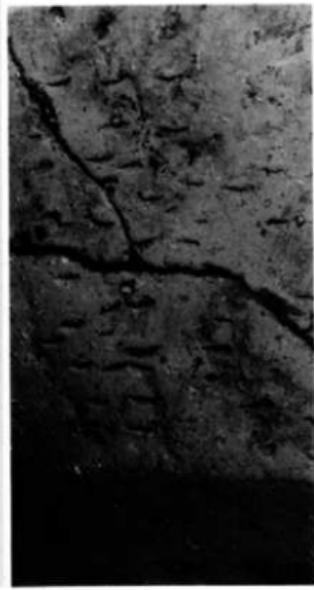
H51



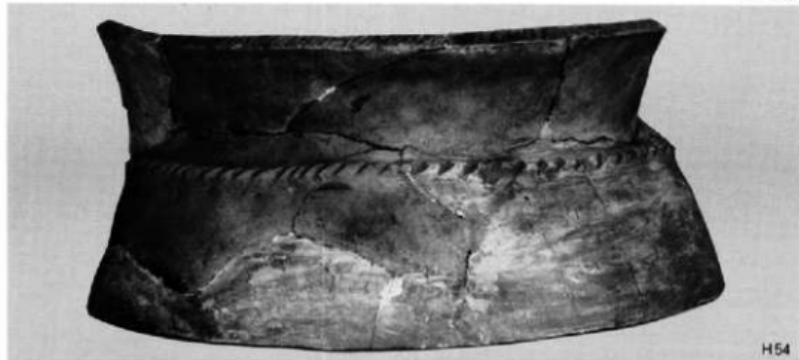
H53



H50



出土土器 (4) 縮尺1/3



出土土器 (5) 縮尺1/3



H60



H63



H64



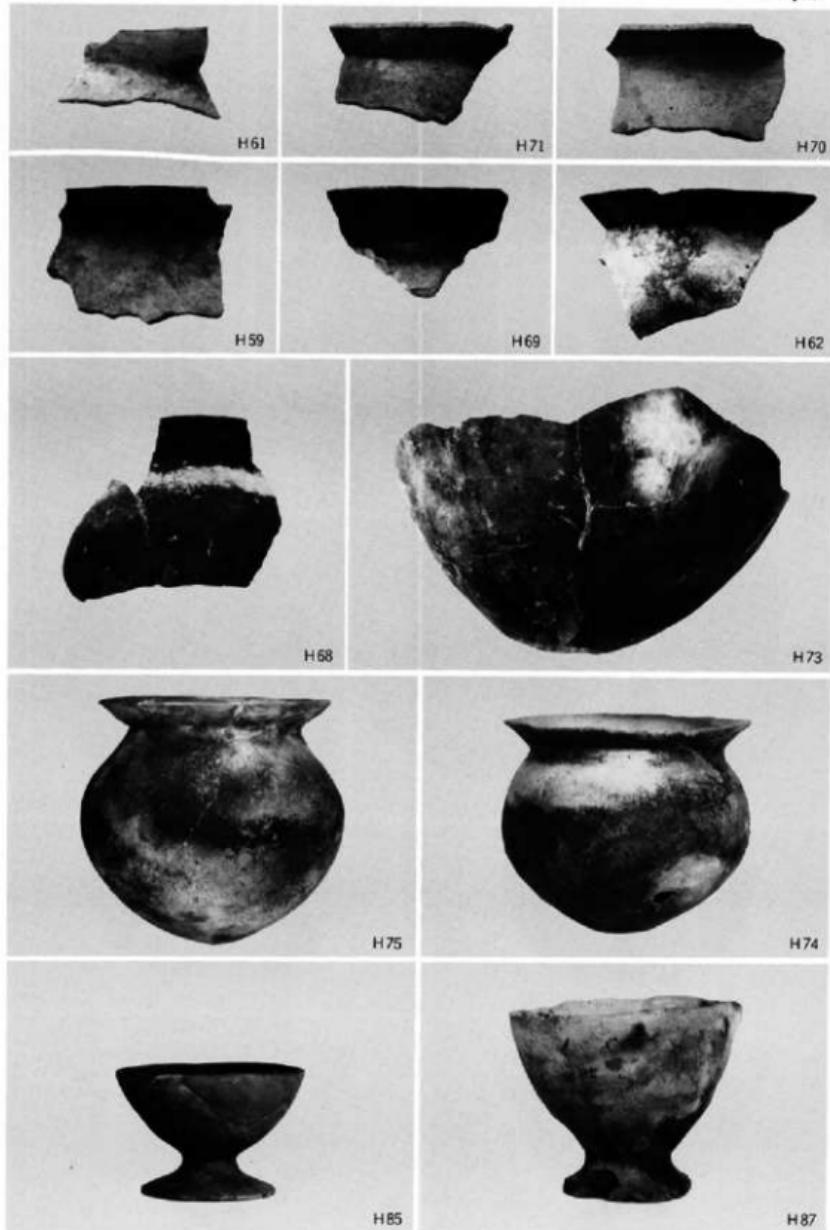
H66



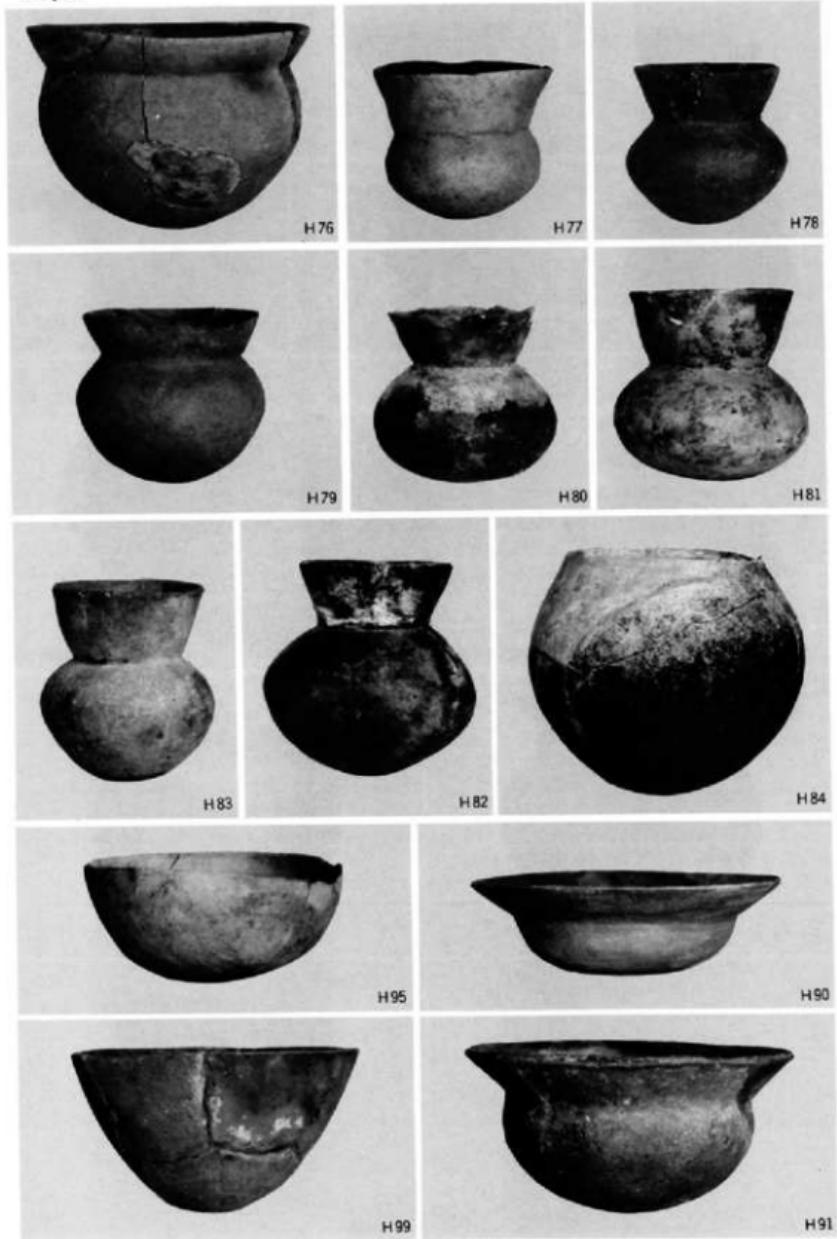
H65



H67



出土土器 (7) 縮尺1/3



出土土器 (8) 線尺1/3



H103



H105



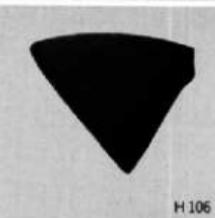
H110



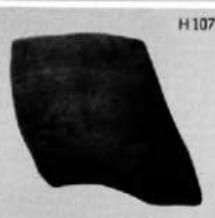
H111



H112



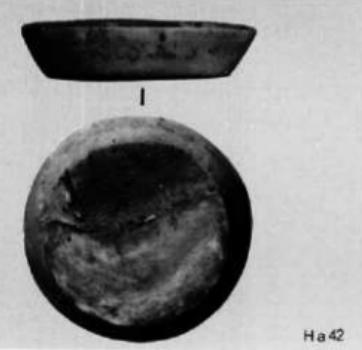
H106



H107

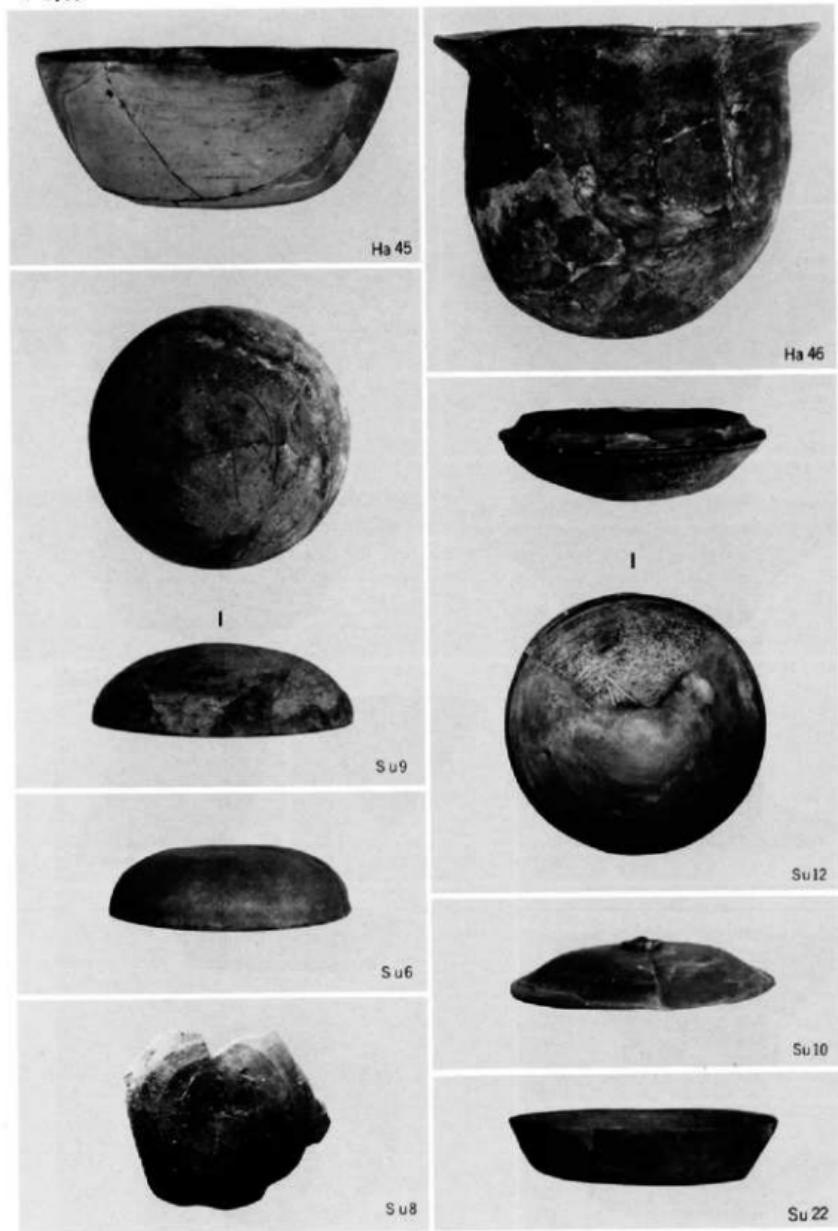


Ha 29



Ha 42

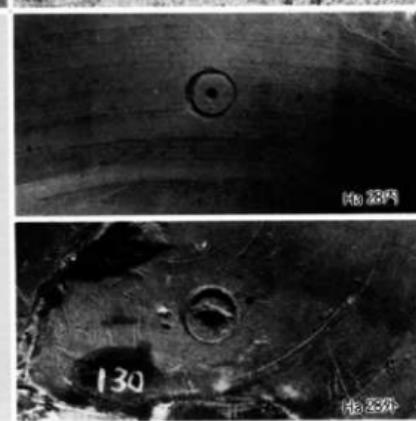
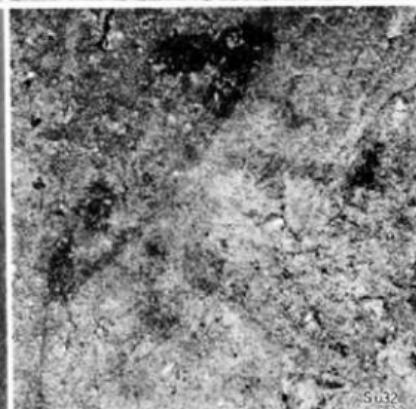
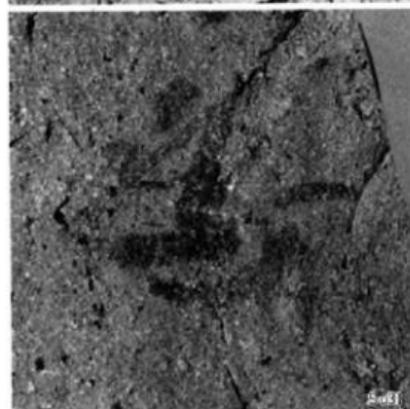
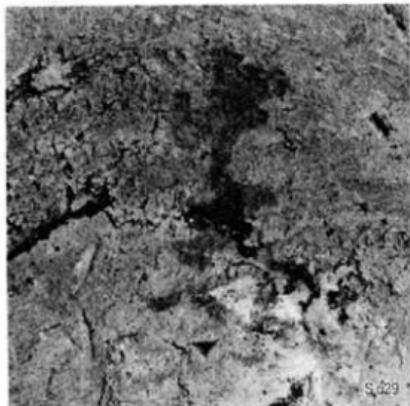
出土土器 (9) 縮尺1/3



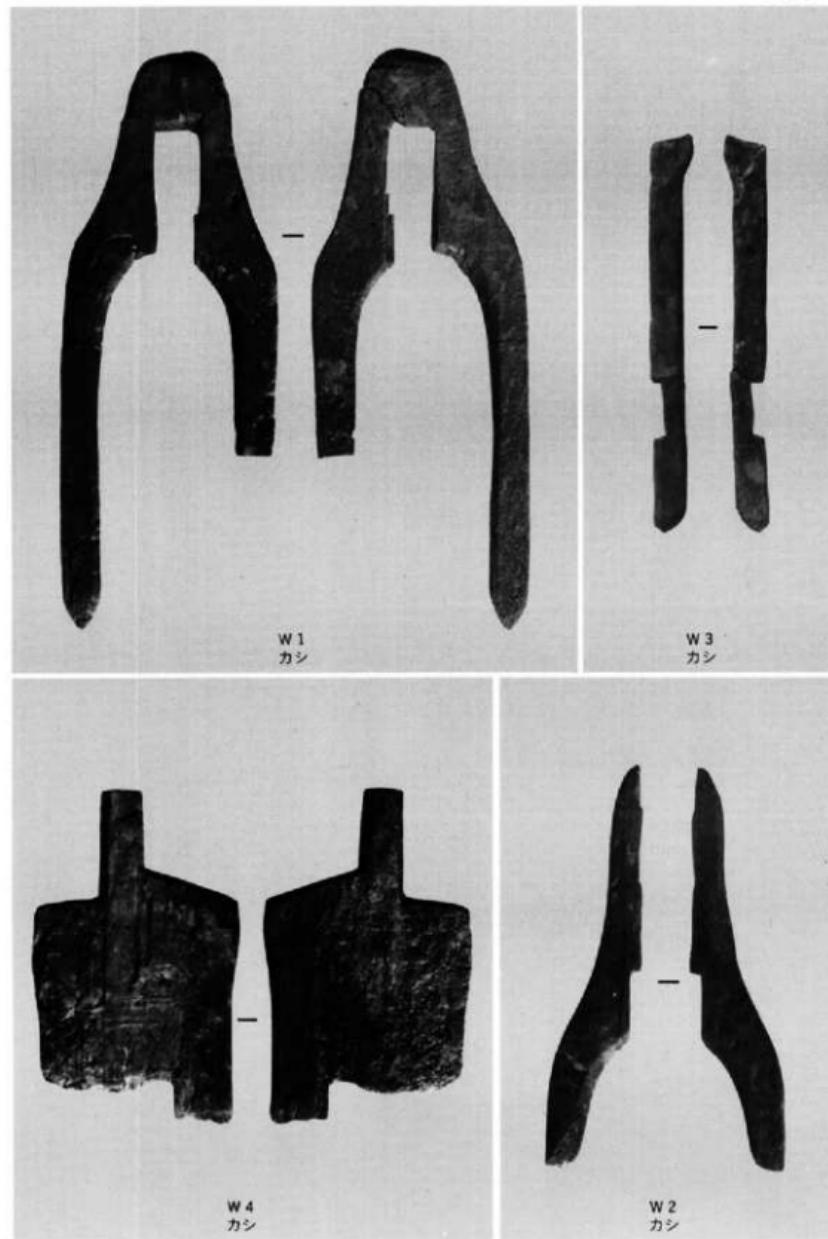
出土土器 (10) 比尺1/3



出土土器 (11) 縮尺1/3

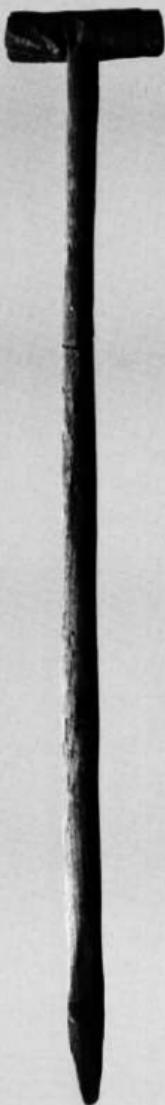


出土土器 (12) 缩尺不统一



出土木製品 (1) 縮尺1/4



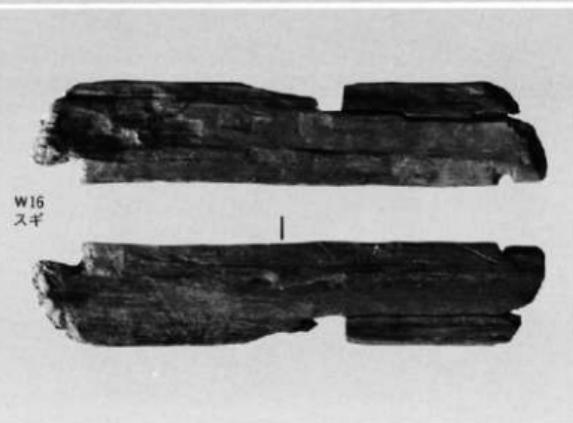
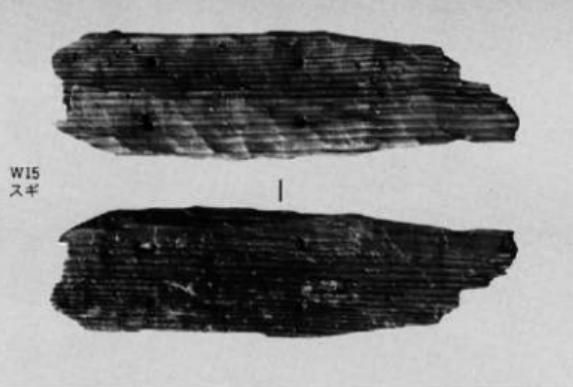
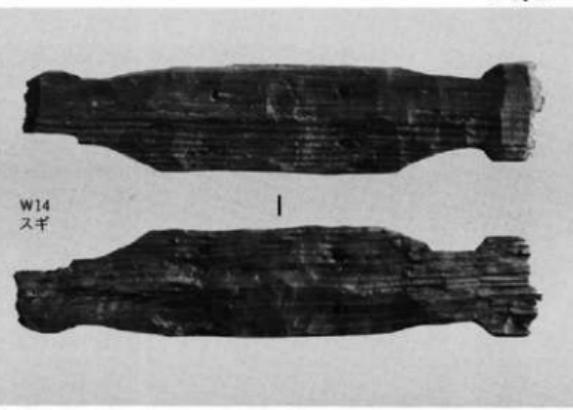


W14  
スギ

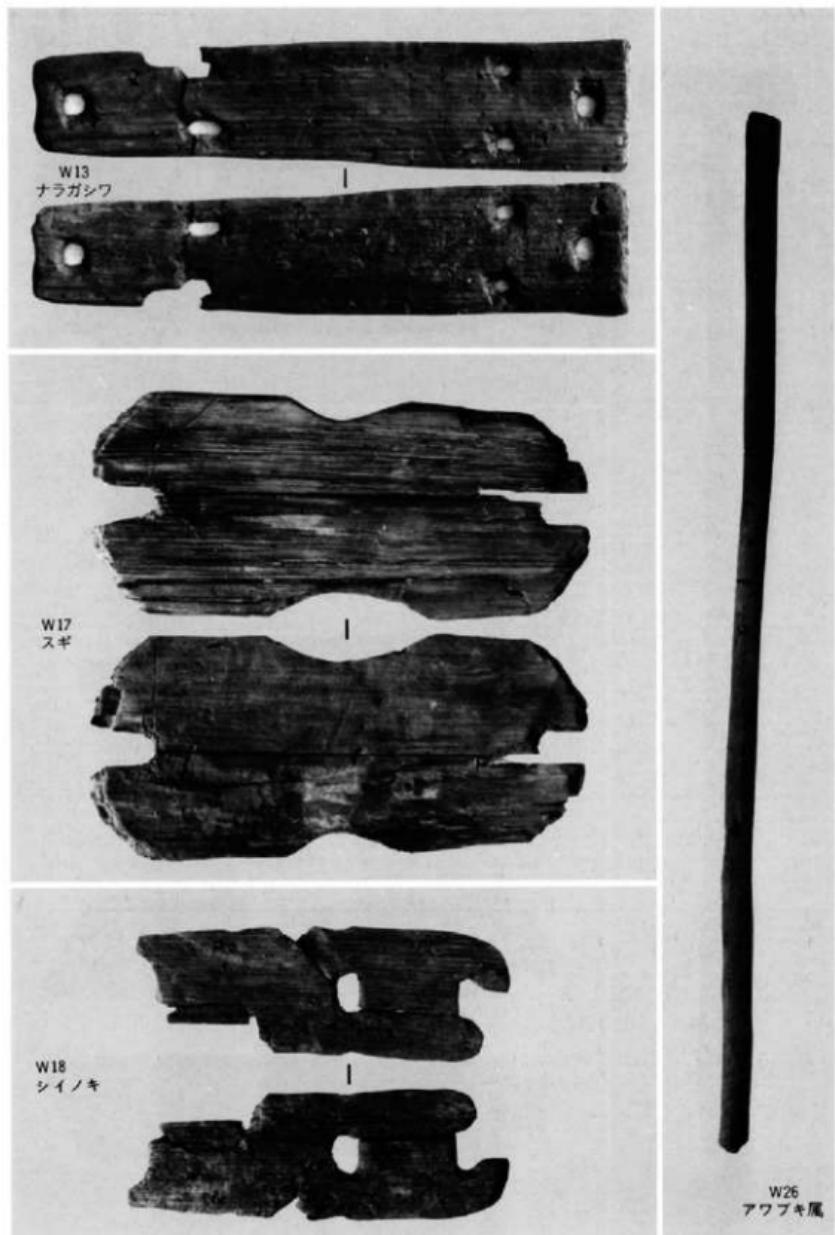
W15  
スギ

W16  
スギ

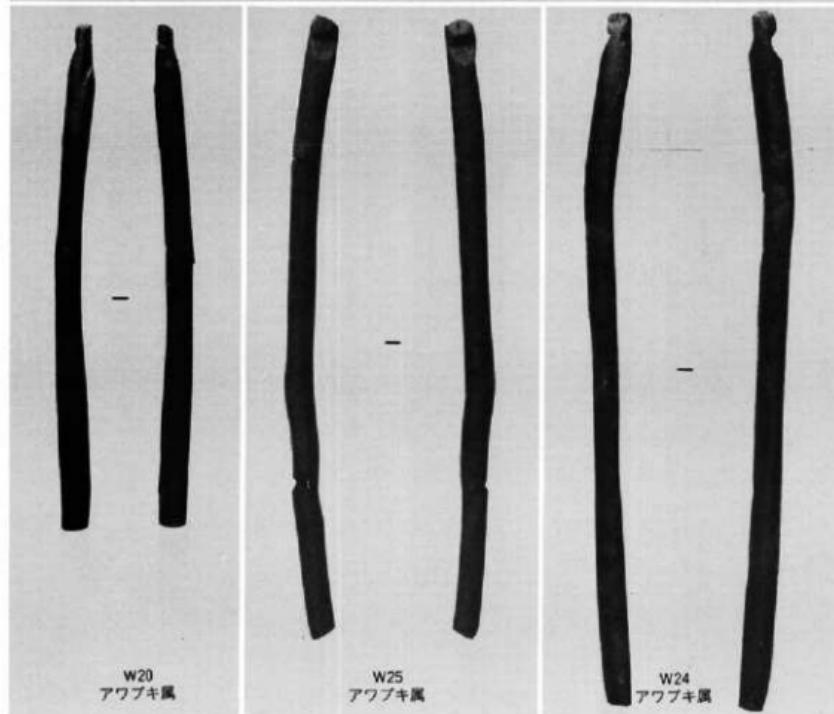
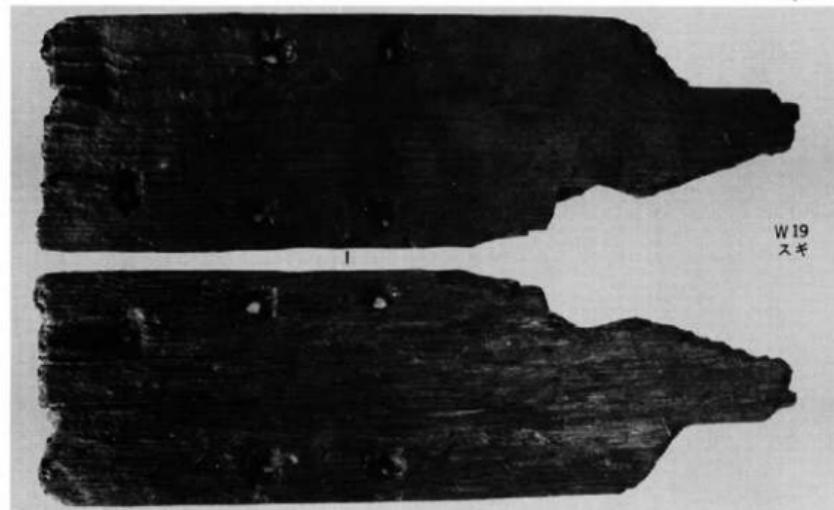
W36  
カシ



出土木製品 (3) 縮尺1/4



出土木製品（4）縮尺1/4



出土木製品 (5) 縦尺1/4



W37  
クリ



W40  
シイノキ



W33  
広葉樹散孔材



W43  
クロモジ属



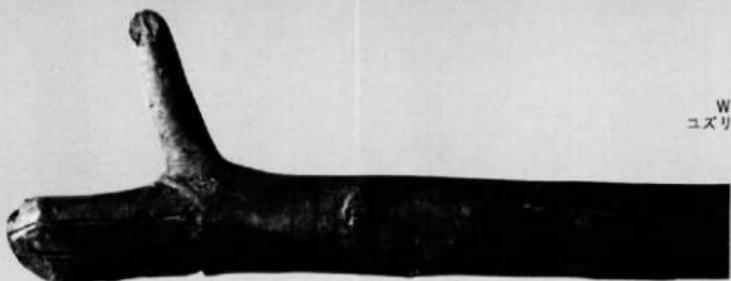
W42  
シイノキ



W35  
ユズリハ

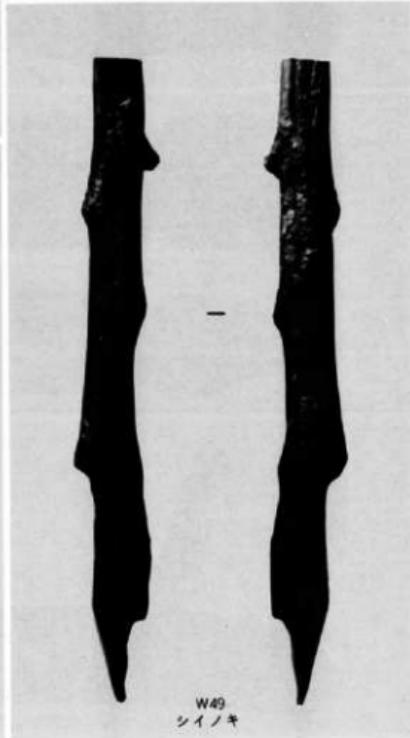
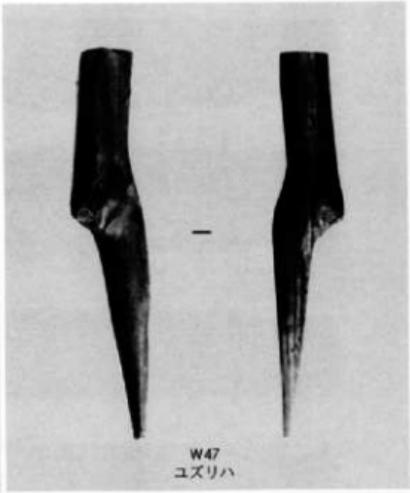


W30  
カラスザンショウ



W39  
ユズリハ

出土木製品（7）縮尺不統一



福岡市博多区

# 那珂君休遺跡



1982

福岡市教育委員会

## 本文目次

	ページ
第1章　はじめに.....	1
1. 発掘調査に至るまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
第2章　調査の記録.....	2
1. 調査の概要と経過.....	2
(1) 試掘調査.....	2
(2) 本調査.....	3
2. 出土遺物.....	4
3. おわりに.....	5
第3章　君体遺跡から出土した木製遺物の樹種について.....	6

## 挿図目次

	ページ
Fig. 1 那珂郡家推定図（日野尚志氏による）.....	1
Fig. 2 土層柱状図.....	2
Fig. 3 那珂君体遺跡全体図（縮尺1/500）.....	2
Fig. 4 C区北西壁土層断面図（縮尺1/80）.....	3
Fig. 5 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）.....	5

## 図版目次

本文対照頁

PL. 1 (1) 那珂君体遺跡遠景（那珂团地屋上から）.....	1
(2) 那珂君体遺跡遠景（板付团地屋上から）.....	1
PL. 2 (1) A区 第2号溝（北から）.....	3
(2) B区 第2号溝（南から）.....	3
PL. 3 (1) C区 第2号溝（南から）.....	3
(2) D区 第2号溝（南から）.....	4
PL. 4 (1) F区（南西から）.....	4
(2) F区（南東から）.....	4
PL. 5 (1) 木製品顕微鏡写真.....	6
(2) 木製品（縮尺1/4）.....	5

# 第1章 はじめに

## 1. 発掘調査に至るまで

1980年、福岡市建築局が博多区那珂大学君体に市営住宅建設の計画を立て、福岡市教育委員会文化課に対して事前に埋蔵文化財包蔵の有無の確認を求めてきた。

当該地は、国指定史跡である板付遺跡の北側にあるとともに、日野尚志氏のいう那珂郡家城内に位置するため、各種、各時代の遺構の包蔵が予想された。

調査対象地は水田で、約 6000m<sup>2</sup>にのぼるが、現畦畔に平行に、数本のトレンチを設定し、大型掘削機を用いて同年の5月22日、23日の2日間、試掘調査を実施した。

その結果、現在の農業用水路に近い位置に、これとは平行に走る溝状遺構2条と、調査対象地内の東部において多数のピットを検出した。

そこで、文化課は建築局および福岡市住宅供給公社と協議をもち、那珂深ツサ遺跡と併行して発掘調査を実施する旨、決定した。

## 2. 発掘調査の組織と構成

**調査委託** 福岡市住宅供給公社

**調査主体** 福岡市教育委員会文化部文化課

志鶴幸弘（文化部長） 井上剛紀（文化課長）

三宅安吉（埋蔵文化財第一係長） 柳田純孝（埋蔵文化財第二係長）

柳沢一男・横山邦雄（試掘調査担当） 古藤国生（事務担当）

飛高憲雄・力武卓治（発掘調査担当）

**発掘作業** 荒津孝治・安東昇・江越初代・河野徹也・関加代子・関直樹・関政子・藤田太・武本延子・広田好和・広田清美・溝口武司・実瀬栄治・山内タツ子・岩永真弓・小島由美子・中村満代・花畠照子・藤たかえ・溝口博子



Fig. 1 那珂郡家推定図  
(日野尚志氏による)

## 第2章 調査の記録

### 1. 調査の概要と経過

那珂君休遺跡の本調査は、那珂深ヲサ遺跡の発掘調査と併行して実施することになった。ここでは本調査に先立って実施した試掘調査の結果から先に述べる。

#### (1) 試掘調査

調査期間 1980年（昭55）5月22日、23日

調査方法 那珂君休遺跡は、那珂深ヲサ遺跡の南西約250mに位置し、御笠川と諸岡川とに挟まれた冲積地にある。西側の諸岡川との関連から、これと直交するトレンチを設定した。トレンチの方向は、現水田の畦畔と同じ方向で、すなわち条里復元線の方向である。トレンチは20~30m間隔で5本設定し、南側から第I~Vトレンチとした。大型掘削機を用いて第I~IVトレンチは長さ25~32m、第Vトレンチは長さ72mにわたって造構、遺物の検索を行なった。

各トレンチによって土層堆積の厚さは違うが、層序は右略図のとおりである。第I層は厚さ約30cmの水田耕作土層、第II層は鉄分・マンガンの沈殿した黄褐色粗砂層で、厚さ約30cm。第III層は灰褐色を呈した粘質土層で、同じようにマンガン、鉄分の沈殿が見られる。厚さは約40cmである。第IV層は厚さ約40cmの黒色粘質土層。第V層は八女粘土層で、この八女粘土層の直下には青灰色粗砂層が確認され、第VI層とした。

試掘調査の結果、第II~Vトレンチにおいて溝状造構が検出された。この溝状造構は、西側部分において検出されたもので、その方向、幅等から連続する1条の溝状造構と考えられ、第2号溝とする。幅は約5~7m、深さ約1mを測る。第Iトレンチでは検出されていないことから、南側延長部でやや湾曲しているものと推測された。また、第IIトレンチにおいては、第2号溝の西側1.5mにおいて、細い溝状の落ち込みがあり、これを第1号溝とする。第1号溝は幅約1mで、深さは数10cmと浅い。この延長部は第I・III~Vトレンチでは検出されていない。これらの溝状造構は第IV層の黒色粘質土堆積後に断面U字状に掘り込まれており、溝底は第VI層の青灰色粗砂層中にあることが判明する。

また、第Vトレンチ北東部では、多数のピットが検出される。調査対象地が、那珂郡家推定域にはいっているため、那珂郡家および条里制との関連が注目された。

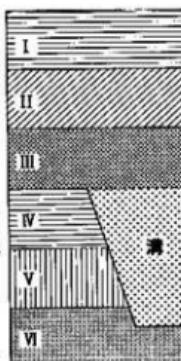


Fig. 2 土層柱状図

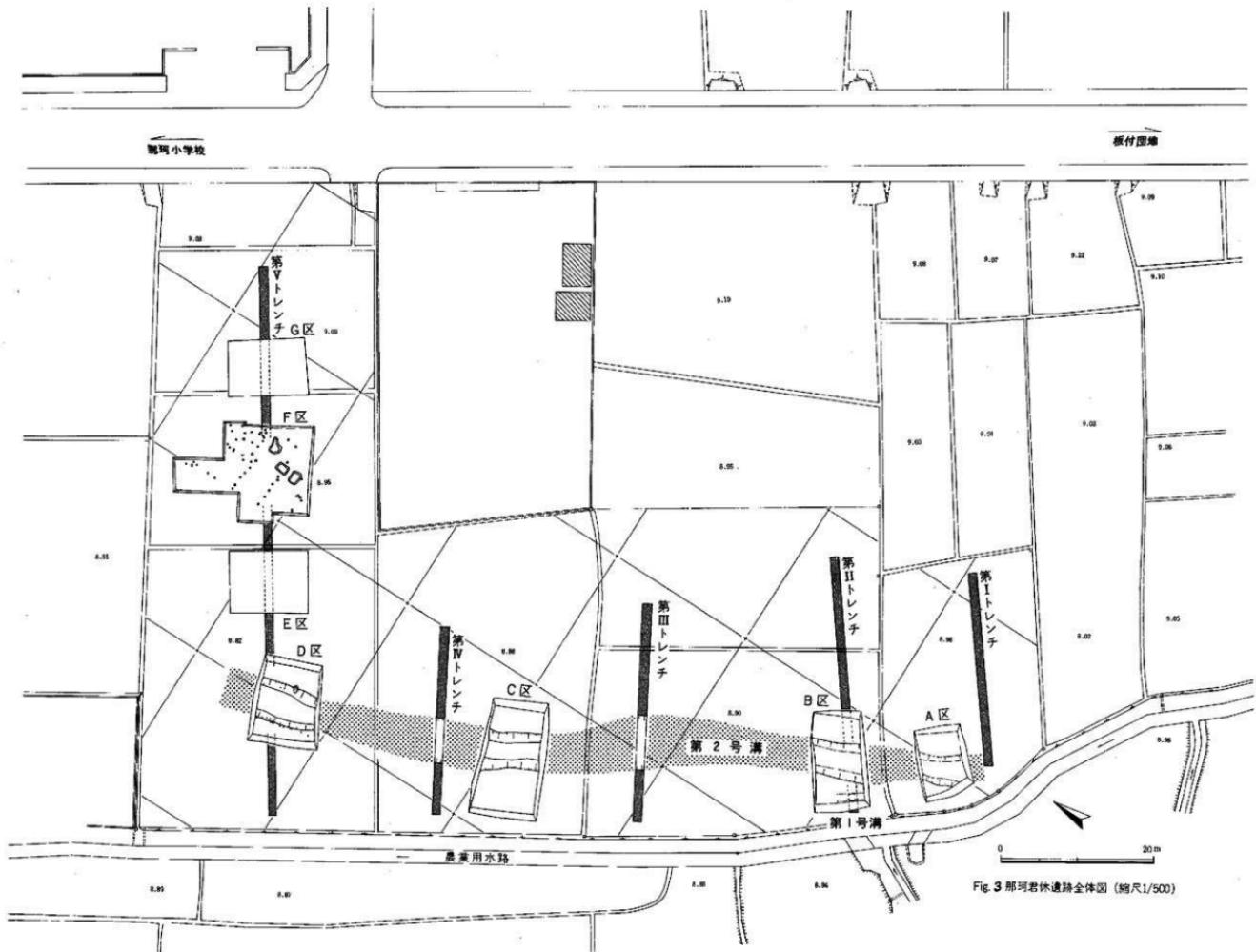


Fig. 3 那珂君休遺跡全体図（縮尺1/500）

## (2) 本調査

調査期間 1980年(昭55)8月25日～9月10日

調査方法および概要 試掘調査によって2条の溝状遺構と、第Vトレンチの北東部で柱穴と考えられるピット群が確認された。2条の溝状遺構からは結果的には出土遺物がなかった。しかし、第Vトレンチの第2号溝西側肩部には杭列が打ち込まれており、人工的遺構であることが判断された。このため2条の溝状遺構については、各トレンチ間に拡張区を設定し、その延長部を確認する方法を採用した。ピット群もその広がりと性格をつかむために周辺を拡張することにし、20日間の調査期間を計画した。

調査地点の北西には道路を挟んで福岡県御笠川・那珂川流域下水道終末処理場が隣接しており、おりしも例年ない大雨にたたられ、処理場からの流れ込みもあり、発掘調査は困難をきわめた。各トレンチ間の拡張区は、第Iトレンチと第IIトレンチとの間にA区を、第IIトレンチと重複してB区を、第IIIトレンチと第IVトレンチとの間にC区を、第Vトレンチと重複して西からD・E・F・G区をそれぞれ設定し発掘調査を行なった。

A区は $6.7 \times 9.5\text{m}$ の拡張区である。第Iトレンチでは第2号溝の両側延長部は検出されていなかったが、A区では長さ約3m、幅約2mにわたって検出できた。溝左岸(西岸)はやや東に湾曲しているようである。

B区は $7.2 \times 13.2\text{m}$ の拡張区である。A区より北へ $6.5\text{m}$ 離れた位置にある。第2号溝は幅約5m、長さ6.2mで南東から北西方向にのびている。両岸は直線的で、北西端部がやや狭くなっている。杭列による護岸工作や出土遺物は見られなかった。第1号溝は、第IIトレンチの南西端近くで検出されていたが、B区ではその延長部は検出されなかった。試掘調査の所見では深さ数10cmと浅い溝状の落ち込みであったことから、第IIトレンチを中心とした部分のみであった土壇状の遺構かと思われる。第2号溝左岸と現農業用水路との距離は約7mである。

C区は $9.0 \times 15.5\text{m}$ の拡張区で、第III、IVトレンチの間に設定した。第2号溝は幅約4.8m、長さ約7.5mを測る。両岸はやや出入りがあるが、ほぼ平行である。A・B区と同じように護岸用杭列は認められなかった。第2号溝の両端で土層を清掃し、溝中の埋土層、両岸堆積土層

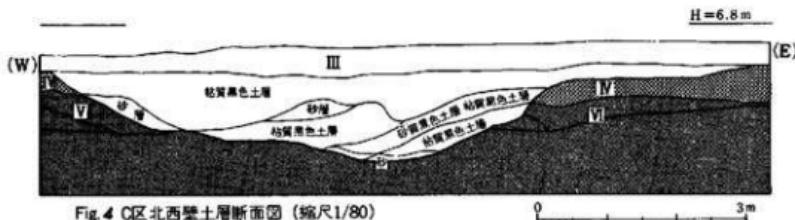


Fig. 4 C区北西壁土層断面図 (縮尺1/80)

との関係等を観察、検討した。Fig. 4はC区北西壁の土層断面図である。図中の第III～VI層は、試掘調査時の第III～VI層に相当する。第2号溝は試掘調査時の所見どおりに第IV層の黒色粘質土から切り込まれていることがわかる。溝中の埋土は右岸から流れ込んだ状況を示しており、またこれらの土層が粘質土層であることから、たえず水の流れがあったように思えず、比較的水量は少なかったのではないかろうか。さらに第2号溝の最終段階の流路は、深さ約80cmとなっており、当初の深さ約1.2mに比べかなり浅くなっている。溝幅は約10mに広がっているものの右岸は明瞭な段をなさず、本流は西側半分にあったのであろう。

D区は第Vトレンチと重複しており、9.3×11.5mの拡張区である。第2号溝は、幅約4.5m、長さ7.5mを検出した。第2号溝はA～C区までは、西側の農業用水路と平行に走っているが、D区では、やや東に寄っており、左岸と農業用水路との距離は約16mを測る。左岸の肩部には丸太杭が打ち込まれており、20本を数える。杭は先端部か痕跡のみが残っているにすぎない。右岸には斜面に1本が見られる。また右岸肩部には深さ約50cmのピットがある。溝中より出土する遺物はきわめて少ない。土器は磨耗を受け小破片となっており、ほとんどは器形を知りえない。わずかにH1を圓化したが流れ込みであろう。また右岸寄りで木製品(W1)が出土した。

F区は、第Vトレンチで検出されたピット群の部分を拡張した。F区で検出したピットは50数個を数える。ピットは平均して、深さ20cm、直径30cm前後の小型のもので、ピット内からの遺物の出土はない。これらのピットは第2号溝と同じように、黒色粘質土層堆積後に掘られている。これらのピットには、東西、あるいは南北に並ぶものがある。しかし、並びを見ると厳密には、お互に平行していない直角でもない。ピットの深さも20～60cmと差があり、ピット間の距離も統一性がないことから建物としては取らえにくい。F区ではこのピットの他に平面が長方形の竪穴2基と、不整形の竪穴1基が検出された。これらの竪穴もピットと同じように粘質黒色土層堆積後の遺構である。長方形竪穴は1.4×1.8m、1.2×1.6mで深さは約20cmを測る。不整形竪穴も2基の長方形竪穴と同様に平坦な底をなすが、出土遺物はなく、性格は明らかにしえない。なおE・G区ではピット、竪穴とも検出できなかった。

## 2. 出土遺物

**土器・磁器** H1はD区第2号溝より出土した。口径8.6cmの小型丸底壺の口縁部小破片である。頸部は小さくしまり凹状となっている。口縁部は頸部より屈曲し、わずかに外傾するものの直立ぎみにのび、端部は丸くおさめる。体部のほとんどを欠くが、張りは少なく、丸底へつながるのであろう。頸部屈曲部は内外面とも横ナデ調整され、棱は顕著でない。口縁部内面は横ハケ目をナデ消している。胎土には、わずかに砂粒を含み、土器のつくりは粗雑である。

Ji 1は耕作土から出土した。口径16.6cmの白磁碗である。口縁部は小さく引き出され水平となっている。釉色は灰白色を呈する。

木製品 W1はD区第2号溝の右岸より出土した。全長62cmで、一端には突起状のつくりをなす。他方は折れているために用途を知りえないが、断面は $2.9 \times 2.5$ cmの円形で柄状に加工している。全体に湾曲しているが、図上端部において湾曲は強い。この形状から枝別れ部を木取りしているように見えるが、板材からの加工である。樹種はシイノキ属である。

### 3. おわりに

那珂君体遺跡の条里区は、「那珂条里区」あるいは「福岡条里区」と呼ばれ、土地割りの方向はN-37°-Wである。この方向は天智天皇三年（664年）に築堤された水城の方位と一致しているために、これを基線として条里区が設定、施行されたとし、664年以降の年代が考えられている。日野尚志氏は大字那珂の「群久」という小字名に注目し、ここに方6町の那珂郡家を比定した。那珂君体遺跡は、日野氏の「群久」に当るが、現在の小字名は「君体」と書き「くんりゅう」と読んでいる。発掘調査では1条の溝とピット群を検出したが、先の推測を直接的に補強、実証するような結果とはならなかった。ただ第2号溝は条里復元線の方向とほぼ一致している。溝の時期は、那珂深ヲサ遺跡の土層観察を援用すれば、第2号溝が掘り込む粘質黒色土層の堆積は、古墳時代以後～8世紀後半頃で、ある時期の条里の溝としてとらえられよう。また同じ時期と考えられるピット群は限定された範囲にあり、逆にその限定性に遺構の性格を見い出すべきかもしれない。

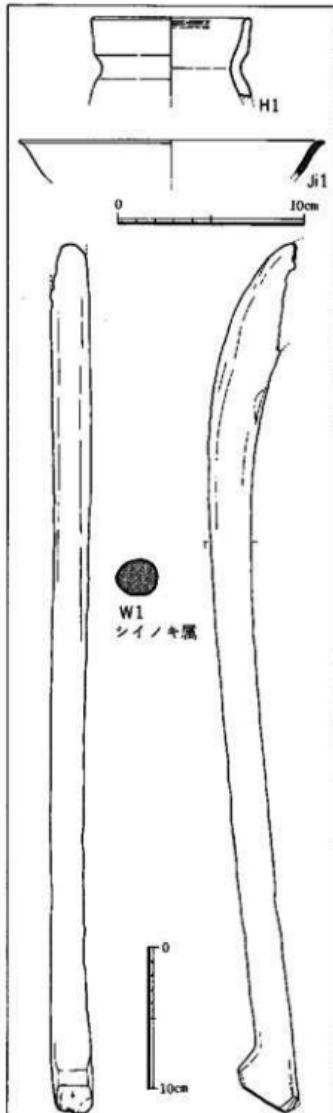


Fig. 5 出土遺物実測図（縮尺1/3-1/4）

### 第3章 君体遺跡から出土した木製遺物の樹種について

九州大学 農学部 林 弘也

松本 勝

福岡市教育委員会の依頼により君体遺跡から出土した木製遺物1点の樹種同定を行なった。木製遺物の寸法などは表Ⅰに示したように棒状の遺物である。木材の木取りなどは不明である。樹種の同定は遺物からプレパラートを作製し、光学顕微鏡により木材組織学上の特徴を観察し、樹種名の明らかな標本プレパラートと対照する方法によった。

観察した特徴の概略を述べる。

- 大きな直径をもつ管孔が成長輪界にそって多列に配列する環孔材であるが、多少放射方向に配列する傾向がある。晚材部では直径の小さい管孔が放射方向、斜め方向などに配列する。
- 道管要素のせん孔は単せん孔である。
- 軸方向の柔細胞は、横断面では、木材の接線方向に連なった短い線状の配列や散在状に認められる。
- 軸方向の柔細胞には結晶をもった多室柔細胞がある。
- 放射組織は主に単列放射組織であるが、集合放射組織も認められる。かつ同性放射組織型である。
- 生長輪は波状を示す。

上述した諸特徴からシイノキ属 *Castanopsis* sp. と同定したが、樹種名までは同定できなかつた。顕微鏡写真をFig. 1に示した。

表Ⅰ 木製遺物の諸元

用 途	法 量 (cm)		出上遺物
	長 さ	径	
柄	62.0	2.9	2.5 D区第2号溝

※福岡市教育委員会の資料による。

#### 顕微鏡写真について

- 説明文は次のように配列されている。Fig. 1 シイノキ属 *Castanopsis* sp. W1  
 (図番号) (和名) (学名) (資料番号)
- 写真は左から右にむかって横断面、放射断面、接線断面の順に配列されている。
- 写真の倍率は、横断面および放射断面は30倍、接線断面は72倍である。

図 版  
PLATES





(1) 那珂君体遺跡遠景（那珂団地屋上から）



(2) 那珂君体遺跡遠景（桜付団地屋上から）



(1) A区 第2号溝（北から）



(2) B区 第2号溝（南から）



(1) C区 第2号溝（南から）



(2) D区 第2号溝（南から）



(1) F区 (南西から)



(2) F区 (南東から)

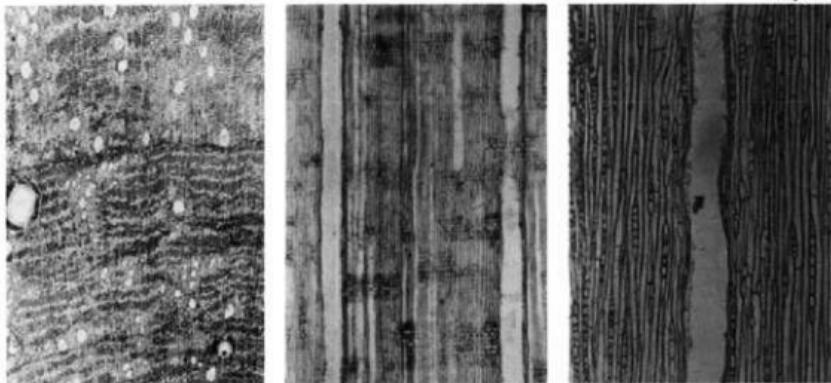
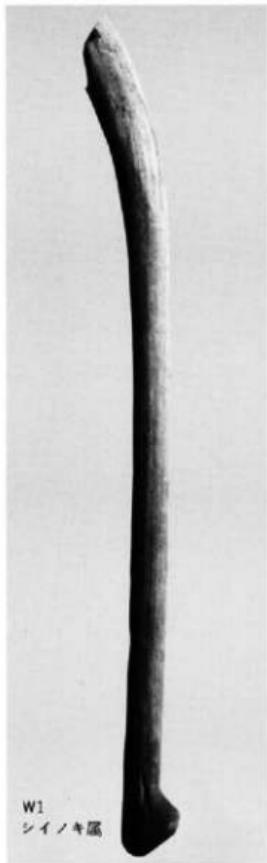


Fig. 1 シイノキ属 *Castanopsis* sp. (W1)



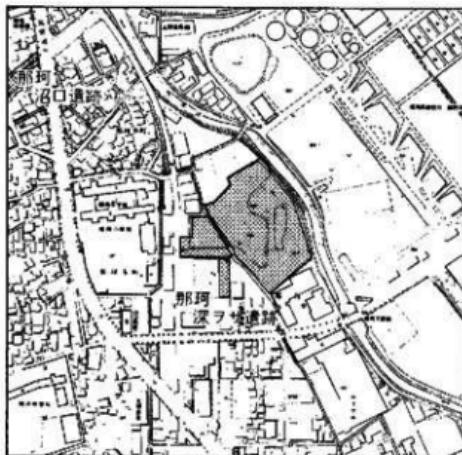
W1  
シイノキ属

(2) 木製品 (縮尺 1/4)



福岡市博多区

# 那珂沼口遺跡



1982

福岡市教育委員会

## 本文目次

	ページ
第1章はじめに .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査の組織と構成 .....	1
第2章調査の記録 .....	3
1. 調査の概要 .....	3
2. 出土遺構と遺物 .....	4
(1) 第1号甕棺墓 .....	4
(2) 第2号甕棺墓 .....	5
(3) 出土土器 .....	6
第3章おわりに .....	6

## 挿図目次

Fig. 1 那珂沼口遺跡全体図 (縮尺1/400) .....	2
Fig. 2 北壁土層実測図 (縮尺1/100) .....	3
Fig. 3 第1号甕棺墓 (縮尺1/20) .....	4
Fig. 4 第1号甕棺 (縮尺1/8) .....	4
Fig. 5 第2号甕棺墓 (縮尺1/20) .....	5
Fig. 6 第2号甕棺 (縮尺1/8) .....	5
Fig. 7 出出土器実測図 (縮尺1/3) .....	6

## 図版目次

	本文対照頁
PL. 1 (1)那珂沼口遺跡全景 (東から) .....	1
(2)那珂沼口遺跡全景 (西から) .....	1
PL. 2 (1)発掘作業風景 (南から) .....	3
(2)発掘作業風景 (東から) .....	3
PL. 3 (1)A区北壁土層断面 .....	3
(2)A区ピット .....	3
PL. 4 (1)第1・2号甕棺墓 (西から) .....	4
(2)第1号甕棺墓 (南から) .....	4
PL. 5 (1)第1号甕棺墓 .....	4
(2)第1号甕棺墓 .....	4
PL. 6 (1)第2号甕棺墓 .....	5
(2)第2号甕棺墓 .....	5
PL. 7 (1)第1号甕棺 .....	4
(2)第2号甕棺 .....	5

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

福岡市土木局は、かねてから都市計画道路竹下駅前線の整備を進めていたが、その一部の用地買収が済み、1980（昭50）年に工事に着手することになった。竹下駅前線は国道3号線から筑紫通りを横切り、国鉄竹下駅前を結ぶ道路である。今回工事着手された地点は、筑紫通り交差点から西へ約70mで、工事は旧道路の両側を拉幅し、舗装整備するものである。当地点は、那珂深ラサ遺跡の北西250mの位置にあり、小字名から那珂沼口遺跡とした。付近には那珂丘陵上にあることから遺構の存在は十分に予想されたため2月に事前審査担当職員が現地踏査したところ、工事は舗装直前の工程まで進められていた。北側拉幅部の断面には包含層があり、道路部には小ピットも確認されたことから、発掘調査が必要であることを土木局に連絡し協議に入った。この結果工事は昭和49年度の事業で時間的に制約されており、文化課の速応が求められた。このため、博多区下月隈宮ノ後遺跡を発掘中であった飛高と力武が担当することになり、一時発掘を中断して那珂沼口遺跡の発掘調査を実施することになった。

## 2. 調査の組織と構成

調査委託 福岡市土木局道路部街路課

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課

志鶴幸弘（文化部長）

井上剛紀（文化課長）

三宅安吉（埋蔵文化財第一係長）

柳田純孝（埋蔵文化財第二係長）

古藤国生（事務担当）

飛高憲雄・力武卓治（調査担当）

発掘作業 資料整理

荒津孝治 岩永真弓 江越初代 河野徹也 小島由美子 関加代子

関政子 鶴田サヨ子 藤たかえ 花畠照了 藤田太 溝口博子

実測栄治 安武裕子 山内タツ子

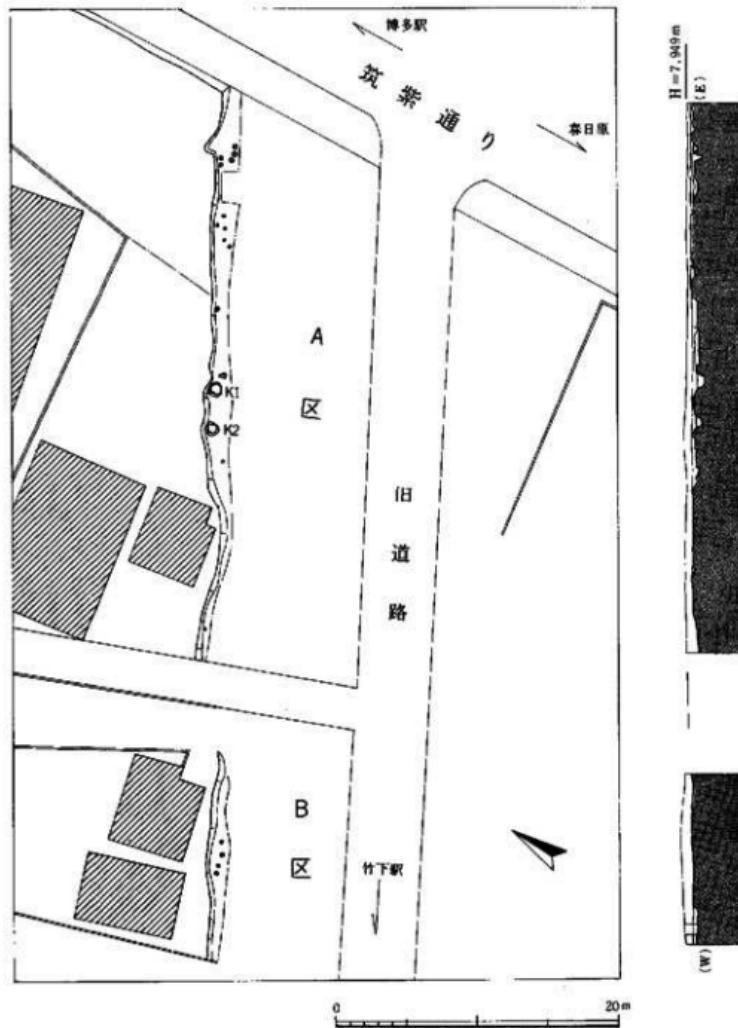
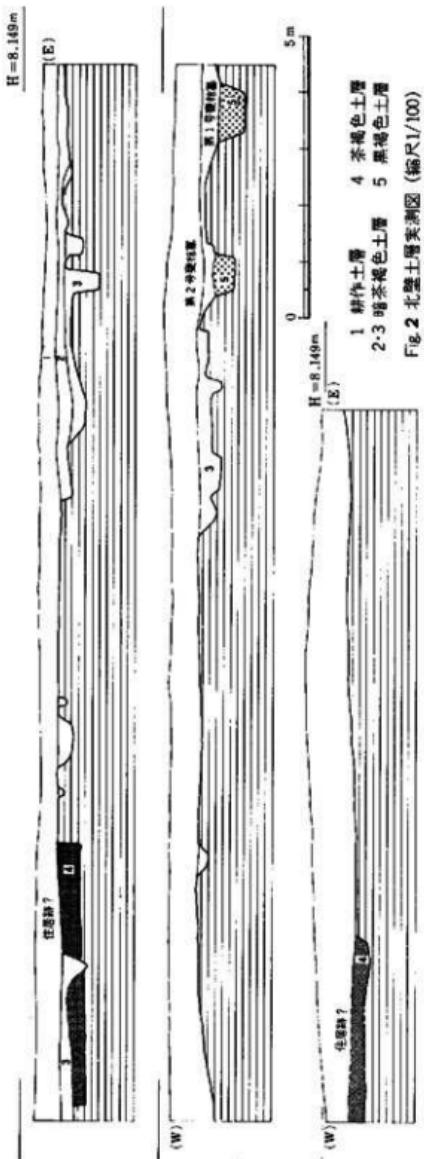


Fig. 1 那珂沼口遺跡全体図 (縮尺1/400)



第2章 調査の記録

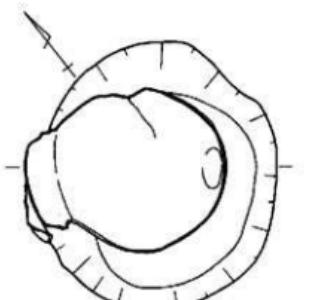
## 1. 調査の概要

発掘調査は1980年3月10日から開始した。調査対象地は筑紫通り宮間交差点から西へ約70mまでの1100m<sup>2</sup>である。工事は幅5mの旧道路を幅20mにするもので、旧道路より南側は民家が立退いているものの、旧道路と同じ高さをなし遺構はすでに削平されているものと思われた。旧道路より北側の幅約12mは、畠地だったので旧道路面より約60~70cm高く旧地形を残しているものと考えられた。そこで旧道路より北側拡幅部を発掘区に設定し、交差点より西へ40mをA区とし、私道を挟んで西へ30mをB区とした。発掘調査はA区の旧道路に接する部分から開始したが、地下埋設管の工事等で、完全に遺跡は削平破壊されており、結果的には北側端の崖面と、歩道部の幅2mのみの調査となつた。A区歩道部も削平されているものの、かろうじて数個のピットと2基の竪墓を検出できた。ピットはB区でも検出できたが、A区西側に集中している。これらのピットからは古墳時代の須恵器、土師式土器の小破片が出土した。また崖面の土層観察では、茶褐色土の落ち込みが2か所で見られ、垂直な壁をなしていることから住居跡ではないかと推測した。

## 2. 出土遺構と遺物

### (1) 第1号墳棺墓

84×95cmの不整円形の墓壇に50度の傾斜をもって埋置されている。壇底は平坦面をなし、壁の立ち上がりは垂直に近く掘られている。墓壇の一部は調査対象地外に入りこんでいるため、上部土層との関係が観察できた。喪棺は上部を欠いているが、この削平は暗茶褐色土層の堆積前に行なわれている。喪棺は墓壇の北側に片寄って埋置されている。上棺の覆口縁部破片が残っていることから、本来は2個の蓋を用いた複棺で、下棺の口縁部が打ち欠かれていることから覆口式と思われる。



H = 7.149 m

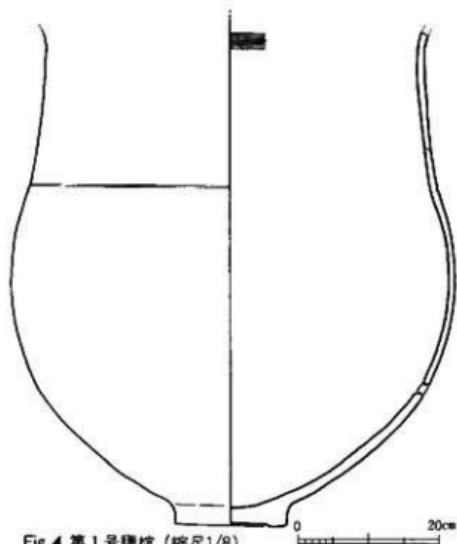
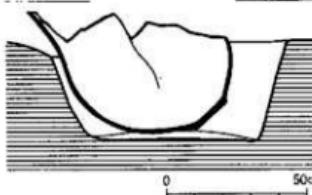


Fig. 4 第1号墳棺 (縮尺1/8)

Fig. 3 第1号墳棺墓 (縮尺1/20)

上棺は口縁部のみが残っている。口径は58cmで、すばまりの小さい頭部から、そのまま緩く外湾している。口縁は段をなさず、下端には刻目を施し、頭部には2条の沈線をめぐらしている。内面はハケ日をナデ消している。

下棺は、現在高70.5cm、底径10.3cm、胴部最大径64cmを測る。口縁部は頭部との接合部より打ち欠かれているが上棺のように緩く外湾するのであろう。底部は円盤状の厚いつくりをなす。胴部最大径は、やや上位にあり、肩部に1条の沈線がある。頭部は内傾してのび、上部内面には横ハケ目が見られる。胸部には焼成後の穿孔がある。

## (2) 第2号甕棺墓

第2号甕棺墓は、第1号甕棺墓の西約2.5mに位置している。第1号甕棺墓と同じように暗茶褐色土層の堆積以前に上部が削平されている。この暗茶褐色土層は、住居跡と推測した落ち込みの茶褐色土層も切っている。茶褐色土層からは古墳時代の須恵器小破片が出土している。第1号甕棺墓の主軸方位はN-52°-Wであるのに対し、第2号甕棺墓はN-16°-Eで方向を異にしている。また埋置角も44度で水平に近くなる。墓塙は9.0×9.2cmの円形で、南側は垂直な壁をなすが北側の壁は緩かな傾斜をもって掘られている。棺の上半分以上を欠いているため、単棺か複棺かは明らかにしない。

棺は口縁部を欠いている。現在高86cm、底部径16cm、胸部最大径64cmを測る。器高、胸部最大径とも第1号甕棺下蓋と大差ないが、器形の特徴にはいくつかの違いを指摘できる。底部は円盤状ではなく、胸部とは明瞭な境をなしていない。胸部最大径の位

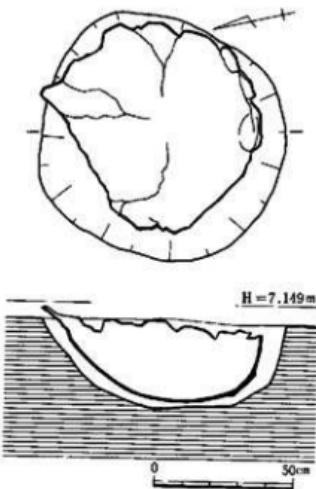


Fig. 5 第2号甕棺墓 (縮尺1/20)

置は第1号甕棺下蓋よりもさらに上位にある。肩部には浅い沈線が1条めぐっているが、胸部から頸部へは丸みをもって移っており、沈線以外はほとんど区別がつかない。頸部は内傾が強く、上部でよくすぼまっており、外反する口縁部がつくのであろう。胸部中位には焼成後の穿孔がある。器面の調整は、底部より約20cmまで縦ハケ目調整で、これより上部は粗い横ナデ調整。胸部下半の器面は皺状に小さな凹凸がめだち、製作時の重さのせいか異常に膨んでいる部分もある。

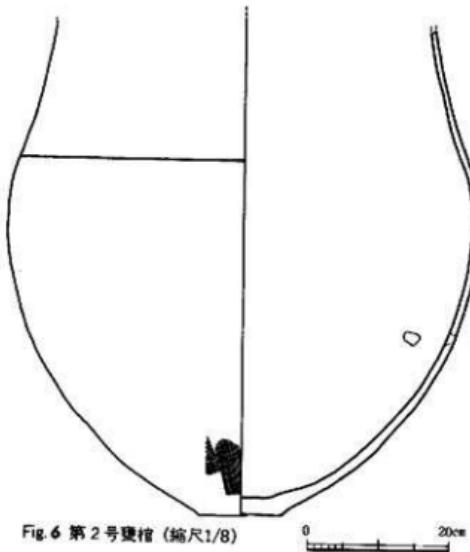


Fig. 6 第2号甕棺 (縮尺1/8)

## (3) 出土遺物

遺物は、A区歩道部のピットや北壁断面より出土したが、いずれも小破片で図化できなかった。図化した4点は、削平された排土中より出土したものである。

Y1は弥生式土器で、甕棺の口縁部であろう。口縁内側に帯状に粘土を貼りつけ、下端部に刻目を施している。粘土帯の上面はわずかに凹状となっている。器面の調査は、外面がナデ、内面は粗い横ハケ目調整である。胎土は石英砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で黄茶色を呈している。

Su1は須恵器の杯蓋である。口径14.6cmで、口縁部は丸く、わずかに直立する。天井部との境は明瞭でない。胎土は小砂粒を含む。焼成はよく、うすい灰色を呈する。

Su2は須恵器の小破片で、扁平なつくりであるが杯身と考えた。蓋受け部は小さく水平に突出している。立ち上りの長さは1.4cmで、中位で屈曲し、口縁部は丸くおさめている。器面の調整は粗雑で、砂粒が露出している。焼成はよく、灰色を呈する。

H1は土師器の額把手である。断面は径2.6cmの円形で、ヘラ状工具で整形している。胎土は小砂粒を含み、赤茶色を呈する。把手は、上に反っていはずして水平に突出する。

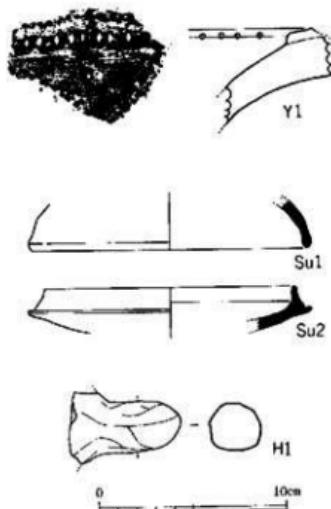


Fig. 7 出土器実測図（縮尺1/3）

### 第3章 おわりに

那珂沼口遺跡の発掘調査は、下月隈宮ノ後遺跡の発掘を中断して着手したが、道路工事は予想以上に遺跡を破壊しており、2基の甕棺墓とピット数個が残っていたにすぎない。2基の甕棺墓に用いられている甕は、弥生時代前期甕形土器の形態的特徴をわずかに持つており、弥生時代前期後半の時期である。他にY1が出土していることから数基の甕棺墓が存在していたのであろう。北壁上層ではA・B区に2基の住居跡らしい落ち込みが見られた。A区の落ち込みは、両端とも垂直な壁をなし、幅は4.7mである。壁の高さは約40cmであるが、壁溝らしいものは見られない。住居跡と断定はできないが、遺跡は広範囲に及ぶのであろう。今後、工事は竹下駅に向かって計画されており、今回の反省を基に慎重な対応が必要である。

図 版  
PLATES





(1) 那珂沼口遺跡全景（東から）



(2) 那珂沼口遺跡全景（西から）



(1) 発掘作業風景（南から）



(2) 発掘作業風景（東から）



(1) A区北壁土層断面



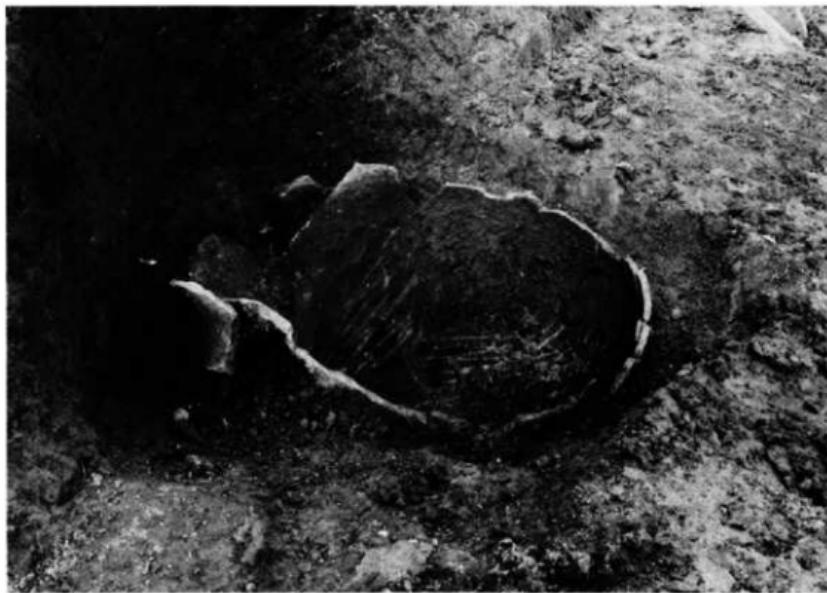
(2) A区ピット



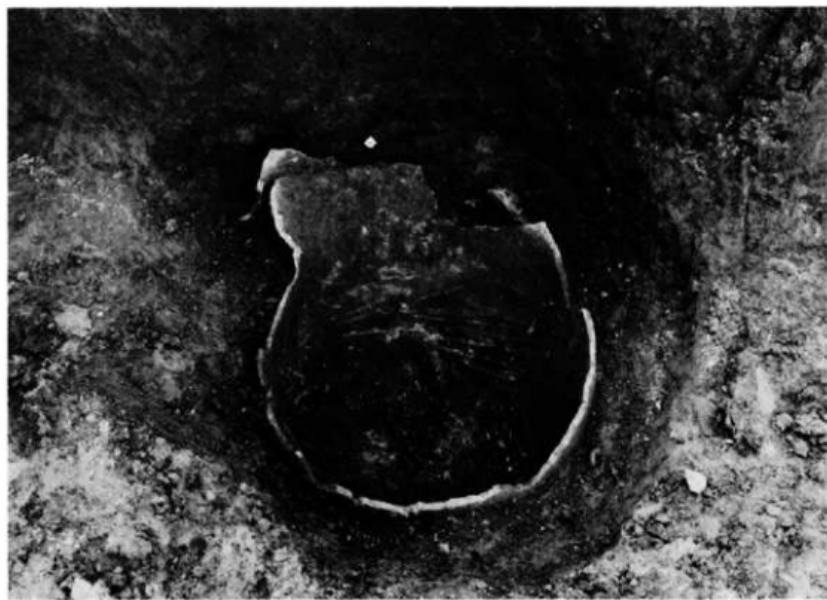
(1) 第1・2号墳墓（西から）



(2) 第1号墳墓（南から）



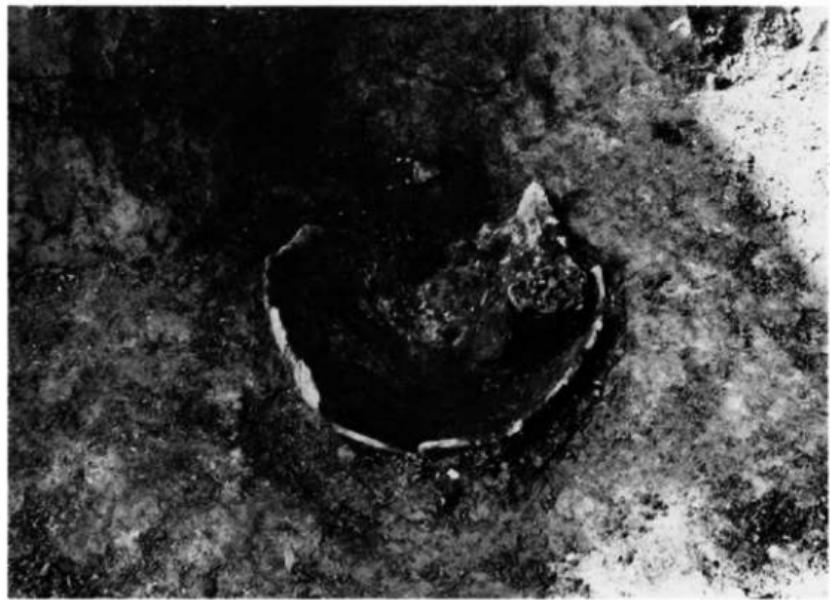
(1) 第1号墓  
石棺墓



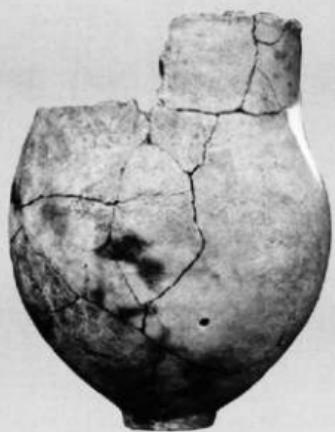
(2) 第1号  
石棺墓



(1) 第2号猩棺墓



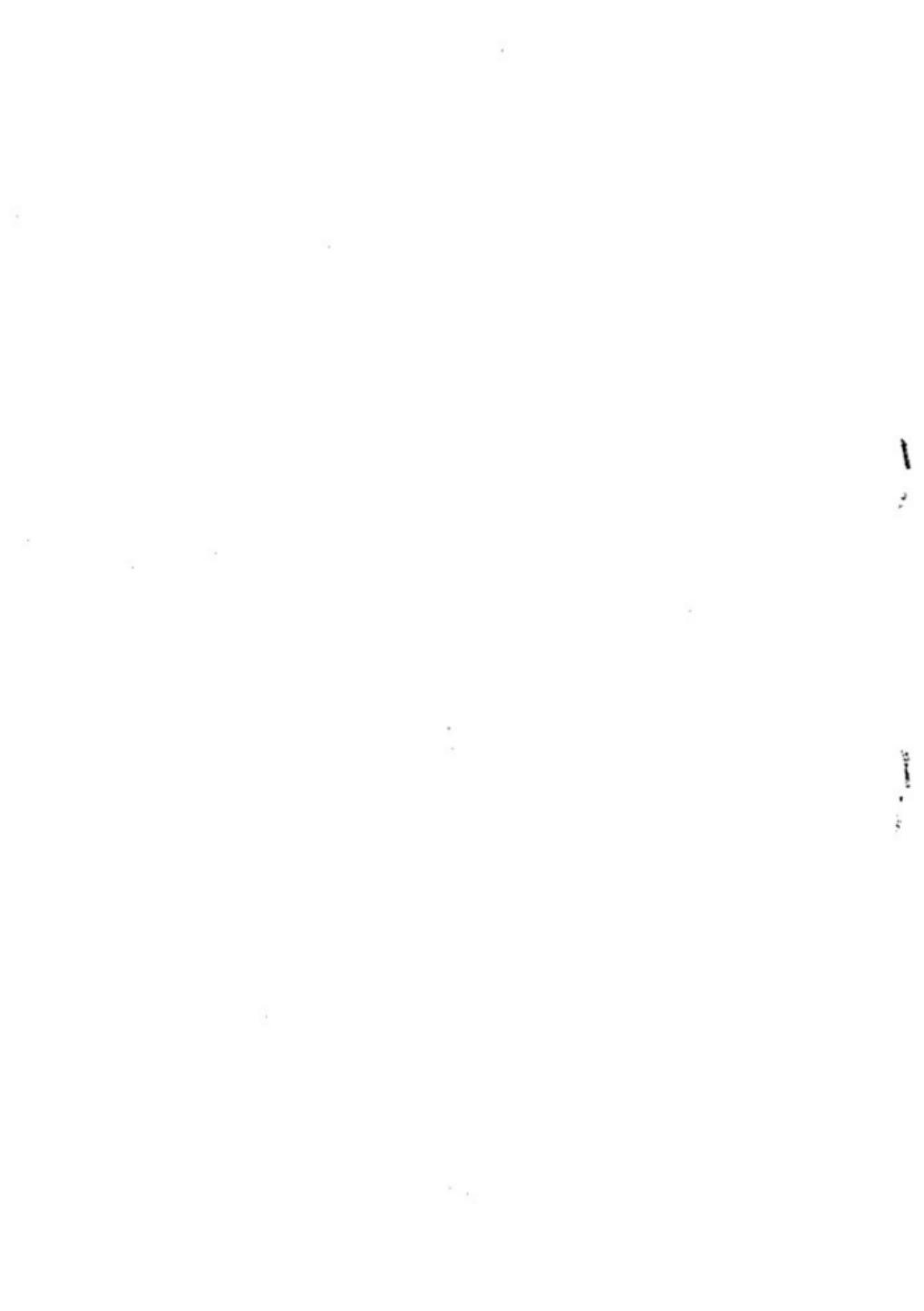
(2) 第2号猩棺墓

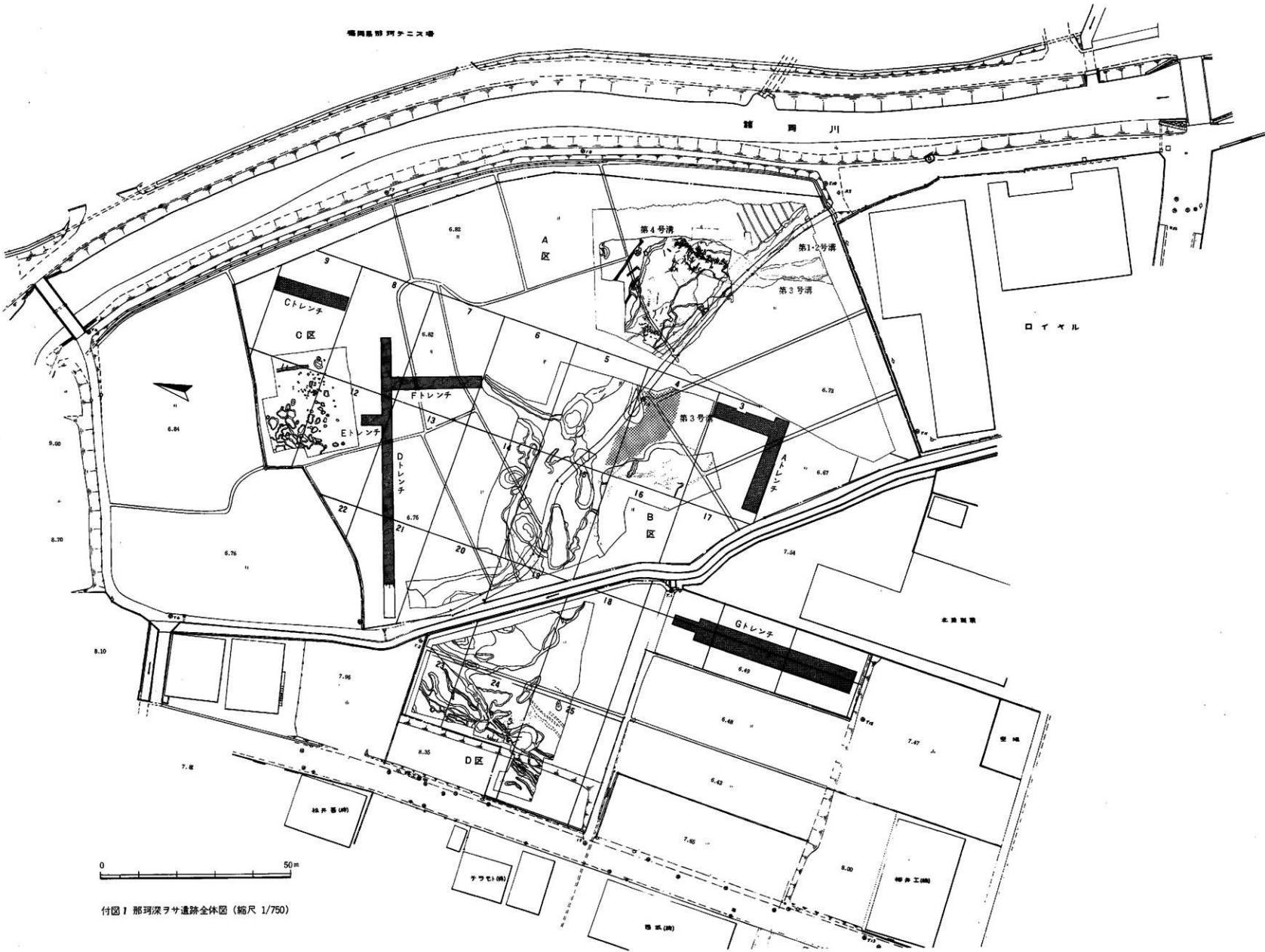


(1) 第1号墓棺



(2) 第2号墓棺



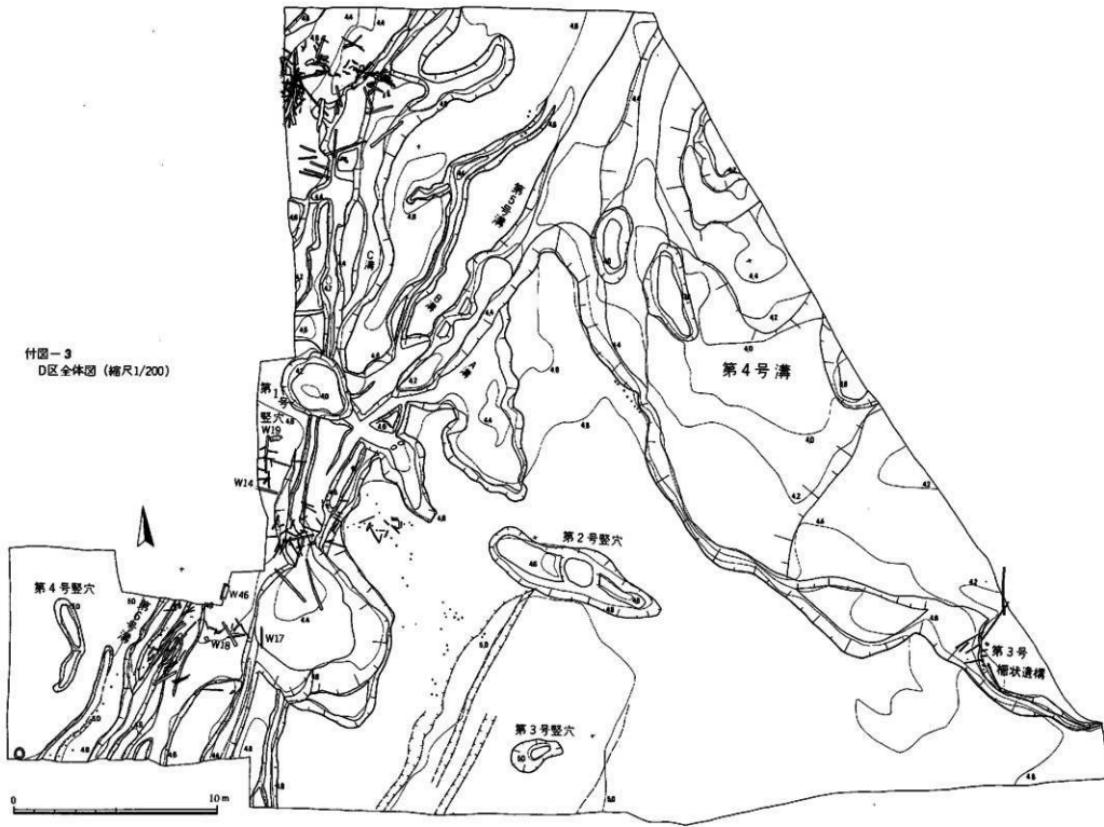


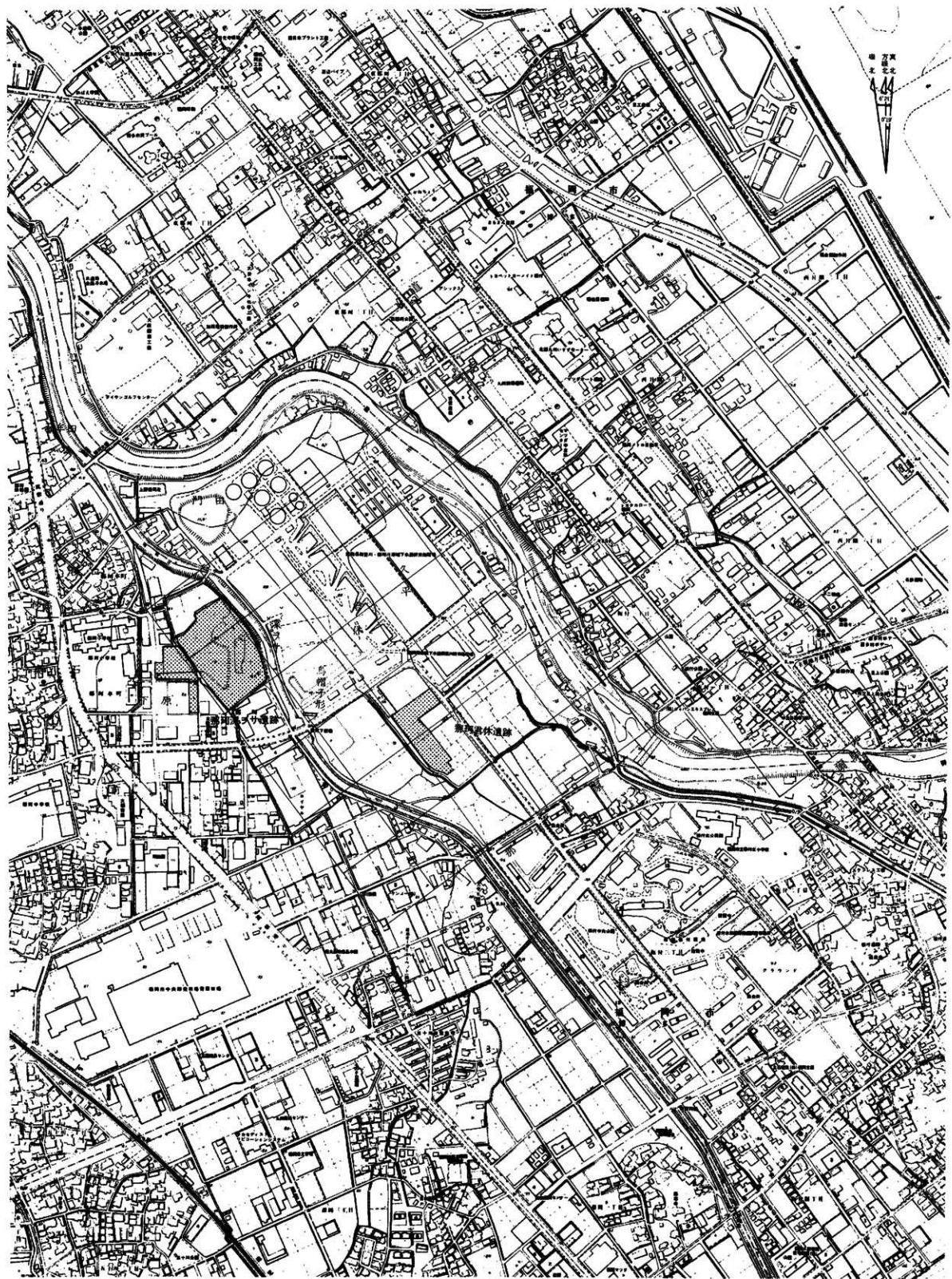
付図1 那珂深ヲサ遺跡全休図 (縮尺 1/750)



付図-2  
B区全体図 (縮尺1/200)

付圖一3  
D区全体図 (縮尺1/200)





付図-4 推定郡河郡家城(A-B-C-D), 推定久留駅(C-E-F-G) (縮尺1/5000)  
(日野尚志氏論文をもとに作成)

0 500m

福岡市博多区  
**那珂深ヲサ遺跡**  
II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集  
1982年3月31日発行

編集 福岡市教育委員会

発行 福岡市中央区天神一丁目7-23  
電話(福岡)711-4667(文化課)

印刷 (株)西日本新聞印刷  
福岡市博多区吉塚八丁目2-15  
電話(福岡)611-4431(代表)

那珂深ヲサ遺跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集

1982

福岡市教育委員会